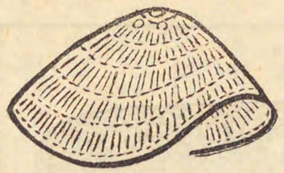
○三田村　「色道大鑑」にもある。
○野々村　「くら事」は人の目をくらますことですか。
○三田村　表向に出來ないことでせう。「くら宿」なんていふのもこれだ。
○山崎　祕法ですね。「なんぽうおそろしき物語にて御座候」、これは「道成寺」のワキの語り仕舞の言葉です。
○野々村　この「くら事」とは、うまい名稱をつけたものですな。
○三田村　名が洒落れてゐますね。
○山崎　印を見ると立ぐらみが起るなんか、就中いゝ。
○水谷　こゝは說明つきだから助かつてゐるが、說明が無かつたらとてもわかりませんな。
○眞山　西鶴の造語なのでせうか。
○三田村　實際何かありましたらう。
○野々村　この時代のものはよくかういふことを遣りますからな。
○山崎　「美しき尼」といふのは引手で、「なりさうなるおかた達」といふのも女でせうね。
○木村　「ぱつぱの大小」これは鮫鞘で圖を入れませう。「鮫皮精義」に「パツパ沙皮の形は、櫻花

鮫皮精義所載

のごときものなり、最花カイラゲも櫻の花に似たるといへども、是と同じからず、花カイラゲの花は其かたち分明ならず、べた〳〵としたる大粒塗上て後に出るなり、パツパはさなから櫻花の風に散りたるがことくなるを以てパツパと名付たるならんが未詳」とあります。「盧無僧編笠」是も後世には天蓋といつて形も大分違つてゐます。二三の繪を入れておき

竹田からくりの番付『りよ暦賣』

北尾重政画



「千世の友鶴」所載

京童巻四
あくまで上巻皇帝ものがたり

「筠庭雑稿」所載

筠庭雑考。延享寛延の頃迄もあみ笠すそ開きをれり、前の窓あり、今浪人乞兒の著るに似たり、我衣に薦僧笠享保より小ぶりにて深く作ると云へり、小ぶりとは言がたし、今の如くなれるは寶暦の末よりなりけむ。

ませう。「千世の友鶴」の頭書に、「……今それをまなひて居士のすかたにて白きまへだれをまきくまがいがさをふかくきて町々のかどにたちて尺八をふきくわんじんをする」とあつて、圖のやうな笠を被つてゐます。

○鳶魚副書　むかし〳〵物語に「御旗本中、何れも編笠著る、萬治の頃より玉縁、其後寛文の頃松坂といふ笠、延寶の頃、熊谷笠薦僧笠抔時花て八分ぞりはやる、天和貞享の頃より編笠次第に止」とあつて、簡明に沿革が知れる。また色道大鑑は「熊谷笠の事、江戸に多し、三谷へかよふ武士の奉公人好みて是を著せり、江戸にても町人はさして著せず、上方筋にもまれ〳〵に是を好む者あり、六法むきはさも有ぬべけれど、先すがた野卑にして、人の目立事甚多し」と難じ、嶋原へ通ふ者は必ず編笠をかぶれと、新町へ通ふ者は著せざるか多しとも云へり、それは何故か、まして形の宜しからぬ笠の江戸に行はるゝは何故か、吉原失墜（延寶二年板）の註は斯う云つて居ます。

○こもがさ　こもそうのかさなり、むかしはかやうのものまでいまとはかはりぬ、ふち一もんじとて、すぐなるをかぶり、こゞみたるは、こもそうがさとてきらゐるか、このごろはこれをもつぱらにする事いかん、あるものゝいわく、いまよしはらは里はなれたるゆへ、うへつかたも歩行にて、しのびおはしますが、人におもてをみせじと、こゝみたるをもちひられたり、それを見や

好色一代男

う見まねぬるゆへなりとぞ。
是で譯が分つたやうに思はれます。
洞房語園集上に有る日本堤謠に「玉ふちの一文字かさは稀也、熊谷笠は深く、八所縅は淺し、何れも面を覆ふ」といふのも、此の際見捨て難い。
○青果附記　後室もやう　嬉遊笑覽に、「又後室もやうといふものあり。是は模樣を白あがりにして、上繪を墨ばかりにて書きたるなり」とて、一代男畫のつり狐の本文を引き、延寶八年の洛陽集より一磯のみるめ後室もやうや霞のきぬ　桃林」の句を出せり。

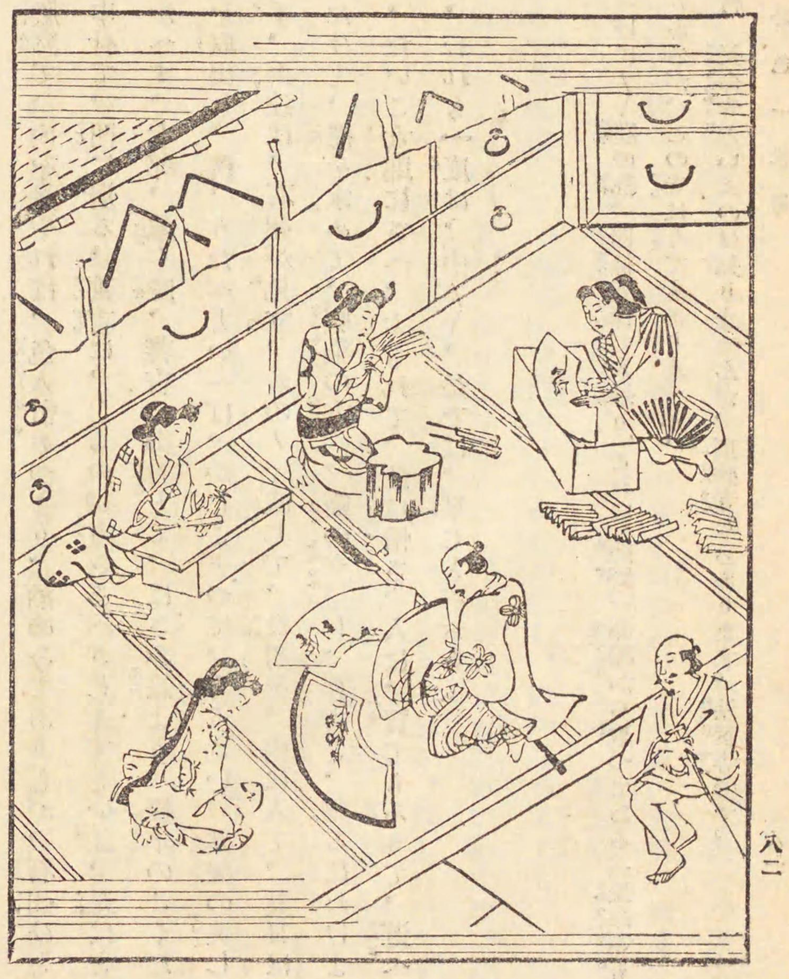
三月に目

げに〳〵花の都、四條五條の、人通り、むかし見し、山の姿もかはり、長明寺も、こゝへひけ、川原おもての、石垣、慈鎮法師の、よまれし、眞葛が原と、いふ所迄も、建つゞきて、我戀は、唯、御上家の女中と、浪屋が腰懸に、しばらく居て、遠國とは違ふて是は〳〵、それはと、見るに、下には、水鹿子の、白むく、上には、むらさきしぼりに、青海浪、紋所は、銀にて、ほの字、切ぬかせ、五所のひかり、帶は、むらさきのつれ左卷、結びめ、後に、絆目のすみに、鉛の、しづを入、髮は、水引懸て、黑繻子のきどく頭巾、まづは、首すぢの白き事、木地のつづら笠に、しろき紐を、上にむすばず、足踏は、白綸子に紅を付、ぼたん懸にして、ばら緒の、藁草履はきつれて、二十四五人、同じ年比、同じ風俗、供の女も、男もはるかに、さがりて、ゆく、是は何人ぞときく、さる御所方の、御女郎樣達、あのうちに、上ひとり、樣もまぎれて御入のよし、どれとも、見分がたし、毎日の御遊山、かはりたる、御物ずきとかたる、けつこうな事かな、此跡、松本名左衞門申せしも、よい夢とや、みる事も、きく事もならぬ事を、おもふより、世之介が、智惠自慢、自由になるものこそと、あふぎやの女にいまはやる、地などを、もつてまいれのよし、宿に、呼よせ、是はといふ、雨のふる日の淋しさか、又は、高野山で、見たらば、堪忍もならう、京に來て、よい事見た目で、大形の事はと、けされて、是も、かいやりて、とかくは、夢山樣の御望、

嶋原へをせとて、隠れもなき、善吉申は、世之介、はじめての、遊女狂ひ、兩人共に此善吉、仕懸を見ならへと、はさみ箱持、小者と召つれ、よき風の大男、袴高く、すそとつて、大小よしやがゝりに、編笠、ふかく著て、指かゝる、其比は、正月十六日此里に、人形見世出して、揚屋の、門々をしわけかたし、いかなる太夫も、十兩、十五兩が、もてあそびを、調え、なぐさむ事ぞかし、其日の、大臣めいわく也、此豊なる賑ひ、こゝろなき、藤六、見齋、粉徳、麥松も、うき立ばかり、見えわたりて、おもしろし、善吉男は今なり、江戸では、小太夫に、ほれられ、迚も、名の立次手に、人の、ならぬ事をせんと、或時、雪の、かはいらしく、降日歸るを、太夫、まくり手になり、からかさをさし懸、しかも、はだしに成て、門口まで、善吉おくる事、前代には、ためしもなし、是沙汰になりて、親方せけども、それもかまはず、身を捨て、女の方より、ふかく、歎く程のおのこ、思日の外、よき所あれば也、色町に、此人、しらぬ者なし、此里には、しるべもなく、丸太屋の、見世のさきに、はさみ箱をおろさせ、腰懸て、内を見やれば、色人計あつまり、酒のみてありしが、石州ひとつうけて禿に申付て、門に居る、善吉に、しらぬ御方さまへさしますといふ、是はと、ふたつ飲てかへす、女郎、戴く時、善吉、御肴とて、はさみ箱より、接竿のこくたん、六すぢ懸を取出し、僕、うたへといへば、かしこまつて、らうさい、其聲の美しさ、彈手は上手、去迚は、石州が見立、おの〳〵感じて、彼男を、内に入て、其日は、是非にあいたひと、戀を求めて、馴染の方へ、斷の文遣し、善吉と、語るにわけよし、世之介は、たいこ女郎にさへ、ぶられて、此口惜さ、人に、買てもろうて、遊べき所にあらず、おれも一度は、中〳〵、是では、果じとぞおもふ

○林　「げに〳〵花の都、四條五條の人通り」これは「熊野」の謠から取つてゐる。「長命寺もこゝへひけ」とあるが、この寺は今でもありますか。

○野々村　長命寺といふのは知りませんが、頂妙寺ならあります。法華寺です。



○青果附記　長妙寺、頂妙寺なるべし。雍州府志には「頂妙寺　在二二條河原一日蓮宗二十一箇寺之隨一而日祝之開基也（中略）斯寺舊在二高倉中御門北一寛文十三年有レ故移二東河原一」とあり。京都坊目誌には、「寛文十三年、皇居に接近するを以て、今の地に再轉す」と出たり。

○林　「慈鎭法師のよまれし眞葛ケ原」これは新古今にある「わが戀は松をしぐれの染かねてまくずが原に風さわぐなり」といふ歌で、そこで「我戀は唯……」と書いた。「下には水鹿子の白むく」はよくわかりません。或は少し水色がかつたものかと思ひます。銀でほの字の紋所を切拔かせて、五所に縫つてあるから、それが光る。「つれ左卷」もわかりません。「きどく」巾頭これは圖があります。目だけ見えるやつでせう。「木地のつゞら笠」は塗がかけてないのだらうと思ふ。これが流行の風俗でせう。ぼたん懸の足袋は、紐で結ばないやつです。それは何人であるかと聞くと、さる御所の女郎方で、その中に御主人樣もおいでになるといふ。「松本名左衞門」は？

日本永代藏所載

○三田村　京都の七檜の一で、芝居百人一首にも出てゐます。

○林「申せしは……」といふのは、私にはわかりません。あゝいふ人達はいくら焦れても駄目なものだから、自分の自由になるものをといふので、扇屋の女を宿に呼寄せて、これはといふ。地紙女もやはり賣色でせう。これは雨の降つて淋しい日か、高野山でもなければ辛抱出來ないといふので夢山の望みで嶋原へ出かけることになる。「隱れもなき善吉」といふのは幇間でもないんですか。

○山崎　なか〳〵通人のやうですな。後のくだりを見ると……。

○林「はじめての遊女ぐるひ」といふのはどういふんです？

○木村　世之介は嶋原に於てはじめて遊ぶんでせう。

○林　「よしやがゝり」も知りません。

○水谷　「我戀は」といふのは、夢山の希望なんぢやないですか。それはとてもいけないといふので扇屋の女を見せたが、これは氣に入らない。それから嶋原へ行くことになつたんでせう。

○三田村　自分の辯する女は御所方より外に無い、といふことなんですな。「水鹿子の白むく」は「上にはむらさきぼりに青海波」とあるから、水鹿子の間著で、肌つきが白無垢なんぢやありませんか。それから紋所のことは「柳亭記」に「好色萬金丹」を引いて「釘拔の眞鍮紋あれたる駒の中形小紋」といふことがあると云つて、更にこの本文を引き、「女は銀の薄かね男は眞鍮の薄金にて紋所をつけし事ありしなるべし、今もたま〳〵小兒の羽織などにあり」と云つてあります。つまり金屬で打拔にした紋所で、その名殘が芝居でやる奴さんの背中の眞鍮の紋に殘つてゐる。「むらさきのつれ左卷」は上著が紫しぼりの著物だから、同じ色の帶をしてゐることを云つたのです。「木地のつゞら笠」は塗笠に對した言葉で、「嬉遊笑覽」にあります。「俗つれ〴〵」の「水口の八兵衞ざしの木地のつゝら笠に……」とあり、「和漢三才圖會」にも「塗レ笠用二薄片板一紙張レ之漆二黑色一」とあつて、後の葛籠は竹で編んであるが、あれが薄い板で出來てゐるんでせう。

○林　檜笠みたいなものですな。

○山崎　「つゞら帽子をしやんと著て」といふ狂言の小歌がありますね。

○林　そればツヅレの方ぢやありませんか。

○三田村　足袋へボタンを嵌めることは寛文位からあつたやうです。「嬉遊笑覽」に寛文十年版の「浮世物語」の「うねさしの蹈皮にぼたんを入」とあるのや、「御傘」の「蹈皮などの緒にボタンといふ物あり」といふのを引いてあります。

○林　ボタンはなか〳〵古いでせう。「足蹈は白綸子に紅を付」とあるから、これは裏の紅い、綺麗なやつです。

○三田村　芝居の所作の時なんかにあるでせう。
○眞山　成程、私も見たことがあるやうです。
○山崎　「上にむすばず」といふのは？
○木村　紐を笠の上で結んでゐるのもあるから、その反對につゞら笠であるから、さういつたんでせう。
○三田村　御所方の風俗を結構だと云つて、松本名左衞門が褒めた。ものにしたのは夢に見るより外はないが、夢に見たのでも惡くはない……。
○林　「夢に見てさへよいとや申す」といふ唄がありますね。これは何か實際利いてゐることがあるんでせう。
○三田村　扇屋の女は前に出たスアヒのやうなものです。「呼よせ是はといふ」
○山崎　譏つてゐるんぢやありませんか。呼び寄せてみた處が、コレハ〳〵、こんな女どもぢや駄目だといふんで……。
○三田村　嶋原へまだ行かなかつたんですかね。
○水谷　小學中學あたりで、高等教育はまだだつたんでせう。

○山崎　「よしやがゝり」
○三田村　わかりません。もう少し調べて、見つかつたら後から足しませう。
○木村　「川原おもての石垣」といふのは加茂川の護岸工事ですか。
○林　あの邊に遊女屋が建つたので、そのうちの浪屋といふ家の腰掛にゐたわけなんでせう。
○眞山　「諸國咄」か何かのうちに、長明寺の門に水が上つた、といふことがあつたと思ひます。
○山崎　それは「仁王門の綱」てんでしたね。……原本にセイガイナミとありますか。かういふ模様などの場合には、わざとナミと云ふ筈です。
○木村　セガイナミでせうね。古い塗師の青海勘十郎を、セガイと讀んでゐます。
○山崎　セイガイハといふと樂の名で、それとは違ふ場合なんですね。
○木村　鳥邊山にも「女肌には白むくや、上に紫、藤の紋」といふことがありましたな。また一つの流行色ですね。
○三田村　上流の人の著物は、重ねないことはない筈です。
○山崎　紋を金で切拔いて著けるのは、私などにもおぼえがあります。尤も私のは五つ紋ぢやない、背中の上部の一つだけでしたがね。小判形の眞鍮製で、上と下とに針の通る穴があつた、まあ迷子

札みたいなものです。

○眞山　仙臺の田舍の方へ行くと、まだあります。

○山崎　和歌山ぢやもうありません。今思へば欲しくなつて來たが、その頃はあれが厭でしてね。外へ行つちや、よく引ちぎつて歸つたものです。但しその頃出來たものでなく、昔から家にあつたやつのお讓りを、私が總領だといふので著けられたものらしい。私の五つ六つ位の時までまだあつたとおぼえてゐます。

○三田村　今ぢや芝居の奴さんの衣裳を見るより仕方が無い。

○林　正月十六日はこの里に人形見世が出るので、人が羣集して押分けがたい位である。麥松と書いて、ムギマとよんでありますね。さういふ田舍の名も無いやつまで、面白さうに見える。「雪のかはいらしく降日」といふのは、ちらほらかな。小太夫が傘をさして、門まで送つて來た。かういふことは今まで例が無いので、大に評判になつて、抱主が堰いても一向構はない。これはその男に存外いゝところがあるからだらう、といふのですが、この「あればや」は「也」か「や」か私は「や」ぢやないかと思ふ。「內を見やれば色人」は遊女達でせう。そのうちの石州といふのが、門口に腰かけてゐた善吉に盃を一つささうといふ。黑檀の繼竿はいゝが、「六すぢ懸」といふのは何です？

○三田村　喜多村筠庭は三味線の絲の太さだと云つてゐますね。「洞房語園」に「江戸町二丁目揚屋喜齋の六筋かけ」とあるのや、「西鶴置土產」の「番町のさる御方の隱し藝に八筋かけを引かれた」といふのや、それからこの文章を引いてあります。後には三味線の絲の太さは目方でいふやうになつてゐますが、これは六筋ぶりある絲、といふことになるんでせう。

○松本　繼竿の三味線がありましたか。

○三田村　あります。これは黑檀のです。

○林　前の清水か何處かのは樫の木だつたが、さすがにこゝは黑檀ですな。その日は是非善吉に逢ひたいといふことで、約束のあつた方へは斷りの文を遣つて、それから逢つて話して見ると大分工合がいゝ。然るに世之介は太鼓女郎にさへ振られて、到底人に買つて貰つて遊ぶんでは駄目だ、自分もこれでは果てられない、と考へたんでせう。——大に憤を發したわけだね。

○木村　「人形見世」は人形市ですか。

○三田村　これも筠庭はこの文を引いて、「其比は」といふのを、承應、明暦頃だと云つてゐます。「色三味線」には「過し頃までは毎年定て正月十六日に人形みせ出して」とあつて、已に無くなつてゐるやうに思はれる。何時頃まであつたものか知れませんが、延寶九年に出た「嶋原紋日朱雀諸分鑑」

などを見ても、人形見世のことは書いてない。尤も延寶はさびれた時分ですが、恐らくその以前に無くなつてゐるんだらうと思ひます。

○鳶魚副書　天和二年版の島原大和暦には「十四日よりは人形みせとて、揚屋町そのほか道筋なとに人形のみにあらす、もてあそび物の賣物をかざる常の事なり。しかしなから今は昔程にはなきぞ、にぎやかさも事かはりぬ」とありますから、延寶までのものやうに當席で申したのは往けません。それのみか寛政十三年版の一目千軒に「人形市はいにしへ大和の國ふるの神社の邊にて有しが、溫傷なるよし、其後諸方にて春毎に在、されど定りたる所も聞へずなりにき、今此くるわには冷泉萬里小路にひらけしより以來絶ず、今に道すじにおゐて正月十六日より日數さだまりなし、春中の慰とす」とあります。して見ると只だ廓内の人形市、揚屋町の露店が何時まで出たかといふだけの問題になります。

○林　「その比は」と云ふんだから、唐犬權兵衞時分まで遡りやしませんか。

○青果附記　人形みせ　島原大和暦に「十四日より人形みせとて、あげや町そのほかみちすぢなどに人形のみにあらず、もてあそび物のうり物をかざる。つねの日なき事なり。しかしながらいまは、むかしほどになきとぞ。にぎやかさもまたことかはりぬ」口とあり。天和の頃までは衰微しつゝも

なほ人形みせ行はれたるものならん。

○木村　この名前を擧げたのは何かありますか。

○三田村　隱し名をザラに擧げたんでせう。雜輩です。

○山崎　この傘をさして送つて來たといふのは、江戸の話ですね。

○木村　こゝに麥松といふのがありますが、金澤では小僧なんかを呼ぶのに、下にマをつける。東京なら何どんといふところを、新マとか、廣マとか云ひます。こんなことに關係がありませんかな。

○林　それは樣の略されたマでせう。こゝは例の長松の方だらうと思ふ。この通人は何かモデルがあつたんでせうね。

○水谷　加賀の仲間ですか。

○三田村　この時分の通人は皆金がありますからね。後のやうにオホンばかりで持つてゐるのとは違ふ。

○水谷　さうしてその大きなやつが金の遣ひ道が無いから、吉原なんかへ來て遣つたらしいですな。

○八文字屋物などに大概それです。

○木村　門送りなんていふのは無いことなんですね。

○三田村　江戸ではしません。
○山崎　これはカドグチぢやない、モングチでせう。原本に振假名がありますか。
○林　ありません。
○水谷　大門まで送つたんですな。
○三田村　若しさうでなければ、彼等は跣足になるせきが無い。

挾箱　千世の友鶴所載

○木村　「僕うたへ」といふのは連れてゐるやつに命じたんでせう。
○松本　三味線を持つて歩いたんでせうか。
○林　通人ですからね。それで繼棹になつてゐる。
○三田村　繼棹でないと挾箱へ入らないのです。

○仙秀追記　「たいこ女郎」の事は、「澪標」に、「牽頭女郎情並藝子風俗」の條に、「たいこ女郎といへるものは揚屋茶屋へよばれ座敷の興を催ふす爲の者也琴三味線胡弓はいふもさらなりむかしは女舞などつとめしものなり。享保年中より藝子といへるもの出來たり。これはむかしのたいこ女郎とは譯ちがひ三味線をおもてに立てうらは色をおもとする也。さるによつて美女はむかしのたいこ女郎と違ひ容義はすぐれたる有つとめかたはたいこ女郎と同じさまなり」とあれど、その名目は平享銀鶏の「街能噂」にもみえたれば近世までありしなり。今もあるか否か大阪の通人方に伺ひたし。

火神鳴の雲がくれ

奥ぶかなる家にて、天秤はり口の響きさもしくも、耳に入て、今おれに、何程もたせたりとも、欲にはせまひ、物の見事に、つかふて、世界の揚屋に、目を覺さして、こいよとよべば、一度に、十人許、返事を、さす事じやに、親仁一代は、よせなと、おもひきつてのこゝろ根、更にうらみとは、思はれす、我、よからぬ事ども、身にこたえ

て覺侍る、いかなる山にも、引籠り、魚くはぬ、世を送りて、やかましき、眞如の浪も音なし川の、谷陰に、ありがたき、御僧あり、是ももとは、女に身をそめて、是よりひるがへし、たうとき道に、入せたまふ、此人に尋と、浦づたひに、泉州の、佐野迦葉寺、迦陀といふ所は、皆獵師の、住居せし、濱邊なり、人の娘子にかぎらず、しれたいたづら、所そだちも、物まぎれして、むらさきの綿帽子、あまねく、著る事にぞありける、男は釣の暇なく、其留守には、したひ事して、誰とがむる事にもあらず、男の内に居るには、おもてに櫂立てしるゝ也、こゝろへて入事せず、夕暮は、あは嶋の女神おもひやり、詠につゞく由良の戸、戀の道かなと、我よりさきに、あはれしる人ありてよめり、磯枕の、ちぎりもかさなり、爰もすみよかりけりと、日數經るうちに、尋きてうらみいふ女、其かぎりなし、いづれか顏あげて、言葉もかへされず、よい加減にたらして、おもひを、胸にあまらせける、此身ひとりを、大勢して、取ころされてから、何か詮なし、責而は、かたがたの、鬱氣晴しに、酒をすゝめ、むかしをかたりて、慰め、年月の難義、いま爰に小舟數ならべて、沖はるか出せしに、折節の空は、水無月の末、出々に丹波太郎といふ、村雲、おそろしく、俄に白雨して、神鳴臍をこゝろ懸、落かゝる事、間なく、大風いなびかり、女の乘し舟共、いかなる浦にか、吹ちらして、其行方しらず、されあまりに、吹飯の浦といふ所にあがりぬ、暫しが程は、氣を取うしなひ、そのまゝ、眞砂の埋れ貝、しづみはつるを、流れ木拾ふ人に、呼いけられ、かすがに、田鶴の聲のみきゝ覺て、浮雲き、生死の堺まで來て、大道すぢ、柳の町に、むかし召仕ひし、若ひ者の親あり、此もとにたよりゆくに、夫婦よろこび、唯今も、御事のみに、人々手分して國々を尋侍る、過つる六日の夜、御親父樣、御はて遊しけると、かたる内に、又京より人來りて、是は不思議にまいり候、お袋さまの御なげき、いかばかり、兎角いそいで、御歸あそばせと、はや乘物程なく、むかしの住家にかへれば、いづれもつもる、泪にくれて、煎豆に、花の咲心知して、今は何をか惜むべしと、もろ〳〵の、藏の鑰

わたして、年比あさましく、日おくりしに替りぬ、こゝろのまゝ、此銀つかへと、母親氣を通して、貳萬五千貫目、たしかに渡しける、明白實正也、何時成とも、御用次第に、太夫さまへ進し申べし、日來の願ひ今也、おもふ者を請出し、又は名たかき、女郎のこらず、此時買ひではと、弓矢八幡、百二十末社共を集て、大大大じんとぞ申ける

○山崎　「奥ふかなる家」といふのは、大きな家といふだけでなしに、金でも澤山あるやうな構への家を指したんでせう。銀を秤る天秤の音を開くと、金錢のことが思出されて、さもしく耳に聞えるやうになつた。これは世之介に今金が無いからでせう。――天秤の槌で叩く處を「はり口」と云ひますか。

○三田村　云ひます。

○山崎　今自分にどれほどの金を持たせても、決して欲張つて握り込まない、大に豪奢を遣つて見せ

るのだが、もはやそれは斷念してゐる。自分が今まで惡いことをしたのだから、あきらめてしまつて世を送らう、と、いくらか無常心を起したと見えます。「音なし川」は紀州です。そこの谷陰に一人の僧がゐる。これも以前女にかゝはつた人であつたが、心を翻して佛道に入つた。この人を尋ねようとて泉州へ出たのはいゝが、迦陀へ行くのは少し外れ道なのです。こゝらは西鶴がいゝ加減に綴つたんでせう。佐野は順路ですけれども、迦陀は少し離れ過ぎます。しかし有名な名所だからついでにかう書いたのかも知れません。此浦は皆漁師の住んでゐる濱邊で、今でも隨分風儀の滅茶〳〵なところです。「所そだちも物まぎれして、むらさきの綿帽子、あまねく著る事にぞありける」、これはどういふことかわかりません。亭主が釣に行つたあとでは、その女房がしたい事をして、誰もそれを咎めない。男が内にゐる時には、表に櫂が立つてゐるから、それを目じるしにして、そこへは入つて行かないまでのこと。「あは嶋の女神」――淡嶋樣の本體は女の神樣です。「詠につゞく由良の戸」は例の百人一首で、「由良の戸を渡る舟人楫をたえ行方もしれぬ戀の道かな」といふ歌を、自分より先にあはれしる人があつて、已に詠んでゐるといふのでせう。

○眞山　「物まぎれ」は前にもあつたが、その形を似せるとか姿を眞似るとかいふ意味に解すのぢやありませんか、所育ちの者も物眞似をして、同じやうなナリをする。

○三田村　成程、さうですかね。

○山崎　それでわかりますな。

○木村　綿帽子にはいろ〳〵な色をつけたやうですな。

○林　紫が多いんでせう。その他老女は黑だとかいふやうなことはある。「迦葉寺」といふのは？

○山崎　迦葉寺は知りませんが、佐野は和歌山市と吹飯の中間位のところです。

○松本　吹飯の近所に「嘉祥寺村」といふのがあるんですが、違ひますか。

○山崎　それではないでせう。地理の關係が少し變だけれども、そこは西鶴が勘違したのかも知れない。迦陀は今「加太」と書きます。

○松本　吹飯の浦から見えますか。

○山崎　さうですな。見えるにしても望遠鏡程度でせう。

○水谷　彼處は半嶋ですな。
○山崎　半嶋です。嶋ぢやない。
○水谷　女護嶋は彼處だといふ說さへありますから……。
○山崎　今でも淡嶋樣は荒い神樣になつてゐます。漁師は海幸の神としてゐますけれども。……さて世之介は磯枕の契りを重ねて、こゝに日數を經るうちに、例によつていろんな女に關係するから、大分彼方此方から恨まれる。それをいゝ加減にごまかしてはゐたが、自分一人で大勢相手にしては遂には死んでしまふといふので、せめて氣晴しやら是迄の艱苦の慰勞やらに、酒を用意した小舟をいくつも出して、それへ女どもを載せて沖へ漕ぎ出すと山々に丹波太郎といふ村雲、和の國では「丹波太郎」とは云ひませんが。
○林　京都の言葉でせう。原本は「俄」といふ字に「まこと」と假名が振つてある。
○山崎　やつぱりニハカでせうね。……それから大變な暴風雨になつて、女共の乘つた舟は何處へ行つたか、世之介は浪に寄せられて吹飯の浦へ打上げられた。和歌では「吹日」としてありますが、今日では「深日」と書いてフケとよんでゐます。
○林　どの邊ですか。

○山崎　泉州から紀州に入る境のところで、山一つ越せば和歌山です。――一體加太へ行くと、女に持てることは大變なものですが、その代り氣が荒くつて危い、といふ話です。
○眞山　氣の荒いことはわかるやうですな。
○山崎　世之介はしばらく氣絕したまゝだつたが、流れ木を拾ふ人に呼び活られて、「かすかに田鶴の聲」、これには和歌があります。其角が芭蕉の病中に詠んだ「吹飯より鶴を招かん時雨かな」といふ句も、それから來てゐると思ふ「生死の堺」と地名の「堺」にかけて來て、そこに昔使つてゐた若い者の親がある。此處へたよつて行くと、大に喜んで、今世之介を皆で探してゐるところだ、六日の晩に親父樣が亡くなられたといふ。折から又京からの使が來合せて、一緒に連れて歸ることになつた。「今は何をか惜むべし」といふのは母親の心持でせう。いろ〳〵な藏の鍵を渡して、二萬五千貫目の此銀を自由に使へといふ。大變察しのいゝ母親で、「明白實正也」と、こゝはわざと讓狀のやうな形に書いた。「弓矢八幡」は起誓をかけるところから、必ず女郎を買ひ盡して見せると、いふのと、あとの「末社どもを集めて」とを掛け結んでゐます。
○林　「太夫さまへ進じ申すべし」こゝまでかゝつてゐる。
○眞山　これは預り證文でせうな。

○山崎　さういふ風にもなつてゐます。
○林　大に發憤した甲斐があつたね。
○三田村　この時分は一兩五十八匁位でせうが、とにかく二萬五十貫といへば大變なものです。
○山崎　そこで上を受けて「大大大じん」と利かしたんですな。

三田村鳶魚編

西鶴輪講

好色一代男　巻の五

東京　春陽堂版

○山崎　さういふ風にもなつてゐます。
○林　大に發憤した甲斐があつたね。
○三田村　この時分は一兩五十八匁位でせうが、とにかく二萬五十貫といへば大變なものです。
○山崎　そこで上を受けて「大大大じん」と利かしたんですな。

三田村鳶魚編

西鶴輪講

好色一代男　巻の五

東京　春陽堂版

彗星の例集では江戸時代文學の標本を一順したい希望で、知友先輩と發企したのであるから、特に其の中の一個を全部に渉つて眺められぬ、然るに一席の方々のお物數寄は、遂に別集が開かれるやうになつた、此の別集は西鶴の一代男、一代女、胸算用（或は永代藏）を逐次に其の全部を例の輪講に掛ける筈なのだ、孰れにも一席各位の啓發によつて知らないことを減じる喜びを以て、又してもお供をいたした、特に一席の知友先輩が妙な自尊心や己惚らしい氣分を棄てゝ、問るゝだけは問ひ、答へるだけは答へ、遠慮なく否定し、快く同意し、時に或は泥仕合のやうな樣にもなる、只だ何を差置いても些少でも明るくしたいと勇まれる態度は、實に敬服に堪えない、

赤裸々である、一席の各位は又た當席の講錄を發表して、更に大方の諸君子と研究することを望まれる、我等は講錄編輯方の役目として、大方の寄示を待ち、問對添刪に勉めたい、其の爲めに月刊彗星に一欄を設けた、

また別集の進捗は六月二十六日に一代男第一卷、七月二十日に同第二卷、八月二十

五日第三卷を講じた、猶この別集は引續き月次に開催する豫定であるから、講錄も整理されたゞけづゝ、毎月此の體裁にして出刊する心得である。

昭和二年九月

承り人　鳶魚

西鶴輪講

好色一代男　卷五

水谷不倒、林若樹、山中共古、三田村鳶魚、
山崎樂堂、服部普白、木村仙秀、松本龜松、
間民夫、柴田宵曲、

好色一代男

卷五目録

廿五歳　後には様付てよぶ
　　よし野はこんぼんの事
廿六歳　ねがひの掻餅
　　大津柴屋町の事
廿七歳　よくの世の中に是は又
　　播州むろ津の事
廿八歳　いのち捨てのひかり物
　　京みや川町の事
廿九歳　一日かして何程が物ぞ
　　泉州堺ふくろ町の事
四十歳　當流の男を見しらぬ
　　あきのみや嶋の事
四十一歳　今こゝへ尻は出物
　　難波舟遊もどりに夜見世の事

後は様つけて呼ぶ

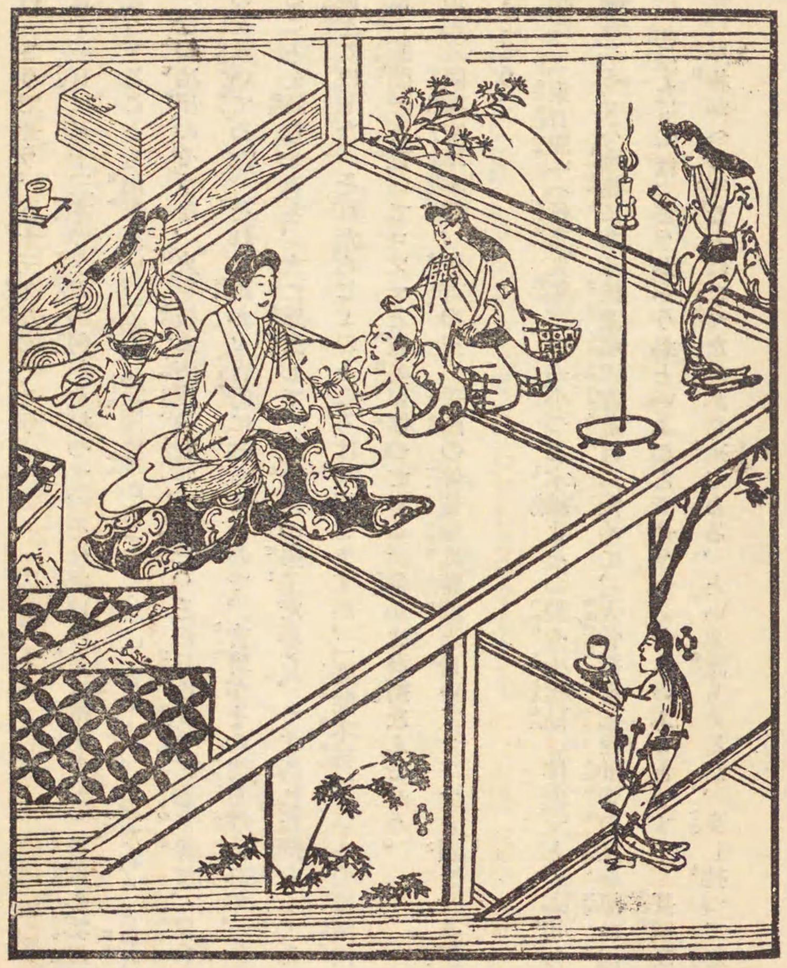
都をば、花なき里になしにけり、吉野は死手の山にうつしてと、或人の讀り、なき跡まで名を殘せし太夫、前代未聞の遊女也、いづれをひとつ、あしきと申べき所なし、情第一深し、爰に七條通に、駿河守金綱と申、小刀鍛冶の弟子、吉野を見初て、人しれぬ我戀の關守は、宵〳〵毎の仕事に打て、五十三日に五十三本、五三のあたいをためて、いつぞの時節を待ども、魯般が雲のよすがもなく、袖の時雨は神かけて、是ばかりは僞なし、吹革祭の、夕暮に立しのび、及事のおよばざるはと、身の程いと口惜と歎くを、或者太夫にしらせければ、其心入不便と、偸に呼入、こゝろの程を語らせけるに、身をふるはして、前後を忘れ、うそよごれたる貞より、泪をこぼし、此有難き御事、いつの世にか、年比の願ひも是迄と、座をたつて逃てゆくを、[illegible]、

□、□、□、□、□
□、□、□、□、□、□
□、□、□、□、□
□、□、□、□、□
□、□、□、揚屋よりとがめて、是は
あまりなる御しかたと申せば、けふはわけ知の、世之介樣なれば何隱すべし、各の科にはと申うちに、夜更て介さまの御越と申、太夫只今の首尾を語れば、それこそ女郎の本意なれ、我見捨じと、其夜俄に採立、吉野を請出し、奧さまと成事、そなはつて賤しからず、世間の事も見習ひ、其かしこさ、後の世を願ふ佛の道も、旦那殿と一所の法花になり、煙草もおきらひなれば呑どまり、萬に付て氣に入事ぞかし、是を一門中よりは道ならぬ事とて、見かぎりしを、吉野が身にしては悲しく、御異見申お暇乞て、責而は御下屋敷に、置せられ、折節の御通ひ女にと申せ共、中〳〵御聞分もなし、

さもあらば御一門樣の御中を、私なをし申べしといふ、出家社人のあつかひをも、きかざる者ども、いかにしてと仰ける、まづ〳〵明日、吉野は暇とらせて歸し候、今迄の通にと、御言葉を下られ、庭の花櫻も盛なれば、女中方申入度のよし、觸狀つかはされけるに、何かにくみはふかからずと、其日乘物とも入て、久しく見捨られし、築山の懸作、大書院に並居て、酒も半を見合、吉野は淺黄の布子に、赤前だれ、置手拭をして、へぎに切熨斗の取肴を持て、中でもお年を寄れた方へ、手をつかえて、私は三すぢ町にすみし、吉野と申遊女、かゝるお座敷に出るは、もつたいなく候へ共、今日御隙を下され、里へ歸る御名殘に、昔しを今に一ふしをうたへばきさえ入斗、琴彈歌をよみ、茶はしほらしくたてなし、花を生替土圭を仕懸なをし、娘子達の髮をなで付、碁のお相手になり、笙を吹、無常咄し內證事、萬人さまの氣をとる事ぞかし、勝手に入ば呼出し、吉野獨のもてなしに、座中立時を忘れ、夜の明方に、めい〳〵宿に歸りて申されしは、何とて世之介殿の、吉野はいなし給ふまじ、同し女の身にさへ、其お

もしろさ限なく、やさしくかしこく、いかなる人の娌子にもはづかしからず、一門三十五六人の中にならべて、是はと似た女もなし、いづれも御堪忍あそばし、内義にそなえられと、よろしく取なし申て、ほどなく祝義を取急き、樽杉折の山をなし、嶋臺の粧ひ、相生の松風、吉野は九十九まで、

○林　或人が吉野が死んでから、「都をば花なき里になしにけり吉野は死手の山にうつして」といふ追悼の歌を詠んだ。それほど吉野は亡きあとまで名を残した、前代未聞の遊女である。何といつて非難すべきところがない、第一に情の深い遊女であつた。「人知れぬ戀の關守」は、「人しれぬ我通ひ路の關守は宵々毎にうちもねなゝん」といふ歌があつたと思ひます。それをかけてゐる。「駿河守金綱」これは受領はしてゐますが、本當の刀鍛冶ではない。小刀とか、剃刀とか、さういふ一段下つたものを打つ鍛冶で、又その弟子ですから、愈ゝ大したものぢやない、それが吉野を見そめて、「五三」といふのは太夫の揚代ですか。



○三田村　さうでせう。五十三匁なんでせう。
○林　五十三日に五十三本の小刀か何かを打つて、それだけの金は溜めたが、魯般の雲の梯も無いから、どうすることも出來ない。「袖の時雨は神かけて……」といふのは涙だらうと思ひます。「吹革祭」は鍛冶屋のやうな、火を扱ふ商賣の者のお祭で、その日の夕方に廓に來て、望むことの及ばないのを歎いてゐた。それを誰かゞ吉野に知らせたので、吉野がその男を呼入れて、その心に思つてゐることを語らせると、大に感激して、鍛冶屋の弟子だから、うす汚れた顏をしてゐる、その顏から涙をこぼした。それからこゝのところは飛ばしますが、「勝間木綿」といふのは河内ですかね。原本は「勝間」と畫いてコツマと假名が振つてある。何かよみ癖なんでせう。
○若樹追記　阪堺電車本線、住吉の三ツ手前の停留場に勝間と書いてコツマと讀ませる所がある。多分こゝでせう。
○宵曲附記　「東日記」（延寶九年）に「小つま木綿よその契や小夜砧　伴色」といふ句あり。
○鳶魚副書　そゞろ物語にある佐渡嶋正吉を買ふために、大骨折をした油賣の話が思ひ出されます。
○林　「への字なり」は、どうかかうかといふことでせうが、どういふことです？　長屋なんかの崩れかけて、屋根がへの字なりになつたのから來てゐる、といふ説もあるが、少し持つて廻つた解釋の

やうですね。
○山崎　たゞ、への字の形の通り、曲りなりに、といふことぢやないんですか。
○林　御説の方がよささうです。扨どうもさういふことは、太夫の身分としてはあまり輕々しい振舞だと申せば、「けふはわけ知の世之介樣なれば仰隱すべし」皆の科にはしない、と云つた。
○木村　世之介がこれからすつかり大盡になつてしまひましたな。
○山中　「是ばかりは僞なし」には、「いつぞの時節を待ども」あたりからかゝつてゐるんでせう。
○三田村　かゝつてゐるやうですな。「袖の時雨」も時候が冬だから丁度いゝ。
○松本　吹革祭は十一月八日です。
○山崎　「袖の時雨」と云つて、「雲のよすが」に對照したところもありませう。
○三田村　魯般の雲梯は本來なら「淮南子」を引くところだけれども、「蒙求」で間に合せときませう。楚王が宋を攻める時に、魯般に雲梯の械を拵へさせたので、雲梯は「下施二兩輪一、架二城墻一登攻、梯高故稱レ雲」とある。雲のかけはしです。
○林　元祿五年板の買物調方記を見ると京ニテ鍛冶とあつて刀鍛冶の人名が十名あり、次に同刺刀、小刀、はさみ鍛冶とあつて十六名次に京ニテ庖丁、小刀類とあつて數十名列記してあつて卽ち鍛冶

を三種類に分つて居る。本文には小刀鍛冶とあるから第一類の刀鍛冶ではなく第二類に屬する刺刀、小刀、はさみ鍛冶であるのは明である。そこで七條あたりを探して見たけれども、一向小刀鍛冶が無い。要するにこれは場末を現しただけでせう。

○山中　小刀鍛冶は小柄、小刀を打つので、刀につくものを作るのです。普通の刀鍛冶ぢやないけれども……。

○服部　五十三日に五十三匁といふと、一本一匁になりますが、一本一匁の小刀は、この時分の値段としては高いんでせうか、安いんでせうか。

○三田村　この頃としては高過ぎますね。

○服部　「雲にかけはし霞に千鳥」なんていふことがありますな。

○三田村　「吉野を死出の山にうつして」とあるから、これは死んでから後のことのやうですが、どうもこれには少し疑問がある。これで見ると、吉野が廓で死んだやうに見えるけれども、有名な吉野といふものは、慶長以來の七人衆の中に書いてあつて、「色道大鑑」によると、松田氏、元和五年五月五日十四歳太夫となり、寛永八年八月十日に、二十六で舊里に還る、とあつて、廓で死んではゐない。然も買論の爲に身を引いたので、受出されたのではないのです。「好色由來揃」には「其名遙

に唐土迄も聞へて金入の卷物に文字を織付、我朝へ出たしぬる事世の人のしれる事なり」などともある。こゝに西鶴のいふのはこの外のやつだらうと思ひますが、何代目かわからない。

○鳶魚副書　延寶九年版の名女情比第五には、六條の吉野牢人に情ある事、嶋原上町の吉野なさけの事と、二人の吉野の話があります、柳町（萬里小路二條）が天正十八年から、六條三筋町が慶長七年から、嶋原（朱雀野）が寛永十八年からの遊廓なのですから、相應に年代が經つて居ます。六條と嶋原との吉野二人の間に幾代算へられるのか知れません。此の本に「吉野は六條のさかんなりし比、其名もろこしまでもかくれなく、全盛かたをならぶる人もなく、都鄙の貴賤そのありさまを見初、なさけをきゝては、心をうごかさぬはなし」と書き出してありますので、好色由來揃に支那から名入の織物が來たといふ吉野は六條の名妓なのが知れた。又た嶋原の吉野には「吉野は容顏止事なく、ときめきしゆへ、幸も又たぐひなく、多くの金子に身をかえて、くるわのくげんをまぬかれ、九重のみやこを出て、八重のしほぢにおもむかれし事、世にかくれなければ、今さらいふもくだなり」と身受されてから京都に居ないのだから、此の女でない、それから吉野傳を見ると、同名の女を十一人も擧げてあります。

林與次兵衞家―元祖吉野（天正慶長の頃）―二代吉野（元和元年五月出世、寛永八年八月退廓）

―三代吉野（正保慶安の遊女ならん）
上ノ町喜多八左衞門家―初代吉野（寛永十七年―正保三年）―二代吉野（明暦三年―寛文二年）
―三代芳野（延寶三年、今世二代吉野と思へるは是）
中ノ町田中喜三郎家―吉野（正保慶安の間ならん）
高田七郎七右衞門家―よし野（正保四年）
伊藤吉左衞門（上町柏屋）―吉野（萬治寛文の間ならん）
宮嶋甚三郎家（太夫町）―吉野（寛文十一年）

是が仙程信用すべきものだか知れません。此の書は續畸人傳に吉野のことをかきたると同事だとし、近衞鷹山公の通はれたのも此の女、灰屋紹益の妻になつたのも此の女とする、さうして是が林屋の二代目吉野だといふ、西鶴も「花なき里」といふ歌を抱へ込んで居るが、果して林屋の二代吉野とすれば、灰屋の妻になつて卅八歳といふ寛永廿年八月廿五日に歿して居る、廓を出たといふ寛永八年からは十三年後だ。

西鶴が此の吉野を「情深し」といつた、此の「情」の意味が、私などには餘程變つたものゝやうに思はれる、名女情比に業平を論じて、

御心に思ふをも、おもはぬをも、けぢめなく情をかけ玉ひし、中將の性得これなり、誠に戀ぢの奇拔な戀愛論で現代人を驚かせた增穗殘口や柳里恭の獨寐の前に、名女情比のあるを知らなければなりますまい。私は名女情比を世間に知らせるためにも、又た灰屋吉野の逸話としても、「六條の吉野牢人に情有事」の全文を抄出して置きませう。

吉野は六條のさかんなりし比、其名もろこしまでもかくれなく全盛かたをならぶる人もなく、都鄙の貴賤そのありさまを見初、なさけをきゝては、心をうごかさぬはなし、こゝに西國牢人に多田のなにがしといふ侍あり、器量人にこえ、文武才智の人也といへども、智有もをろかなるも、たゞ彼まどひのひとつぞやめがたし、いつの比にか吉野を見そめて、たましひも身もなきこゝちになりけり、これはさてうらめしき事かな、此戀心やめさせ玉へと、佛神にもいのりけれども、いやまさりにのみなりければ、今はしのぶによはりはて、一跡のたくはへをとりいだし、いとかりそめのちぎりをむすびけり、やう〳〵なれよりけるまゝに、見初しよりつらきおもひをせしあらましをかたりける、もとよりよるべさだめぬ身にて候へば、又のあふせは中々思ひもよらず候、げにやひと夜の新枕かたしく袖の御うつりがも只事ならぬ御えんならまし、此世こそかくはかなく候とも、來世

吉野太夫（名女情比所載）

はふかき御えんともなりまいらせ候はんと、心の内に思ひなぐさみ候へども、うきぎぬ〳〵のわかれぢのあすより後はいかにして、世にながらへ候はん、はかなくなるはじぢやうなり、なからんあとにはたゞ一ぺんの御えかうをもあそばし玉はり候へと、なみだにしづみければ、吉野もさすが石木にあらざれば、なみだがましくなりけるが、中にて思ひけるは、いや〳〵かゝる事は我こゝろをひきみんとて、人をつもるにてあるらん、こなたよりかへつて心をひきみんと思ひ、さらぬていにもてなし、仰のとをり一村雨の雨やどりも一方ならぬきえと申なり、殊にわが身はうかれ女のよるべもさだめぬうたかたの、あはれはかなき身にて候へば、ふかき御えんならでは、おゝく上臈も候にわれに御あひ候事、こなたにはふかき御えんとさきの世の御ちぎりまで戀しく思ひ候に、ましてかゝる御詞は、いつはりと思ひながらも、たとへば、たが誠よりうれしかりけりといふ歌の心にて候が、あまりといへばきやうこつらしき、御燒手かなと、さもおふやうにいらへければ、彼人いとゞたへかね、あゝさてはかなきは我心にて御いり候、いまだなじみたる御事もなきに、いかにこなたにやるせなければとて、心のそこをうちあけ候へば、けつくあさはかにおぼしめすこそことはりなれ、かへつて今ははづかしや、此上は何とことばにつくすとも、露も心はしろしめさじ、あはれと思ふ人あらば、いまの心をためしてみよかしと、よそをながめてゐたりけり、そのときよしのは、

こゝぞよきつめどころと思ひ、のふわらはが申もことはりとおぼしめさずや、さて御心をひきみよかしとの玉ふが、そのぎならば、われらに御まかせ候はんやといへば、世にうれしげにうちえみて、中々仰にはそむき候はじ、何にても心をひきて御らんぜよといへば、其とき吉野こたつの中よりおきをとりいだし、さあらばこれをもゝの上にのせ候はんといへば、それこそいとやすき事なれと、股をはぐりて、これへ〳〵といへば、よし野はおくするけしきもなく、股のうへにをきければ、彼人につことわらひてゐたりけり、吉野此ありさまをみて、やがてとりすて、さて〳〵わりなき事を申候、さほどにおぼし給はゞ、行すゑかけてちきり參せ候はんと、誠にそこゐなく涙をながしかんじけり、もとより牢人の事なれば、あふしゆびとてもかなはざりしに、吉野は外のつとめのひまをうかゞひ、そこゐなく情をかけて、世のいとなみまでおくりければ、彼人は世に有がたく暮しけり聞人互に心中をかんぜぬはなかりけり、しかはあれど浅縁にてはありけん、それよりみとせを過て、彼人はかなくなりけり、吉野はふかくなげきにしづみ、いかめしく跡をとぶらひけり、されば吉野の手のうちに焼跡のありしは、彼心中の時、おきをとりすてんとて、あはてゝけがをしけるなん、實にたぐひなき情なり。

○林　馬琴の書いたものに、吉野の筆蹟を模してゐるものがありましたね。

○木村　「睡餘小錄」にも、二代吉野太夫の文が載つてその年號は延寶になつてゐましたから、こゝには丁度いゝが、何しろあの本はお公家様の通人の遺つたものですから、あてになるかどうですか。

○山崎　併し、特に「或人の」云々と云つたり、前代未聞などと云つてゐるから、どれと云つて指せさうなものですがね。

○林　一番有名なのは初代だけれども……。

○木村　何しろ「櫻時雨」の主人公だから……。

○林　あれは灰屋紹益に身請されて死んだ、といふことになつてゐるんでせう。

○木村　こゝはたゞ名高い女郎の名を引いて、西鶴が自分の都合のいゝやうに書いたんぢやないんですか。

○林　一體かういふ太夫が賤しいものに身を任せたといふ話はよくあるので、名妓に關する傳説みたいなものですからね。

○山崎　紺屋高尾ですな。

○三田村　私はこの話は後に出て來る瀧井山三郎の話の伏線だと思つてゐるのです。それから五三の價は「色道大鑑」にも太夫の嫖價が五十三匁だとある。「長崎土産」に「寛永のはじめ四の二の戀祖

よしの野風」とあるのは、四十二匁なのか、それとも四と二と加へて、六十匁なのか、何にせよ承應四年の「桃源集」には「島原にしては……近き世となりて五十あまり五つには賣りける」とある、承應より延寶の方が二匁安いのは分らない。果して嶋原太夫の嫖價が跡さがりしたとすれば考へものでせう。

○木村　「睡餘小錄」によると、吉野の初代が寛永で二代は延寶ですから、五十年位間があつたと思ひます。

○山崎　この鍛冶屋の弟子の歎きを「及ぶ事のおよばざるは」と云はしたのは、實にうまいですな。それから「其心入」これはコヽロイレでせうね。

○林　原本は假名がついてゐませんが……。

○水谷　服部　木村　コヽロイレでせう。

○林　夜が更けてから世之介が來たといふので、吉野太夫が今日の始末を語れば、世之介のいふのに、それこそ遊女の本意である、自分は見捨てない、と云つて、俄に揉立てるやうにして吉野を受出してしまつた。吉野は奥様になつたが、非常に上品で、佛の道も今まで宗旨が違つてゐたのを、旦那と同じ法華になり、煙草も世之介が嫌といふことで、好な煙草もよし、萬事氣に入るやうにした。

けれども一門親類の方から見ると、遊女などを正妻にするのは宜しくない、といふことで絶縁になつてしまつた。それを吉野が悲しんで、自分にはお暇をいたゞきたい、さうしてせめてお下屋敷にでもお置きになつて、折節のお通ひ女――お妾としてくれるやうに、と云つたけれども、これは世之介が聞分けてくれない。それでは私が御一門との間をお直し申さうといふ。それは駄目だ、出家や神主が取なしたところで、なか〳〵いふことを聞く人達ぢやないといふのを、かういふやうな手紙を出していたゞきたいといつて、一門のところへ觸狀を出させた。もと〳〵吉野の爲に仲が惡くなつたけれども、吉野さへ暇を遣るといふなら構はないといふので、皆世之介の屋敷へ來た。さうして竝んで酒宴をしてゐる中へ、吉野がごく輕い、普通の人の著るやうな淺葱の布子を著て、赤前垂をかけて、頭に置手拭をして、へぎに切蕨斗の取肴を持つて、お客の中でも一番年を取つた方に手をつかへて、私は三筋町に住んでゐた吉野と申す遊女で、かういふ立派な席へ出るのは勿體ない次第だけれども、今日限りお暇をいたゞいて里へ歸る御名殘に、昔を今に一節をお聞かせ申したい、と云つて唄ふと、一座は消え入るばかりに感歎した。それから琴を彈いたり、歌を詠んだり、茶を立てたり、時計をしかけ直す。昔は晝夜を分つのに日の長短を基準にしたので、春夏秋冬によつて夜が長くなつたり、日が短くなつたりする、それに合せて今の時計の振子に當る鐘の下にある天秤

様のものゝ左右に下げる小分銅を始終加減して行くんだからなか〳〵其加減がむづかしい。今で云へばまあラヂオの機械を組立てる位なことをやつて行ける才女といふ處でせう。又娘達の髪も撫でつければ、碁も打ち、笛も吹く。無常咄や内證事の話も出來る。だから一座の何方にも氣に入つて、ちよつと勝手に立つた間でも、吉野がゐないとさびしい、といふことになつた。それで夜の明方まで歡をつくして、皆家へ歸つたが、「申されしは」といふのは、多分一座のうちの年取つた方がでせう。吉野は何處へも遣つてはいけない。どんな人の嫁にしても恥しくない。一門に三十五六人も奥様があるけれども、どなたの内儀にも比べるやうなものはない。かう云つて一門のうちを取做したので、早速御婚禮の樽や杉折の御祝物が山のやうになつて、相生の松風、九十九まで祝ひ納めて、吉野は本當の奥様になつた、といふんでせう。

○三田村　この「九十九まで」は「お前百までわしや九十九まで共に白髪の生えるまで」ですね。鷹ケ峰に吉野が法華寺を再興したといふやうなことがあるので、こゝにも法華を持出したものかと思ふ。そんなことからこの吉野を、灰屋の吉野のやうに見る人もあるやうです。それから「奥様」「旦那殿」となつてゐるが、江戸では、どんな町人のお歴々でも、奥様といふのは寶暦以後です。京都では早く崩れてゐたものと見える。

○林　それだけ町人の勢力があつたわけでせう。

○三田村　赤前垂は後の茶屋場でも出て來るが……。

○服部　今でも上方ではさうですよ。

○山崎　現在の祇園で、一力の外にもありますか。

○服部　あります。井筒あたりの一流の茶屋が赤前垂なのです。

○三田村　例の太閤様の醍醐の花見の時、女が皆赤前垂をかけて、茶摘女のなりをしたといふことがある。これは本當のお茶屋と、料理屋のお茶屋と兩方かけてゐる。

○林　宇治の茶摘の方は後ぢやないか。

○山中　とにかく下等な綺麗なものは赤前垂ですからね。おさんどんあたりが晴著と云へば、赤前垂をかけるのです。

○服部　こゝも茶屋の女中のなりですな。

○水谷　灰屋紹益と吉野との關係に、これを引いて、灰屋との關係を拵へたのかも知れませんね。尤もそれは「一代男」から引いたか、その前に何かかういふ逸事があつて、それを世之介に引つけたか、その邊はわかりませんが……。

○三田村　さうでせう。それでこの文章が裏書したやうになつてゐる。「土圭」は日が長くつても短くても、夕方は必ず六つなんだから、合せるのがむづかしいわけだ。

○服部　自分で遣つてみても、むづかしくつて大變ですな。振子にこまかい目があつて、それに合せるのが困難です。少くとも四五日目には替へて行かなければいけない。當時は無論金持の家でなければ無いわけだから、嗜みのいゝと同時に、その家のいゝ、教養のある意味ぢやないですか。

土圭

○水谷　それと、發明な女だといふことでせう。何でもやる。

○林　併し偏痴氣論を擔ぎ出せば、ちよつとそこで分銅を替へたつて、合ふかどうかわかりやしないんだがね。

○三田村　時計いぢりの出來る女、といふことでせう。口も八丁手も八丁だから……。

○木村　「出家社人のあつかひ」といふのは面白いですな。さういふ人達の仲裁をも聞入れない、といふのが、當時の階級意識を見せてゐる。

○山崎　「切熨斗の取肴」

○服部　切熨斗そのものが取肴なのでせう。食べたんだらうと思ひます。話は大變違ひますが、「お手昆布頂戴」と云つて、手で切昆布を下さる、それを頂戴して歸ることがあつたさうです。

○松本　古い會席のことを見ると、搗栗に切熨斗といふのがあります。

○山中　和宮様がおいでになつた時、牛蒡の茹でたのに切熨斗が出たことをおぼえてゐるね。

○林　「築山の懸作」といふのは？

○三田村　築山へ懸作りになつてゐるんでせう。

○山中　ガケヅクリぢやないか。

○山崎　「昔を今」は、此處も多勢の面前だから、やはり靜御前が鶴岡で舞を舞はされた時の「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」を利かしてあるのでせう。「相生の松風」は「高砂」の祝言の文句です。

○木村　「山家鳥蟲歌」には「こなた百まで、わしや九十九まで、髪に白髪のはゆるまでね。」とあります

○山崎　狂言には「九十九まで」は出てゐませんね。室町末までは狂言の創作も多く出來てゐますから、江戸の初期か、桃山時代からの言葉でせう。

ねがひの掻餅

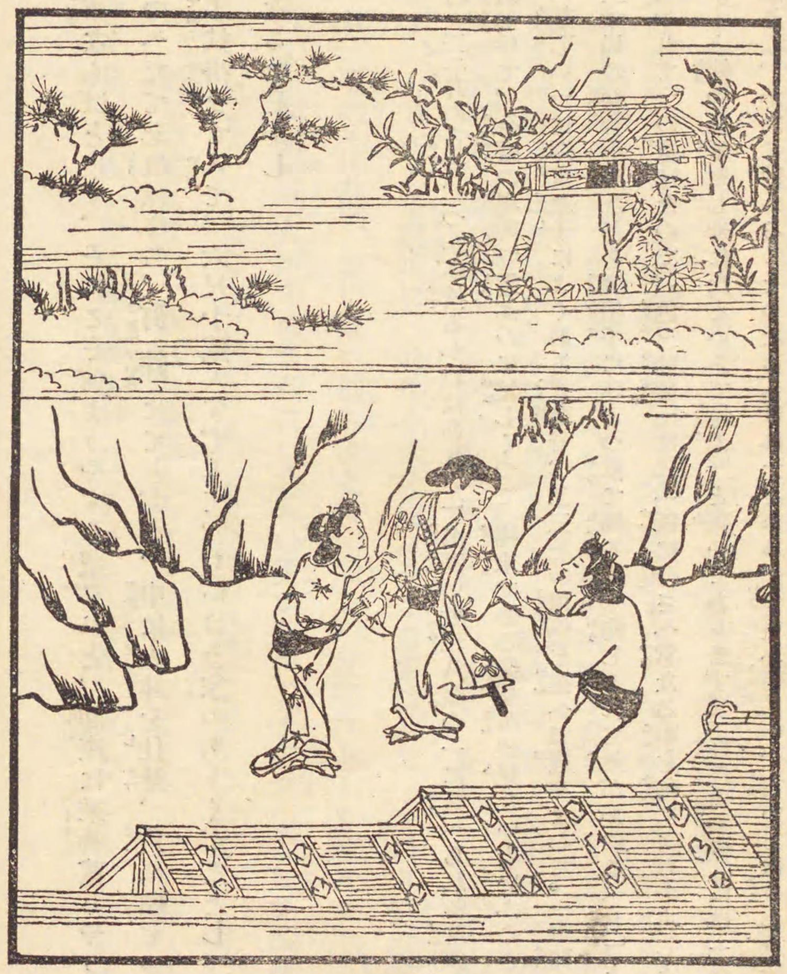
三井の古寺、つかひ捨るかねはあれど隙なくて、終に柴屋町をみぬ事新し、昔し長柄の山の芋が、鱣になるとや、もしも替つた事のあればなり、いざゆかん心得たと白川橋より、大津へのもどり駕籠に、のつたりや勘六、是は俄に、ゆくも歸るも、はや八町に著ば、泊りじや御ざらぬか、廣ふてきれいな宿をとりて、なんと女郎衆、今爰ではやるは誰じやと問へば、石山の觀音樣が、時花ますといふ、さても人を見立るやつかなと、其後亭主にあふて、傾城町の案内賴むと申せば、是は無用になされ、六匁や七匁ではたらぬといふ、勘六歯切をして腹を立、忍べはこそ供をも連ず、風俗も野體にて出しにと、滅多せきにせくを、世之介笑しがり、我に預た、金子出して見せいと

笑ふて居る、臺所には大聲をあげて、今夜は傾城買樣の御泊りじや抔と、勘六を見ては、指ざしして笑しがる、世之介も今は堪忍ならず、表に出れば、京より結構成いせ參があるはと、門立さはぎ、踏物をみるごとくぞかし、大坂の黒舟といふ乘懸馬、伏見の漣浪、淀のはんくはい、かれ是三疋揃て、七つ蒲團を白縮緬にしめかけ、馬の沓にも唐糸をはかせ、何れも十二三成娘の子、四ッ替の大ふり袖、菅笠に紅裏うつて、なひませの紐を付、其時は小室ぶしの最中、宿入にうたひて、馬子も兩口をとるぞかし、世之介を見るより、申〳〵と抱おろされて、三人ながらしなだれて、お伊勢樣へまいります、かたさまは何として、爰には御ざります、勘六が女郎狂ひの太鞁を持にきたが、あたまがいたひうてとあれば、獨かしらひとりはあし、獨は御腰をひねる、しばらく我宿へはゆかず、其柴屋町を見せさんせ、下向してから、太夫樣に咄しのたねにもなります、見物したひといふ、さらば連てゆかんとて、三人さきに立て、南の門に入ば、都に近き女郎の風俗も替りて、はし局に物いふ聲の高く、道ありくも大足

にせはしく、著物も自墮落に帶ゆるく、化粧も目たつ程して、よしあし共に三味線をにぎり、頭をふってうたひける、立よる者は馬かた、丸太舟の水主共、浦邊の獵師、相撲取鮨屋のむすこ、小問屋の若き者、戀も遠慮もむしやうやみに、見しりごしなる惡口、或は小尻とがめ、又は男だて、一町に九所の喧嘩、ふむのたゝくの頭巾を取の、羽織が見えぬのと、只さはがしくさばき髪して、片肌ぬぎ、懷にはなねぢ、手に白刄取、此所の色町を、闘の場にするぞかし、命しらずの寄合、身を持たる者の夜ゆく所にあらず、しるべある揚屋に、兵作小太夫虎之介などあつめて、面白う遊びて、其あけの日は、禿共が立酒、さいはい關送りとて、隔子の女郎ひとりも殘さず、一日買とふれをなし、御三寸過し醉のまぎれに、三人の禿が何にても、道中望にまかせて、まいらすべし、おもひ〳〵にこのめといふ、太夫様から萬に御こゝろ付させられ、ひとつも此上に、願ひの事もなし、され共乘懸あとさきに隔り、こゝろのまゝ咄しのならぬ事氣のどく也、三人一所に晝も寢ながら、手づから搔餅を燒て、それをなぐさみにし

てゆく事ならばと申す、それこそ何よりやすき望なれと、即座に乘物貳ちやうならべて、中のへだてを取はなち、釘錺にてとぢ合、中に火鉢を仕懸、角に棚をつらせ、枕屏風手拭掛まで入て、六尺十貳人すぐりて、ちいさき家のありくがごとし、何事もなればなる物ぞかし

○三田村　「三井の古寺、つかひ捨るかねはあれど」名高い近江八景の一に數へられる晩鐘の鐘を、金錢に引かけて、全盛の場所で遊ぶのに忙しくつて、場末である柴屋町は見ないといふことが新しい。この「新しい」は浮世草子によくある言葉で、二三その用例を控へて置きました。「野傾友三味線」に「三寸局の初音小泉などを酒相手にひとつ飲て歸るも一向しやれて氣がかはるべし」とある、この「しやれて」の意味なので、「色三味線」には「既に今さへ常なる事を何によらず古しとして用ひず……變つた事をしやれたといふて悅ぶ」と書いてあります。「好色由來揃」には「かたじけないはふるし、かたじけあるこそあたらしけれ」とある。今いふ新しい、古いとは少し意味が違ふや



うです。尤もこれは私だけの考ですから、間違つてゐたらお教を願ひたい。

○山崎　今でもかういふ風に使ふでせう。

○山中　「あたらをし」といふ意味は無いかね。

○山崎　それは無いでせう。並々ならば陳腐だが、尋常とは變つてゐるから珍しい、それを「新しい」といふ。

○林　古いのに對照する「新しい」ですからね。

○服部　この後に、何に見えるか、人間に見えます、それは古い、といふのがありますね。同じ意味でせう。

○三田村　「のつたりや勘六」と云つて、一緒に行く男のことを、かういふ風に提出したのは、巧者なものだと思ひます。それからあとは、誰がはやるかと云へば、觀音樣がはやるといふし、亭主に傾城町の案内を頼むといふと、六匁や七匁では足りないからよせ、といふ。この邊が二重謎みたいな、當時の言葉で云へば、これが當話といふやつでせう。來た風體が女郎買が出來るやうなものでないといふことを、この應對で現してゐる。「野體」といふのは「膝栗毛」にも出ましたが、ゐれは「野弟」と書いてあつたやうです。あの時もいろ〳〵お說がありまして、私は「田夫野人の體裁」とい

ふことだらうと見て居りました。「色道大鑑」にも「擧屋より三味線を取に遣はす時そのまゝ持來る事野體也」と書いてあります。

○木村　「膝栗毛」のは「彌弟」ぢやありませんでしたか。

○三田村　私の本は「野弟」となつて居りました。尤もあの本は版によつて違つてゐるからわからないが、野風俗で、下卑た風なんでせう。そんなお人柄ぢやござんすまい、と云はれたんだから、見縊られたわけです。

○山崎　勘六といふのは後にも出るが、何者です？

○三田村　道樂者でせう。

○山崎　こんな書き方がしてあるから、世之介よりは下の男でせう。野幇間かな。

○林　「かねはあれど」といふのは、「三井寺」の謠にある。「三井の古寺鐘はあれど、昔にかへる聲は聞えず……」

○樂堂追記　「さゝなみや三井の古寺……」云々、新撰集にある。併し此處では歌集直接でなく、林氏のお說の通り謠曲から取つたものであらう。そこが西鶴一流。

○服部　「のつたりや勘六」といふ調子は、明治になつて硯友社の文學になり、更に浪六先生あたりに

盛んに用ゐられた語法ですな。

○水谷　山の芋が鰻になるはよくいふが、特に「長柄の山の芋」といふことが何かありませんか。

○山崎　三井寺の文字緣から引いて來たまでぢやありませんか。忠度の歌をはじめ、「昔長柄」といふのは、よく使ふかけ言葉です。

○林　三井寺の山は長柄山です。夫れ故山號にもなつて卽ち長柄山園城寺です。

○三田村　それから世之介がをかしがつて、金を出して見せろといつてゐるうちに、臺所では大きな聲で「今夜は傾城買樣の御泊りだ」と來たんだから、こいつはとてもこたへられない。表へ出ると丁度いゝ按排に伊勢參が通る。お祭の練物のやうな、立派ななりをしてゐる。この時分は乘懸馬が盛んでもあり、殊に廓の伊勢參は、いゝ客を持つてゐる禿どもが、大盡に金を貰つて、金をかけて行つたものらしい。こゝにあるやうに名の通つた、いゝ馬を仕立てゝ、三人の娘の子を乘せてゐた。馬の名を擧げたのは、いゝ馬であることを現したんでせう。おつぐら馬といふ流行唄があつたが、あれと同じやうに、七つ布團をして、厚くなつてゐるから、それを白縮緬で縛つて、それが鞍になつてゐる。馬の沓も唐絲で作る。唐絲といふのは、後で申せば絹絲のことです。甲州あたりでは、或は今日でも云つてゐるかも知れません。

○樂堂追記　近世上方で「唐絲」といふのは眞の絹絲でなく、絹絲の樣に細く取つて光澤のある木綿絲、今日の所謂「細紡績」や「カタン絲」の如きを指す。尤も呼名はカライトでなくタウイトといふ。

○服部　唐絲織といふのがありますな。

○三田村　馬の沓までも結構を盡す。「四ツ替り」といふのは、四つ重ねてゐる大振袖ぢやないかと思ひます。後のお祭に出る――と云つても今日の若い人は知らないだらうけれども、肌脫と云つて次次に脫いで、脫いだやつが脇へ下つてゐる、見事なものです。これもさうぢやないかと思ふ。菅笠には紅絹の裏が打つてあつて、紅白の綯ひ交ぜた紐がつけてある。菅笠のもみ裏は近頃「古老茶話」の中で見つけました。「毛利元就の妻室上洛の時、其妻室並供の女房共騎馬にて菅笠の緣に紅のきぬ水引をとりたるをかぶりたり、是を御田笠といふ、略してをだ笠といふ、住吉御田植の時農婦のかぶりけるゆへに云」といふので、菅笠の裏へ紅絹をつけるといふことは、誰もが贅澤としたものと見えます。

○林　山崎　それは緣に紅絹を下げるんでせう。これは裏へつけるんだから、それとは違ふ。

○三田村　それを移してかう遣つたんぢやないですか。垂れて居るのを裏へ附ける。

○林　それやいかん、反對々々。

○山崎　第一目的が違ひませう。緣へ下げるのは元來は日覆の意味……。此方は純粹の贅澤から……。

○木村　すべて綺麗事で行つたわけですね。

○三田村　さういふ反對が出るだらうと、實は思つてゐたのです。……「小室ぶし」は、吉原行の馬子でも、小室節をうたふのは高い、といふやうな話で、これにもいろ〳〵御說があるだらうと思ふ。信州の小諸からはじまつたといふやうなことで、「膝栗毛輪講」の時にも大變いろんな御說がありましたが、何處から出たものか、私にはわかりません。わからないとして置く方がよさゝうに思はれます。「宿入にうたひて」といふのは、馬子でも奴さんの槍でも、宿を出入る時だけにやるものだからです。

○木村　軍隊が町へ入る時に喇叭を吹くやうなものですな。

○三田村　これは禿とは云つてないが、禿の伊勢參の大變華美なことを書いたものです。それが丁度來かゝつて、皆が揃つて呼びかけた。どうしてこんなところにおいでになります。それから應答があつて、頭をさすらしたり、足を揉ませたりしてゐる。如何にも世之介に狎れてゐることを見える

やうに書いた。柴屋町を見せて下さい、歸つて太夫様に話の種にもなりますから、といふ。これで禿といふことがわかるわけです。さうして世之介は六匁七匁の女郎だからおよしなさいと云ふ風に扱はれたが、もつと高い太夫を買つてゐるのだといふことを、面倒なことを云はずに用を足してしまつた。

○林　「その時は小室ぶしの最中」とあるから、これは或過去を云つたんでせう。何年かたつて、小室ぶしの流行つた頃を顧みたので……。

○山崎　「最中」は絶頂でせうね。

○三田村　何でも小室節は加賀節と一緒に流行つたのだといふことです。

○鳶魚副書　鄙雜俎に「信州小諸ヨリ諷ヒ出シタリトテ、旅行馬子ノ多クウトフ謌歌ハ様々アルベシ、今ニ稀ニ諷フ馬子モアリ、加賀ブシ、小諸ブシモ時代ハ同ジ頃ニ始リシナラン歟」とあります。寛文以來ではありますまいか。

○木村　「その時」は大津の宿に入る時、ぢやありませんか。

○林　さうはとれない。

○山崎　「當時は流行最中のことにて」といふ意味になるんでせう。

○服部　二十年ばかり前に、八十位になる、昔雲助をしてゐたといふ爺さんの話を聞きましたが、宿入の前に歌をうたふのは、行列が來たといふことを知らせる爲で、その歌の聲を聞くと誰といふことがわかる。誰なら何方のお供だから、どの位支度をして置けばいゝ、といふことになるので、決して吾々の醉興で歌ふわけぢやございません、といふことでした。

○三田村　奴の槍もそれですね。

○木村　軍隊でも町へ入る時は本當に歩調を揃へて進行する、軍隊の宿入りですね。

○山崎　「四ツ替り」といふのは、先程御説明のやうな熟語があるんですか。

○三田村　いゝえ、さうぢやありません。

○服部　片身替りの意味ぢやないでせうか。

○山崎　私もさうぢやないかと思つたのです。上下に重ねる御解釋も結構だと思ひますが、能の裝束の方で、片身替りに織つたり又は染めたりしてある模様は、丁度四つ替りになつてゐます。即ち、右上と左下が對、左上と右下が對、それで何の部分に就いて見ても四つに替つてゐるのです。但、それを「四つ替り」といふかどうかは、調べてみなければ確に言へませんが、とにかく事實は四つ替りです。厚板や唐織によくあります。

○三田村　僕は直ぐ肌脱を連想したものだから、問題無しにあゝ解したんですがね。
○林　たゞそいつが元祿以前まで行くかどうかだね。
○山崎　重ねて著る方だと、必ずしも四つに限らなくはありませんか。「數替り」とでも云ひさうに思はれる。こゝは熟語のやうだから、私にも疑があるのです。（追記　先に述べたる「片身替り」は普通一般の名稱なれど、時に「四つ替り」とも呼ぶ由なり）
○山中　或は染方を云つたのかとも思つたが……。
○林　私は一枚のやうな感じです。
○三田村　何しろかういふ馬鹿げた場合だからね。馬の沓まで絹絲で拵へるんだから……。
○林　昭和の常識ぢやいけないかな。馬の方ぢや絹絲の沓なんか迷惑だらう。狆の著物みたいなものだ。「なひまぜ」は？
○三田村　紅白でせう。
○林　「のつたりや勘六」なんかは、きつと當時に何か言葉があるんでせう。
○服部　こゝの當話は面白うございますな。
○三田村　それからその禿どもを先へ立てゝ、柴屋町を見せに行く。こゝは都の嶋原の女郎のやうな

風ではなくて、太夫も無ければ天神も無い。鹿戀といふごく安いのが一番いゝのだつたさうです。
「はし局」は今の言葉にして云つたら、女郎屋の張店でせう。だから道を歩くのも大股で、だらしないなりである。さうかと思へばお化粧は厚化粧で、上手でも下手でも構はず三味線を彈く。太夫は彈かないものだと聞いてゐます。さうして頭を振つて大きな聲でうたふ。然るべき節事ぢやなく、流行唄か何かをうたふんでせう。かういふところだから寄つて來るひやかしも亦下等で、馬方だの、船頭だの、漁師だのといふ顏觸ですが、その中に相撲取が入つてゐるのは御愛敬だと思ふ。この時分は勸進相撲は公許されて居りませんから、無論草相撲で、あばれものゝろくでなしに數へられる。
「むしやうやみに見しりごしなる惡口」といふのは、どういふ意味になりますか。
○山崎　「やみに」で一寸切れるんぢやありませんか。
○林　原本は「やみに」で切つてゐます。
○水谷　「むしやう」は無情ですか。
○林　「むしやうやたら」を「むしやうやみ」と云つたんぢやないですか。
○山崎　字を當てれば「無上」でせうな。
○三田村　ムヤミかな。

○山崎　意味はムヤミでせう。
○三田村　見知り越に悪口をいふのは、女郎の悪口を云ふんでせう。
○山崎　「小尻とがめ」は？

羽折をかづけるる素見客（難波鑑より）

○山中　木村　ひやかし同士でせう。
○三田村　さういふ連中が、見知り越だから女郎の悪口をきいてゐるんでせう。
○林　それがよさゝうですね。「或は小尻とがめ」と云つてあるから……。
○山崎　私はさうは思ひません。女郎町にいつも來る地廻り連中同士のことだから、互に見知り越で悪口を云つてゐるんぢやないですか。それから、「頭巾を取るの、羽織が見えぬの」といふのは、この喧嘩沙汰とどういふ關係になります？
○三田村　ふんだくられるんでせう。「鼻ねぢ」は林君御持參のがそこにあるから……。
○林　「手に白双取」私はこれはシラハドリといふものがあるんぢやないかと思ふ。十手でもあの鈎に

双をかけて落してしまふ。あゝいふものがあるんぢやないかと思ふ、十手の一種に白双どりといふ名稱があるのではないでせうか。
○水谷　「鼻ねぢ」みたいなものがあつたんでせう。
○三田村　「白双ねぢり」か。
○山崎　それを、道具を使はずに、素手で取る工夫をしたのが、例の柳生流の極傳「眞劍白双取」なんでせう。
○三田村　かういふ色町は、身柄のあるものゝ夜など行くところぢやない。これは江戸にもあり大阪にもあるが、遊女町で切られた場合には下手人をとらないといふことになつてゐた。さうでせう、一町のうちに九所もあつちや堪らない。
○山崎　「鮨屋の息子」と特に一枚數へたのは、大津で鮒鮨屋が多いから、何か彼等の風俗がきまつてゐたものらしい。
○林　「丸太舟」は丸木舟で、一人乘つて漕ぐ舟があるんでせう。
○山崎　筏ぢやありませんか。
○三田村　私も筏ぢやないかと思ふ。

○服部　併しあの邊で筏を出しますか。
○林　筏はどうでせう。今でも邊鄙では獨木舟を使つて居る處があると聞いて居る、其頃琵琶湖沿岸で端舟の樣に使つて居たのではないでせうか。馬方に對する水主で、船頭などと云へない程度の小さいものぢやありませんか。
○山崎　成程、筏はいけないかも知れません。琵琶湖では筏を伐り出す場所が無い。
○三田村　そこで大分景氣が直つて、この柴屋町の中に揚屋があつたかどうか疑問ですが、こゝで有名な女郎をあげて遊んで、その翌日は關送り、これは逢坂の關でせう。
○木村　關を越すんですか。
○山崎　いや、もう越えてしまつてゐます。
○三田村　困つたな。
○林　鹿嶋立みたいなもので、たゞかういふ言葉があるんぢやないですか。
○樂堂追記　往昔、逢阪には大關小關と二ケ處の關があつたといふ。大關の方は後々までも傳はつた故蹟で、此本文では其處はもう越えて了つてゐるが、小關の方は未だなのかも知れない。尤も、その小關は疾くに忘られてゐるから、此本文の時代にまで小關を考へるのは無理と思はれるけれども

……。
○三田村　もつと困つたのは、こゝには格子女郎が一人も無いんで、併し書いてゐるんだから、無くつてもどうも仕方が無い。大分酒を飲んで、御機嫌で、何でも望めといつたので、禿が飛んでもない註文をした。こゝは大に前の名譽を取返すつもりで書いたんでせうが、同時に禿の伊勢參が大盡の見えでもあり、誇りでもあつたことがわかります。どういふことでも遣れば出來るものだと云つて、その案外なことに驚いてゐる。
○林　何かかういふ例があつたんでせう。
○水谷　さうでせうな。
○服部　女郎の名前の「小太夫」はいゝが、兵作、虎之介なんていふのがありますか。
○三田村　兵作はどうですか、虎之介はありませう。
○木村　併し駕籠二挺竝んだら、大津の町は通れますまい。
○三田村　今なら自動車を二つくつければ出來る。
○服部　その代り警察がやかましいでせう。
○山崎　大分以前の話ですが、私等が中央線の夜行が甲州方面へ行つた時に、八王子の停車場のお茶

賣を人間ごと買ひ上げて、終夜燗をつけさせながら行つたことがあります。その茶賣は非常に忠實なやつでしてね、炭が無くなりさうになると、途中處々の停車場へ下りては補充してくれて、たうとう甲府まで飲み明しました。吾々のはまあその程度の贅澤ですな。

○仙秀追記　「羽織が見えぬの」は、此頃のひやかし連は羽織を頭上よりスツポリかぶつて出かけたものもあるので、延寶八年板「難波鑑」に「若きものはゑもんつくろひ編笠をかぶり羽織をかづきてしのぶすがたもいとおかし」また「鳥邊山」にも「羽織かついで茶屋ぞめき、ふたせの玉に見つけられ」などあるのもそれです。今日でも喧嘩があると側杖を喰つて逃出す人などは帽子や履物などを捨てゝゆくその様子が目に見えるやうです。

欲の世中に是は又

本朝遊女のはじまりは、江州の朝妻、播州の室津より事起りて、今國々になりぬ、朝妻にはいつのころにか絶て、賤の屋の淋しく、嶋布を織、男は大網を引て、夜日を送りぬ、室は西國第一の湊、遊女も昔にまさりて、風義もさのみ大坂にかはらずといふ、浮世の事は、しまふた屋の金左衛門を誘引て、同しこゝろの瓢金玉、ぬけ舟を急がせ、其夕暮の空ぼてりして、戀の湊に押付、まづは碇をおろさせける、然も七月十四日の夜なり、此所は十三日切に、萬世のやかましき事をも互にすまして、盆の有様をみせて、男はちいさき編笠をかづき、女は投頭巾に、大小を指もありて、女郎まじりの大踊、みるから此身は馬鹿となつて、袖の香ひに引るゝ、立花風呂丁字風呂、すなはち爰の揚屋也、廣嶋風呂に行て、亭主八兵衛にあないさせて、丸屋姫路屋あかし屋、此三軒に、八十余人の姿を見盡し、其中で天神かこひ七人抓て、誰に思はくもなく、酒になして、あるじに私語しは、七人のうちにて、何れなりとも氣に入たらば、それに枕定めんといふを聞て、女郎おもひ〳〵の身嗜、みる程笑し、醉覺しに千年川といふ香爐に、厚割の一木を燒て、きかせけるに、こゝろもなくそこ〳〵に、取あげてまはしける、いとはしたなし、末座にまだ脇あけの女、さのみかしこ顔もせず、ゆたか

に脱懸して　肌帷子の紋所に、地蔵をつけて居るこそ、いかさま子細らしく見えける、手前に香爐の廻る時、しめやかに聞とめ、すこし頭をかたふけ、二三度も香爐を見かへし、今おもへばといふて、しほらしく下にをきぬ、世之介言葉をとがめ、此木は何と御聞候と申、正しくもろかづらといふ、さても名譽の香きゝかなと、懐へ手を入又取出す、所をおさえ、申〳〵わたくしなどが、何としてか聞候べし、其木は江戸の吉原にて、若山様の所縁ではあらずやといふ、いかにも〳〵あふての名殘に、もらひまして、といふ、さぞあるべし、私の與風申候は、備後福山の去御方、江戸にて若山さまの香包と、假初の袖にとめさせられ、同じ枕の夜、いつよりは、うれしさのまゝに忘れず、いまにおもひ出し候と申、横手をうつて、ゑんはしれぬ物かな、其備後衆の十がひとつ、かはいがられたひとなづめは、亭主床とつて、蚊屋釣懸て、是へと申程に、夢見よかとはいりて、汗を悲しむ所へ、穐までのこる螢を數包て、禿に遣し、蚊屋の内に飛して、水草の花桶入て、心の涼しきやうなして、都の人の野とやみるらんと、

いひさまに、寢懸姿のうつくしく、是はうごきかとられぬと、首尾の時の手たれ、わさとならぬすき也、假にもさもしき事はいはず、かはいさのまゝに、人のほしがる物は是ぞと、巾著にあるほど打あけて、物數四十切ばかり包て、袖に投入れば取敢ず、夜もあけて別れさまに、旅の道心者の、こゝろざし請度といふ、彼女郎、袖の包がねを、其まゝとらせける、修行者何ごゝろもなくもらひて、四五丁も行て立歸、是は存もよらぬ事、一錢二錢こそ申請しに、今の女郎にかへすと投捨てゆく、昔はいかなる者ぞとゆかし、世之介此女の心入をおどろき、様子をきけば、隱れもなき人の御息女なり、請出して直に、丹波に送りぬ、行方しらず

○服部　「本朝遊女のはじまり」私の活字本には「本町」となつてゐますが、これは無論間違でせう。日本の遊女のはじまりは、江州の朝妻、播州の室津とある。江州の方はいつの頃にか亡びてしまつ

て、その邊の家では淋しく嶋布を織つて居り、男は男で大網を引いて、漁などをして暮してゐる。「室は西國第一の湊」播州だから西國と云つた。西國舟路の要港で、遊女も昔以上に盛です。大阪第一主義の西鶴ですから「大阪にかはらず」と云ふ言葉を使つた。世の中の事を捨てゝしまつて、ぶらぶら遊んでゐる金左衛門を誘つて「同じ心の瓢金玉」は今いふ瓢輕な人間のことでせう。「ぬけ舟」は存じません。何かお説があることでせう。私の考では定期船でない、臨時の船ぢやないかと思ふ。それを急がして、朝出たか晝出たかわかりませんが、その夕暮に室へ著きました。時は七月十四日で、丁度上方では盆と暮の大節季なので、こゝでは十三日までに勘定な

百人女郎品定所載

好色一代男

んかを濟して、今日からはお盆です。踊の人數の中に土地の女郎もまじつてゐる。それを見てゐると、ぽかんとした氣になつてしまふ。その揚屋は立花風呂だの丁字風呂だのといふ風呂屋名前の家で、世之介は廣嶋風呂といふのに行きました。この三軒に八十何人の女郎がゐるのを、天神鹿戀のうち七人を選み寄せて、誰に遠慮も無く酒宴をはじめた。世之介が亭主に、若し氣に入つたやつがあつたらそれと寢ようと云つたら、女郎達が各〻自己推薦をするのが見るにをかしい、といふのでせう。

○林　「浮世の事はしまふた屋」といふのは、商賣をしないことでせうね。

○山崎　さうでせう。

○三田村　「永代藏」にも「浮世のことはしまふた屋」といふのがありました。

○服部　無職渡世ですな。

○山崎　ですから「しまうた屋」といふと、先づ財産家に見られる。

○林　「空ほでり」は夕燒でせう。或は「戀の湊」といふのにかゝつてゐるかと思ふ。「ほでり」で熱を持つてゐるといふころから……。

○三田村　大阪のことは「色道大鑑」には「大阪は大廓なれども田舍なる故に髮のつと專也」とあつて大に田舍扱ひをしてゐる。明曆二年の「まさりぐさ」には「當道盛んになりて三十と せ餘り以來貴とをなく賤とをなく此道を好む人多かり」とあつて、新町は寛永頃からあつたけれども、本當にはやり出したのは寛文あたりからぢやないかと思ふのです。「大阪に變らず」といふのでは褒言葉にもならないが、褒めたんでせうか。

○水谷　けれども上方の人に云はせれば、嶋原以外にはいゝところが無いんですから、やつぱり褒めたんでせう。位は無いが繁昌はしてゐる。だから大阪に匹敵してゐると云へば、いゝ方の意味だらうと思ふ。

○林　「男はちいさき編笠をかづき、女は投頭巾」といふのは、男は女裝をし、女は男裝をすることを云つたんでせう。まあちよつと上方でいふお化みたいなものですね。

○服部　彦根屏風ですな。……それから程たつて、世之介が持つてゐたのか、揚屋の方から出したのか、千年川と銘のある香爐に厚割の香木を燒いて――これは普通名香は小さく割つて惜むものですが、それをゆたかに見せる爲にやつたのか、或は厚割でないと、四五人もの人が聞く場合には、あとの方は末枯れて匂が變りますから、さうしたのかも知れません。皆何の心もなく、そこ〳〵に次へ廻すのに、一人「脇あけの女」ですから、まだ年も若い。それが事々しい顏もせずに、「ぬぎか

けの肌帷子」といふのは、うちかけを半分脱いでゐるやうな形かと思ひます。何だか様子ありげなのが、自分に香爐の廻つて來た時、しづかにこれを聞いて、「すこし頭をかたふけ」は香を聞く態度であり、又香を聞く式でもあります。二三度香爐を見返して、「今思へば」と云つて下に置いた。此木を何と聞いたかといふ。かういふことを聞くのは伽羅にきまつて居ります。銘は何だといふので正しく「もろかづら」と答へた。これはえらい香きゝだと云つて又懐へ手を入れたのは、別の香を取出すつもりだつたのでせう。それを押止めて、私は決して香がわかるわけではない。たゞ今きいた木は江戸の若山様のゆかりではございませんかといふ。「ゆかり」は香とその人間と兩方にかゝつてゐるやうです。いかにもその通り、逢つて名残に貰つて來たんだといふと、女が、自分の知つてゐるのは備後福山の或方が、「江戸にて若山さまの香包……」こゝは十分にわかりませんが、江戸でその男が若山に逢つた時、香包を貰つた、その香を袖にとめて一緒に寢た晩が嬉しかつた、といふんでせう。それで今思ひ出したのです。世之介が、その備後の男の十分の一でも可愛がられたいと云つた。「夢見よか」なんか隨分厭味な言葉ですが、「汗を悲しむ」といふのは、暑がつて汗が出て困る、とでも云つたんでせう。秋といつても今の陽氣ならまだ夏の最中ですから、生殘つてゐる螢を蚊帳へ放して、水草の花桶を入れたりして、心のすが〳〵しいやうにする。「都の人の野とや見

るらん」は何か歌があるんでせう。寢懸姿が如何にも美しくつて、「是はうごきがとれぬ」は世之介の讃歎の言葉です。假にも卑しいことは云はず、可愛いので、巾著にあるだけの銀をあけてやつた。「四十切」は三田村先生に御説がございませう。「別れさまに」世之介は立出る、女は送つて出る。そこへ旅の道心者が勸化を乞ひに來た。さうすると女は今世之介に貰つた一包をそのまゝ遣つてしまつた。道心者は何心なく貰つて、四五丁も行つてから歸つて來て、こんなに大金を頂戴するわけには行かない、と云つて返した。二人とも欲氣の無い人間を出して來て、これが「欲の世中に是は又」といふ題に照應して居ります。世之介は歸つてしまつたんですから、あとでこの話を聞いたんでせう。不審に思つて樣子を聞いて見ると、もとは有名な人の娘だといふことである。早速請出して、「丹波へ送りぬ」は親が丹波にゐるんでせう。それから後は一向消息が無い。

○林　西行の銀の猫を反對に行つたんですな。

○三田村　馬鹿に思はせぶりな女だね。

○服部　清少納言を女郎にしたやうな女ですな。

○林　「四十切」は一歩ですか。

○三田村　さうです。

○蔦魚副書　好色由來揃に「すくなふて一切にはなることぞかし」五箇の津餘情男に「一切はづむ一角仙人の行法」一角といふのも一歩のことで當時の通言です。

○服部　十兩ですな。「蚊帳の中に螢放してア、樂や」なんていふ句がありますが、螢を蚊帳へ入れると、臭くつて、あまりすが〳〵しくありません。

○林　それややつぱり客觀的に外から見ないといけませんよ。

○三田村　芝居だね。――肌帷子に紋がついてゐますか。

○山中　それに地藏樣の紋もわからない。

○三田村　併し昔は隨分笹棒なやつがありますからね。「色里三所世帶」にこんなことが書いてある。「蝶に唐花矢車に鳥居、又七ツ櫻に木の字のやつし書、むすび文を鼠の引所、つなぎ舟にかざり松、丸のうちに鬼の打違へ、かさね舟中に數珠もたせたる大黑、釣鐘達磨のならべ紋、酒はやしに蛇のまとひたるも有、是皆色河原の太夫子共の隱し衣裳の替紋に極れり」隨分大變なのがあります。

命捨ての光物

ひらに若衆狂ひも、面白ひ物じやと、世之介を樣々勸て、靈山に誘引、稽古能過て、人の歸しあとは、暮の松風、あげ麩の音、精進腹では酒も飲れず、さあ爰が、分別所、何と仕やるぞ、けふはかはつて、玉川伊藤其外四五人取よせよと、宮川町に早駕籠、目をふるうちに、ござりました、是を見ては、いやといはるゝ事か、或人譬て申せしは、野郎翫びは、ちり懸る花のもとに、狼が寢て居るごとし、けいせいに馴染は、入懸る月の前に、挑灯のなひ心ぞかしとは、いかなる人も此道には、迷ふべし、夜終夢もむすばず、枕躍よい年をして、螺まはし扇引、なんこよひて、おのづと子共こゝろに成て、立噪ぎ、身は汗水になして、風待顏に南おもてに出て、おりふし五月の空闇かりしに、高塀の見越に、榎木の有しが、茂の下葉より、數ある玉の光り物、おの〳〵驚き、庫裏方丈にかけこみ、氣を取失ひ、或は、臥まろびぬ、中にも男ひとりといはれて、すこし力瘤ある者、半弓に鳥のしたの、矢の根をつがひ、榑椽より下に、

飛下るを、瀧井山三郎と申、少人つゞきて、彼男を押止め、譬ば何者にもせよ、さばかりの事もあるまじ、暫く御待候へ、手捕にも成へしと、遙なる木蔭に行て、見あぐれば女を星の林のごとく、又一かたまり眞黑なる物うごきぬ、山三こゝろをしづめ、あやしや何者と、言葉をかくれば、さても〳〵御うらみあり、矢先に懸つて果れば、此うき目は見ず、御情にて御とめあそばし、なを思ひは胸にせまり、こゝろの鬼骨を碎き、火宅のくるしみも今ぞと、こぼるゝ泪袖に懸れば、湯玉のごとし、さては、誰をか戀たまふといふ、問れてつらし、何日芝居にて御面影おがみ、樂屋歸の、御あとにしのび、御門口に、イ御聲をきく時、死入事いくたびか、けふは東山への御會と、こんがうどもひそめくを聞て、今一度はいし、首くゝりて、浮世の隙を明むと、是なる梢にのぼり、然も御こと葉をかはす事、思日は殘さじ、不便におぼしめされば、なき跡にて、一へんの御廻向と、水晶の珠數を捨る、さてこそ、思ひ合候事、わたくしも、こゝろに懸ればこそ、あやしめる人をとゞめて、是まで尋ね候、一念通ふこそうれしけれ、爭其まゝ、そのこゝろざしを、捨置べきや、御望にまかせ申べし、今宵の明るを待給ひて、明日はかならず、わが宿にと申を、人々聞もあへず、松明とほし連て、大勢取まはし、あらく引おろす時、山三色〳〵斷も聞いれず、樣子をみれば悲しき寺の同宿也、此道のしんてい、殊勝なる事ぞと、世之介取もつて、こゝろまかせに逢する事、後はすこし壺煎自慢して、かため證文まだ疑ひ、左の腕の下に、慶一大事と、いれ入墨有しは、かの法師を、慶順と申けるとや、此事江戸にて、此好人、役者まじりに、懺悔咄しせし時、何隱すべしと、段〳〵山三郎、身の上の事を、昔を今に愁歎してかたりぬ、本じや

○水谷　「ひらに」はどういふんですかな。「ひとへに」といふやうな意味ですか。「あげ麩の音」はわかりません。今日は變つて若衆狂の方をやらうといふのですが、「取よせよ」といふのは面白い。「目をふるうち」はやがて來たといふことでせうか。あとで御說明を願ひます。「よい年をして螺まはし

扇引」若衆などはこんな遊びをしてゐる。「なんこよびて」は何ですか。

○林　拳でせう。

○服部　數を掴んであてるやつでせう。

○山崎　「なんこ〳〵いくつ」といふやつですな。此頃ぢや上方ではあまり遣つてゐないが、東京の子供はよく遣る。

○服部　ところが熊本へ行くと盛んに行はれてゐます。

○水谷　「ひらに」は如何ですか。

○三田村　眞平ぢやありませんか。

○山中　普通に、平にぢやないか。

○林　ひたすら、でせう。殊に面白いといふ意味で……。

○山崎　「女も面白いが、併し」と受けてゐるんでせう。

○三田村　靈山へはよく若衆を連れて行つたやうです。

○山崎　靈山の謠講や稽古能の事は、野々村君がよく知つて居る筈ですが、「謠講」は素人連の素謠會でしたけれども、「稽古能」といふのは玄人の手興行でした。公向きに能興行をするには、勸進能の

許可を受けて、千本邊りでやらなければならず、隨つて手續や設備が面倒でしたから、通常の興行には「稽古能」といふ名義を藉りて、實はやはり金を取つて觀せたのです。

○林　何阿彌々々々といふ貸席みたいなものがありますね。

○水谷　「あげ麩の音」は？

○三田村　麩をあげる音を松風に通はせたんでせう。

○山崎　麩を油揚げにするといふのでは、私にはわからない。普通は麩の製造機械から出來た麩を取上げたのを、あげ麩といふんですがね。

○三田村　併し上野の御馳走には麩をあげたのがありますよ。ひねつたやうな形で、それがあげてある。いつ頃からあるものか知りませんが……。

○水谷　お寺の御馳走ですかな。

○木村　「あげ麩」は「五人女」にもありましたね。「椎茸のにしめあげ麩葛袋など取をくもおかし」

○柴田　「二代男」にもあります。「中陰と見えて、庭には四十九日の餅搗く音、拵麩の薫、荒和布刻むなど、世中の無常、時しも參り合ふこそ悲しけれ」

○林　「目をふるうち」は、待つてゐる間に、雙六をやつてゐるんぢやないか。

○三田村　煙草一服の間、といふことでせう。實際雙六を打つたんぢやなしに、さういふ短い間といふことを現した。

○山崎　目を振るほどの間、ですな。振り投げた賽の目が出る前に、といふんだから、こいつは迅い。

○木村　靈山から宮川町まではいくらも隔つてゐないことですね。

○林　「野郎翫ひは、ちり懸る花の下に……」といふのはよく引かれる文句だが、よくわからない。

○三田村　これは反對の文句ですね。女郎の方は誰も迷ふが、若衆の方は迷はない。

○水谷　兩方をひつくるめた意味ぢやないですか。

○三田村　さういふものがあるが、又それに特別な面白味がある、といふんでせう。

○山崎　「散り懸る花のもとに狼が寢てゐるごとし」だから、落花狼藉かな。

○三田村　何だか物騷ですな。それに迷ふといふのか知らん。

○林　そぐはないところがある、といふのかも知れない。

○服部　よくわかりませんが、何か穿つてゐることがあるんでせう。

○林　とにかく名文句としてよく引用されてゐますね。それからこゝに書いてある遊び、扇引といふ

やうなものは、こゝに圖があります。これは師宣の畫を谷文晁がうつしたもので、署名はありませんが、この「菱川吉兵衛師宣筆國風人物遊戯三昧圖」といふ字が慥に文晁です。その中の圖を入れて置きませう。

○山中　「枕躍」は枕を躍らせるんぢやないか。樽躍などといふものもある。

○林　日本の手品に使ふ角形のもの、あゝいふものを弄ぶのではないでせうか。

○水谷　このあとは格別いふこと

も無い。「鳥のした」といふのは何ですか。

○林　鳥の舌の形をした矢でせう。

○山中　これも圖を書いて來ましたから、こゝへ入れていたゞきませう。

○水谷　皆は氣を取失つたが、その中に男一人と云はれて、少しは腕に覺えのあるものが、今お話の鳥の舌の矢で射殺さうとしたのを、瀧井山三郎といふ若衆が押とめて、何者にしろ大したことはあるまいから、手捕にしたらよからうと云つた。さうして聲をかけて見ると、今の矢先にかゝつて殺してくれゝば、こんな思ひはしなくつてよかつたらうといふ。毎日芝居であなたのお顔を見て、死に

入るやうに思ふので、今日も此處へ來られるといふことを聞いて、今一度お顔を見て首をくゝるつ

もりであつた。然るに今此處で御言葉を交すこと、まことにありがたい。不便に思し召されゝば一遍の御回向を、と云つて水晶の珠數を捨てた。此方にも思ひ合すことがあればこそ、射殺さうとした人を止めたのである。決してそのまゝにはしないから、明日まで待つてくれ、といふ。そのうちに大勢が松明をつけて來て、その男を取圍んで、樣子を見るとこの寺の同宿で、この道に執心のある

坊さんである。「壺煎自慢」といふのは？

○林　揚屋に行かずに直接遊女の家へ行つて、遊女と遊ぶことでせう。

○三田村　「色道大鑑」にあります。「擧屋にて遊宴せず、傾城の家主の館へ行て女郎と共に興する貌也」とある。今なら藝者屋へしけ込む格だね。

○林　この入墨は「慶、一大事」でせうね。

○水谷　この懺悔話の一座には山三郎もゐたんでせうな。

○三田村　瀧井山三郎は伊原君の「日本演劇史」にも延寶の初に歿したと書いてあります。

○蔦魚副書　慥なものとも思へませんが、久夢日記に山三郎は寛文度の江戸町奉行嶋田出雲守に寵愛されて居て、座元になりたい願ひがあつたけれども、同座の外には許されない、其處で中村勘三郎を毒殺して其跡を奪はうとしたが、其事が早く顯れて了つた。しかし嶋田のお蔭で內濟になつたが遂に己も毒飼されたといふ。

○木村　坊さんが亡き跡の回向を賴んでゐるのは面白い。

○三田村　この話が無いと、前の吉野の話が生きて來ませんな。「此好人」は男色の好な人が江戸で集つて話をしたんでせう。

○服部　この坊主ぢやありませんか。
○山崎　坊主ぢやないと面白くないですな。めい〳〵過去の懺悔話をした時に、この坊主が山三郎の身の上のことを話したといふことになるので……。
○三田村　私は、坊さんにしなくつちやいかん、といふことは無いと思ひますがね。
○林　やつぱり當事者でなくつちやいけない。
○山崎　男色懷古談を遣つたわけですね。
○山中　光物は水晶の珠數だつたのか。
○山崎　馬鹿に光つたものですな。
○服部　「星の林」といふことは何かありますか。
○柴田　萬葉集にあります。「天海丹雲之波立月船星之林丹榜隱所見」
○間　人麻呂の歌ですな。
○服部　仰山に云つて、種は珠數なんですね。
○山崎　この坊さんが出るまでのところは、何だか鵺退治氣分になつてゐる。
○林　「同宿」は？

○三田村　所化のことです。道成寺の中へ出て來る、「きいたか坊主」なんかゞ同宿です。つまり坊主の下つ端です。元來書生坊主だから、男色なんて云へた義理ぢやないんだがな。
○木村　そんな手合でも水晶の珠數なんか持つてゐるんですか。
○服部　今なら早速ガラスの疑がかゝるところでせうな。尤も當時は却つてガラスの方が高かつたかも知れませんが……。
○山崎　「壺煎」の出所に就て臆説があるんですがね。豆を壺に入れたまゝで煎つて置くと、長く濕らずに保つといふのです。炮烙で煎つてから壺へ收めずに、直接のまゝで煎るのです。
○三田村　ところによると「入」の字が書いてあります。
○林　此卷の八の都の姿人形と題する中にも「好き野郎の方へ二三日の壺入り」とあつて壺煎り壺入り何れにも書いて居る。揚屋でなしに直接遊女屋へ行くのを「壺入り」といつたのです。兎に角當時「壺いり自慢」といふ詞があつたに違ひない。
○若樹追記　嬉遊笑覽に箕山云擧屋にて遊宴せず、傾城の家主の館へ行て女郎と興ずるなり。此名目酒屋より出たり、調へて飲ずに酒屋の内に入てのむを壺入といふ、云々。
○山崎　「一大事」と入墨をするのが幾らもありましたか。

○三田村　あります。男女共にある。
○林　イレボクロと云つてあるのが面白い。入墨とは云はない。
○服部　今はかういふ入墨もありませんな。
○宵曲附記　「野郎翫ひはちり懸る花のもとに狼が寝てゐるごとし」の文句は「古今集」序の「いはゞ薪負へる山人の、花の陰にやすめる如し」を踏まへたものではないでせうか。
○仙秀追記　「螺まはし」は、「守貞漫稿」に、「貝獨樂の圖、ばいこまの名未レ聞レ之ども余が推て名レ之、俗は只ばいとのみ云なり。圖の如く始め上半を槌にて打かき去り小口を砥を以て磨し緒を以て回轉する也。京阪の男童貝徳と號け貝を回し勝負を示す、先其戯れは砂糖或は素麺等の空櫃の蓋を除き、其上に蓙の類を帖み蓋とし凹となし、二童各一貝を投入れ回す時相當て彈き出さるゝ方を負とし残り回る方を勝とし、專ら貝を賭として勝たる方へ負たる方の貝を取る也。文化頃より今に至り行はれ其始を知らず。

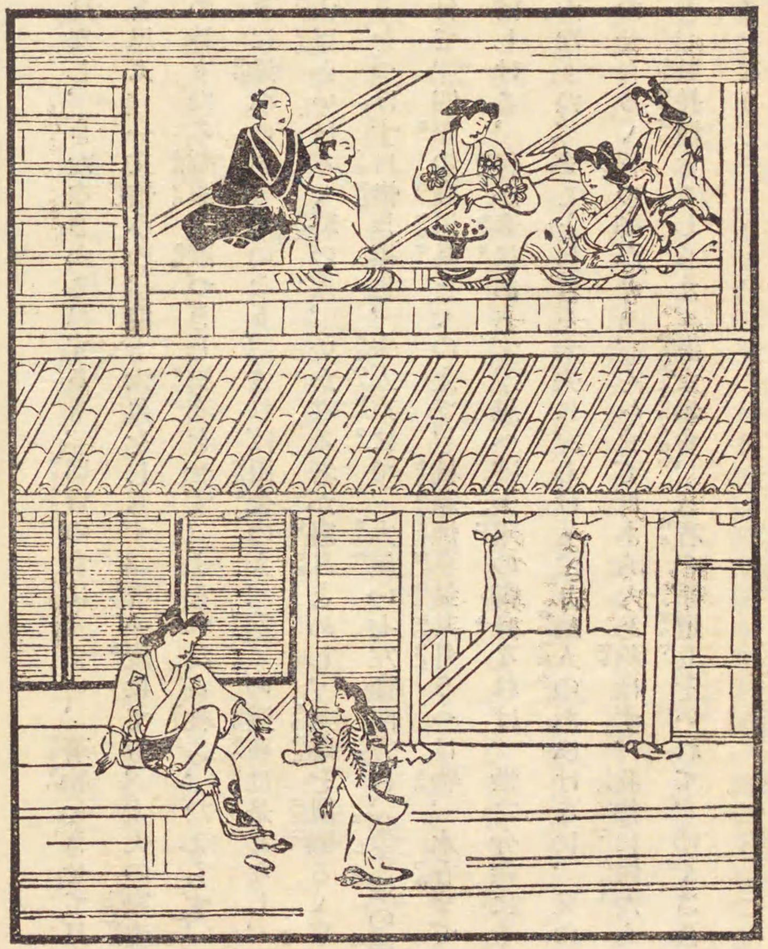
貝獨樂　（守貞漫稿）

右の如く賭物とするが故に、貝底に鉛をわかし入れ其上に晒蠟を以て不レ傾やうに埋レ之表には朱或は青蠟を以て平とす。多くは童の自製にあらず、店ありて賣レ之、價三五十錢より、右の如きは百文ばかりもあり、鉛を用ひざるをからばいと云屑とせず」以下江戸の事を記してゐる、一代男の「螺まはし」も如此遊戯なりしなるべし。

一日かして何程が物ぞ

堺の浦の櫻鯛、地引をさせて、生たはたらきを見せんと、京にて明くれ、山計詠居る末社召連、津守の神やしろ過て、北のはしにいれば、高洲の色町中の丁、袋町に著て、かれ是よせてみるまでもなし、あまた數よびて、いくらが物ぞ、天神小天神とせちがしこくきはめぬ、二階座敷に品を定め、酒もいまだ末〳〵にはまはらぬ内に、かづらき樣ちよつと、借ませうといふ、はや立て行、又女出て、高崎樣と呼立る、座につけば、入替り立替り、一時程のうちに、七八度宛かす程に、さてもはんじやうの所ぞ、馴染の客數も有かと、下を睨けば、物をいふ男もみえず、手枕して、煎じ茶がぶ

〳〵呑盡し、あくびしてはあがり、おりては淨瑠璃本など讀、何の用もなきに、一座をさましぬ、此里の習ひにて、たび〳〵かしに立事を、全盛に思はれけるとみえたり、よろづかぢくろしく、あたら夜終新三十石に、乘合のこゝ地するなり、足をのばせば寢道具みぢかく、蒲團はひえわたる、なんと世之介樣、旅の悲しさを、よく御合點あそばして、京の女郎樣の、御氣に入やうにあそばせといふ、いかにも此浦のしほを踏て、老ての咄しにもとおもふぞ、寢覺のきづかひさに、人にはだをゆるさず、帶仕なから寢入とあれば、同し枕の友ども、一人は硯引よせ、家の差圖を書て居る、又一人は、只居るがはと寢ながら、編笠の緒こしらえける、獨は象牙の掛羅より、もぐさを取出し、三里にすえて貞をしかむる、女郎は女良でかたより、更ゆくまで、糸取手相撲して、折ふしは眠、きのどくなる夜の明るを待は、そのまゝ籠り堂のごとし、面白からずとて、此所にても、口きく程の若き人、新町に手あひを拵え、ためて置て一度に、嶋原で、遣ひ捨る事尤也、傾城狂ひのしまつと、下手に月代刺すほど、世にいやなる物はなし、きたなきかこひするも、切賣の女に、よい、著物をきせて見るも、同し事ぞと思ふ、一文惜みの、四十六匁をしらず、唯一度にても、太夫の寢姿を見るべし、色の替りたる紅裏、際づきし脚布をせず、よごれたる枕に、たよらず、さりとては、大きに違ひのあるものなり、されば田舍の人、適〻の遊興は是非なし、定宿をきはめ、大臣といはるゝ程の人、いかなる者か寢息とめし、其跡を肌馴るゝ事、すこしのこゝろをつけず口惜き事也、去人京にて、丸屋の七左衞門方に、梨子地の塗長持に、定紋を付て、四季の寢道具とゝのえて、枕箱煙草盆其外うつは物、水呑まできよらかにあそばしける、何か奢にあらず、思へば大事の御身なれば、世之介樣にも、是程の事はとかたりぬ、まことにさる太夫に、わけもなき病人のあひけるに、又の日は、檜扇をもたせらるゝ程の御かたも、それまではあらため給はず、我都に歸たらば、分別があると、數長櫃をこしらえ、遊女參會、入程の諸道具をいれて、ゆくさき〳〵、もたせ侍るとなり



○山中　「堺の浦の櫻鯛」は彼處の名物で、網の地引をさせて、それを取る。京で山ばかり見てゐる連中、末社連を引つれて、高洲の色町へ來た。頭數を皆呼んでいくらが物ぞ、といふやうにいゝ加減にきめた。二階座敷でまだ酒も一座に廻りきらぬうちに、「かづらき樣ちよつと借ませう」と呼んで來る。それも入替り立替り、一時ほどの間に七八度づつも立つて行く。これは本當に呼ぶのではなく、はやるといふことを見せる爲に遣るのである。だから下を覗いて見ると、何か云つてゐる男もなく、たゞ手枕をして寢ころんで、煎じ茶をがぶ〳〵飲んで、又上つて來る。又下りては淨瑠璃本なんかを讀んでゐる。かうして一座の興をさますのだけれども、この「貸して下さい」といふことの多いほど、こゝでは全盛といふことになつてゐるらしい。「かぢくろしく」はよく知りません。何だか狹つくるしい、ごた〳〵したところで、新三十石の乘合船みたいである。この旅の悲しさを合點して、京の女郎衆の氣に入るやうになさい、といふので、「いかにも此浦のしほを蹈で老ての咄にもおもふぞ」云々と答へた。連の一人は硯を引寄せて、部屋の圖なんぞを書いてゐる。一人はただゐるよりはといふので、編笠の緒を拵へてゐる。一人は象牙の掛羅――といふのは箱ですか、私は存じません――から艾を出して三里に灸をすゑてゐる。女郎の方も又女郎の方で、一方に寄つて、

絲取をしたり、手相撲をしたり、そんな風で勝手なことをして遊んでゐる、といふ有様らしいです。

○鳶魚副書　丸本が貸本屋の代物だつたのは寛政位まで〻せうか、讀み物になつて居たのです。諸藝太平記の「寫本の上るり本」とか、萩の露（元祿六年）

杣か臥す足をあらそふ燒火影

繪を見るまでの淨瑠璃の本

などの繪入本も畢竟讀み物であつたからでせう。

○林　「津守の神」は住吉ですか。乳守ぢやありませんか。

○水谷　今の遊廓は乳守と云ひます。ずつと南の端の方です。

○山崎　津守の神はつまり住吉明神ぢやないですか、大抵は一緒くたにしてゐる。此津の貿易といふところから云へば、津守が主宰してゐるわけですが……。併し、西鶴は住吉のことを津守と一口に書いたのかも知れません。

○樂堂附記　津守は萬葉集に「住吉の津守の浦に……」云々と詠んだ歌もあつて、住吉の内の津守とも取れゝば、津守が住吉であるとも取れる。和名抄に「西成郡津守郷」と見えてゐて、今の難波村、今宮村、木津村邊に相當し、昔の住吉郡の隣地である。古今著聞集に「住吉神主、津守國基」といふ名が見え、古くから此處に津守氏のあつたことは、姓氏錄などにも載つてゐる。

○服部　こゝに堺の圖がありますが、津守を南にすると、順序がをかしい。「北のはし」といふのもありますが、これは「北の端」と書いて地名です。

○山崎　以前、まだ私なんか幼少の頃まで、和歌山から大阪へ行くときは、堺まで來て、もう大阪は近いのに、必ず此處で一泊したものです。

○山中　「かぢくろしく」は如何です？

○三田村　知りません。

○山中　わからないね。

○林　いぢけてこち〳〵してゐることぢやないか。

○三田村　「新三十石」は「立身大福帳」に「當所京橋は淀川の船著にて朝は新三船より上る人と暮には過書てんとうに乘る人と」とあるやうに、過書船の外に、新三船とも云つて、通つてゐる船がある。寶永七年に廢れて享保に再興してゐます。前からの三十石は角倉の過書船で、この紀元はわかりません。

○山中　「華雜」は？

○三田村　普通は略袈裟の下に輪がついてゐるのを華羅といひます。それはいゝが、それからは艾が出つこない。

○林　何か轉じてゐるんでせう。第一大盡がそんなものをかけてゐるわけが無いし……。

○三田村　絲とりは綾取り、手相撲は指相撲でせう。

○山崎　現在でも、上方では絲取りと云ひます。

○林　「あたま數よびでいくらが物ぞ……」といふのは、皆呼んでもいくらのものでもないのに、天神の又下に「小天神」と更に小さく分けるやうな、せちがしいことをしてゐる。その無理に區別することを云つたんでせう。

○山崎　成程、さうですね。……「かしに立つ事」といふ、この「かし」は名詞でせう。今でも嶋原にはある。さうしてそれが、今では一種の式法みたいなものになつてゐる。

○林　「寢覺のきづかひ」は風邪を引かない用心ですかね。數寄屋では「指圖」と云ひますか。

○山崎　今は云ひませんが、普通は一切の平面圖で、地圖の如きもやはりさうです。家には限りません。

○山中　そんな風に、籠り堂のやうな樣子で夜が明けるのは、面白いことではないから、此處でも口をきくほどの若い人達は、新町に手合を拵へて、ためて置いて嶋原で使ひ果すといふのは、無理のないことである。けちなことをして女郎買をするのは厭なもので、下手に月代を剃らすと同じく面白くない。きたないかこひをするのも、局みたいな女にいゝ著物を著せるのも同じことである。けちなところで遊ぶ人は、一文を惜んで四十六匁を知らない。この四十六匁は、直ぐ後に「太夫の寢姿を見るべし」とあるから、太夫の遊びのことかと思ひます。「脚布」は腰卷です。いゝところへ行つて遊ぶのもいゝ、といふ意味でせうか。こゝのところはよくわかりません。

○林　寢道具とか、寢卷とかいふものは、どんな人が寢たかわからんものを、直ぐ用ゐるのは口惜しいといふんぢやありませんか。

○山中　そんなことをしたんですか。

○林　およしなさい、と勸めたんでせう。

○山中　それから今度はいゝ道具を拵へて、枕箱にかういふものを入れるんですかね。

○三田村　この「かこひ」といふのは茶の圍ひぢやありませんか。小綺麗であるべきところに、汚い圍ひを拵へるのは、切賣の女にいゝ著物を著せるやうなものだ、といふんでせう。もう一つ「されば田舍の人適ゝ……」のところは、遠國他國から來たものはそれでもいゝが、茶屋をきめて遊

ぶほどの人は、これではいかん、といふ意味だらうと思ふ。あとの方で「檜扇もたせらるゝ程の御かた」といつがわからない。

○服部　この檜扇は笏を持つといふやうな意味で、雲上人のことを云つたんぢやありませんか。

○山崎　女郎の方ぢやないですか。明日にも出世をして、所謂、氏無くして玉の輿で、檜扇を持つやうな身分になるかも知れないのだが、現在は何としても遊女なるが故に、わけもなき病人にも逢はなければならない。すればさういふ病氣まで檢査するわけには行かないから、……といふ意味ぢやありませんか。

○服部　私は、女がいろ〳〵な人に逢ふから、その逢ふ男の側を云つたものと解するのです。

○林　私もこの「檜扇」は中啓か何かをさう云つたんぢやないかと思ふ。さういふものを持つ身分の人でも、どんな病人がその寢道具をしたか、そこまではしらべるわけに行かない、といふことぢやありませんか。

○山崎　さうも解釋出來ますな。が、私はこれを讀んだ時、何の疑も無く前のやうに解釋したので、如何に立派な太夫たりと雖も、客を檢査して逢ふわけには行かないといふ風に考へたのです。

○三田村　これを男の方に解すると、僕は檜扇の始末に困る。

○山崎　林さんの御解釋では、「又の日」はどうなりますか。

○林　日をかへて、です。

○山崎　こゝに「梨子地の塗長持」とあつて、此處の文章では大した意味もありませんが、この頃の背景を觀れば、丁度梨子地流行の全盛時代で、豪奢を競ふ場合に、所謂元祿梨子地といふのを必ず用ゐた。これが流行つたのは、時代の豪奢なせゐもあるが、献上や賄賂として物を遣ふ場合に、競つて梨子地を使つたのが、梨子地を盛んならしめた大原因らしい。民間でも一番贅澤な場合にはこれを使つたので、女郎屋用の粗末でもい〳〵寢道具入に、梨子地を使ふといふのは、この場合その豪奢振をよく現してゐる。それを證據立てるのは鼓の胴で、鼓の胴に梨子地蒔繪のがあつたら、それは決して眞に優秀な作ぢやない、と云つて又、さう劣等な作でもなく、まづ第二流品といふことになつてゐます。といふわけには、贈物としての裝飾だから豪奢な梨子地にするが、本當の名作は惜しいから贈物には使はなかつた。つまり作行の幾らか劣つたものを、梨子地で立派にして贈つたのです。併し無論下作胴ではなかつた。この外富内貧の梨子地が、鼓筒鑑定の一つの祕訣になつてゐます。但しこれは元祿梨子地だけの話です。

○林　こゝではたゞ豪奢の意味ですな。

○服部　大に遊興經濟學を說きましたな。
○林　「てあひ」は？
○三田村　相手でせう。
○林　この新町といふのは大阪でせう。こゝの文章は、新町でなしくづしに遊ぶやつを、溜めて置いて嶋原で遣ひ果す、といふんぢやないですか。
○三田村　新町で女郎買をするやうな友達を拵へて置いて、それから嶋原へ行ぐ。野暮天ぢや嶋原へ行つても恥をかくから、さう云つたんぢやありませんか。
○山崎　さうぢやないと思ひます。堺では一切遊ばずに、若し一寸遊びたくなれば、せめて大阪へ行つて新町で遊ぶ。併しそれも手頃の相手を拵へて置いてお手輕に切り上げ、その餘力を溜め剩していつか嶋原へ行つて一度に遣ひ果す、といふ意味でせう。
○水谷　私もさうです。遊び友達なら必ずしも新町に限らない。お手輕な場合には新町へ行く。溜めて置いて大遊びをするなら嶋原へ行く、といふんだらうと思ひます。
○林　「傾城ぐるひのしまつ」は先刻山中さんの御說明の通り、儉約の意味ですね。東京で始末といふと、跡始末の方になつてしまふ。

○山崎　上方ぢや今でも儉約の方に使つてます。
○水谷　誰だつたか、この文句を引いて、跡始末の方に解してゐる人がありましたよ。
○木村　その前の編笠の緒を拵へるのは、鼻紙で退屈しのぎにやつてるのでせうな。前卷にあつた所謂紙ひぼでせう。
○林　先刻の「檜扇」のところですね、かうは解釋出來ないでせうか。雲上人は雲上人だけれども、又の日は女の檜扇を弄ばれるやうな身分の人でも、一々さういふことをしらべるわけには行かないといふ風に、西鶴流にひねつたんぢやないですか。
○三田村　それは少しひねり過ぎて、草臥れますな。
○山崎　「わけもなき病人」はやつぱり下の病でせうね。
○林　少し理窟を云へば、寢道具なんかだけ改めたつて、何にもなるわけはないんだがね。
○三田村　併しあの頃ぢや、今みたいに黴菌なんていふことは皆知らないから、そんなところで滿足したんでせう。
○木村　「遊女參會」は三度逢ふんですか。
○三田村　林　山崎　さうぢやない、參り會ふ意味でせう。

當流の男を見しらぬ

都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ、昔は博多小女郎と申て、冠氣者ありける、人の命を取て、袖の湊の大噪ぎよりこのかたは、夜の道をとめられて、晝さへ門をさして、獨〳〵くゞりよりの出入、然も武士はとがめ侍る、いづれかおもしろからず、比は水無月のはじめ、舟路もこゝろよく安藝のみや嶋に著ぬ、此所の市とて、五里七里の人、こゝにあつまりぬ、神前の千疊じきに、假寢をせし、里の小嫗をそゝのかし、芝居子に氣をとられ、遊女の買論、夜晝のわかちもなく、又類ひなき事どもなり、揚屋といふも內あさく、表にみえすき、女郎は浴衣染の帷子に、中紅の脚布を、わざと見せかくる、其初心さ何程、やう〳〵此ほと、岡崎を覺たる手つきして、只やかましき撥をと、しんきしの竹、かけてはすだれと、所のはやり歌、きくに笑しく、樣子見合て、宿をかりて、どれてもかまはぬ、此所てなる程いき過て、男ふるほどの、女郎よ

べと、太鞁は貳人、已上三人双て世之介も、金左衞門勘六一所に、あらひがきの、袷帷子に、ふと布の花色羽織に、さし渡し四寸五分計の紋に、鎌と、輪と、ぬの字を付て、蚊虻なる出立、わが身ながら、是は〳〵醜ひ物といふ、女郎も笑しがつて、盃も指ず、中間であいもんの言葉をつかひ、火形ならずなぶる、折ふし山がつの手籠に入、檎棚の盛を見せける、それかへとて、腰に付たる、はした錢を投れば、君達聲をあげて、ゆふべの事はと、余の事にして笑ひぬ、世之介中にも、子細らしき女に、さてわれ〳〵は、何者とみえますといふ、人間と見ゆると申、それはふるひ、商賣はといふ、最負目から見たてました、疊の上で育つ人じや、たぶんこなたは、筆屋どの、そなたは張箱屋、又は組帶屋殿で、あるべしと、思案しすまして申、さても〳〵、名譽じや、そこな者が獨、組帶屋が違ふた、兩人はさてもと、おどろく、顏をすれば、なをかつにのる事有、されば人の身持は、たとへいかなる著物にもせよ、腰の物のこしらえ、手足にてあらましみゆる事ぞ、殊更我召つれしは、堀川の勝之丞とて、廣い

京にもならびなき、小草履取、諸人の目にたつ僕也、是をつるゝ程の者を、かるく思ふは、こゝろのはたらかぬゆへぞ、迚も床に入てもよしなし、人形まはしして遊べと、捽箱より、たゝみ家體取組、上幕つらがくし首落し、五尺にたらぬ内に、金銀をちりばめ、自由を仕懸、六段ながらの出來坊うごき出ける、去程に、信太妻の女房、江戸風のしよていと申、世之介様それは其まゝ、吉原の、かの太夫さまに、いきうつしといふ、よくも見るやつかな、それに似せて作らせ侍る、此女郎を去大名のしのびて、三人同じ出立にて、市左衛門座敷にして、此内に思召の方へ御盃をと申せしに、すこしもせかずして、神ならぬ身なればゆるし給へと、勝手へ立て、禿に私語、手飼の鶯を取放させ、庭山にけはしく、申〳〵と聲を立る、三人一度に、何かと障子をあけて立出る所を、様子見すまして、本大臣さまへ盃をまいらせける、此首尾いづれもほめて、偸に尋ければ、三人ながら桑染の木綿足袋はかれしに、獨はな緒ずれの跡なき御方あり、地を踏給はぬ御方さまいかさまにもと、思ひざしせしと也

○山崎　「都より飛梅」、これは太宰府の飛梅に因んで云つたのですが、同時に世之介が九州へ飛んで行つたことをも現してゐる。博多――彼處を袖の湊といふと見えます。何か事件があつてから、夜遊びに行くことが禁制になつてゐる。猶その上に、武士が通行する場合は一層吟味をする。さういふきびしい有様では一向面白くないから、六月のはじめに船で宮嶋へ行つた。「遊女の買論」は女郎買の評議穿鑿、とでも云ひますかな。ところで揚屋と云つても内が浅く、表から見え透いてゐる。女郎も浴衣染の帷子に「中紅の脚布」、……「中紅」といふのは色の方ですか。

○三田村　中幅でせう。

○山崎　ではさういふことにして置きまして、それをひら〳〵わざと見せるやうにする。甚だ幼稚でやう〳〵「岡崎」――といふのは唄ですね――をおぼえたばかりの手つきで、所の流行唄をうたふ。で、様子を見はからつて、揚屋に入り、こゝで男を振るほど張りのあるやつを呼べ、と世之介が云つた。太鼓が二人だから自分を合せて三人、この太鼓といふのが金左衞門、勘六でせう。「あらひがき」は？

○服部　柿色のうすいんぢやありませんか。

○山崎　さういふ言葉がありますか。

○服部　あらひ朱といふのはあります。

○山崎　さうですか。鼓胴の鉋目の一種に荒い檜垣形に削つたのをアラヒガキと云ひますから、何かさういふ模様でもあるのか知らんと、ちよつと思つたのです。處で、帷子に袷がありますか。

○林　あるんでせう。何しろこゝは流行おくれのものですよ。

○山崎　「鎌と輪とぬの字」はカマワヌといふ謎の紋。「蚊虻なる出立」は「文盲なる」で、妙な字を當てゝありますが、非文化的とでも譯しますかな。

○服部　物を知らないんでせう。

○山崎　かういふ様子をしてゐるから、女郎も馬鹿にして盃もさゝない。仲間同士で符牒の言葉を遣つて、ひどくなぶつてゐる。

○林　「博多小女郎と申て」とあるが、何か博多小女郎の故事がありますか。

○水谷　實説が何かあつたんでせうな。

○三田村　ありさうですが、見當りませんでした。

○林　袖の湊といふのは昔唐船の著いた博多の津のことです。

○服部　彼處は兩方から突出して、抱いてゐるやうになつてゐるからでせう。尤もさういふところは方々にあるから、袖の海とか浦とかいふのも方々にあるわけです。

○林　宮嶋に遊廓がありますか。

○服部　あります。今でもあはれに殘つて居ります。五軒か六軒位ですが……。

○山崎　浴衣染といふのは、簡單な模樣ですかね。「岡崎」は？

○林　「岡崎女郎衆」といふ、あれでせう。

○三田村　京傳は柴垣と共に、寛永頃からの踊唄で、岡崎は足で蹈み、柴垣は手拍子を取る、と云つてゐます。「江戸雜聞錄」には「岡崎女郎衆と云ふ歌は寛文より元祿の頃へかけて一節切にも三絃にも合せて專唄たる小唄也」とある。時代から云へば岡崎の方が遲いのです。

○山中　「しんきしの竹、かけてはすだれ」といふ、この唄は何だかわからないが、いゝやうだね。

○林　岡崎なんかにもいろ〳〵說があるけれども、あれは後からくつつけたので、あてにならない。「さんさ時雨か萱野の雨か音もせできてぬれかゝる」などでも、仙臺の人は國歌だといふが、私に云はせれば夜這の歌で、あんなものを國歌といふのは仙臺の恥辱だと考へるんですがね。

○三田村　併し僕はいつかその說を聞いてからでも、その夜這の歌を兵隊に唄はせたといふのは、やつぱり政宗らしくつてえらいと思つてゐる。

○林　「かまわぬ」の紋は何かありませう。

鈎庭雜考所載

○三田村　「鈎庭雜考」には宮雀の挿畫を出し、「續五元集」の句を添へて、「此かまわぬの模樣は明曆萬治寛文ころの草子の畫に奴僕また小坊主の振袖などにも付たる」と云つてこの本文を引き、「おもふにそのかみ寛永ごろより俠客の奴等が好み紋なるべし」とあります。文字と畫とを配合したもので、これは思惑模樣と連絡のある、判じ物です。文化に團十郎がこの模樣を流行らせたことがある。伊東蘭州の「高尾考補綴」を見ると、吉原袖鏡に就て、この袖鏡は年號を失つて時代がわからないが、挿畫のうち、奴の著るものにカマワヌといふ判じ物を染めたのが畫いてあり、その畫風から云へば明曆、萬治頃の板本だと云ふことが出てゐます。

○水谷　前から流行つたものでせう。
○林　「あいもん」
○三田村　これは「太平武門不忘記」に鐵炮の好事を書いて、「一挺ごとに筒臺金具諸道具に至るまで相紋相印一二三の次第を分べし」とある。これでせう。
○山崎　その折から山樵が手籠に林檎を入れて持つて來た。それを買へと云つて、腰につけた端錢を投げると、女郎達が聲をあげて、「ゆふべの事は」といふのは何の底意かわかりません。それから話が變つて、世之介が、女郎の中でも子細らしい女に、吾々は何者に見えるかといふと、人間に見える、といふ。そいつはもう古い洒落だ、商賣は何に見えるか、といふと、善く見立てますよと斷つて、疊の上で育つ人だ、まさか船乘でもあるまい、といふやうなことでせう。さう云つて夫々こんな商賣を見立てたので、今度は世之介がからかふ。成程、うまく當てた、たゞそこに居る人が組帶屋といふのだけは違つた、といふ。他の二人も驚いたやうな樣子をして見せたので、女郎は愈ゝ圖に乘つて高慢な顏をしてゐる。そこで世之介が云つた。一體人の身分といふものは、どんな著物を著てゐても、腰の物の造りや、手足を見れば大概わかるものだ。殊に自分が供に連れてゐるのは、堀川の勝之丞と云つて、京にも並ぶ者の無い美少の小草履取だ。さういふ者を連れてゐる程だから、

大概わかりさうなものを、輕く見たのは氣が利かないからだ。これでは床へ入つたところで仕方が無い、人形を舞はして遊べ、と云ふので、「たゝみ家體」これは芝居の屋臺が疊むやうになつてゐて、それを組立てると屋臺になるのでせう。「つらかくし」？
○蔦魚副書　テツチは重四のごと、二才といふより双六の言葉を用ゐたのだと聞いて居ります。
○松本　手摺ぢやありませんか。
○山崎　使ひ手の面隱しですか。「首落し」も知りません。いづれ人形の首を落してどうかするものでせうが……。
○三田村　これは私もよくわからないので、大阪の石割松太郎君に問合せました。その返事によると、「ツラカクシは歌舞伎でいふ黑子のやうなもの、鯨骨の入つた黑布の頭巾を人形遣ひが著てゐますが、あの頭巾の前の部分が子供の涎掛の如くだらりと下つて、必要に應じて頭の方へはねて顏を出してゐますので、此鯨骨の入つた黑子の頭巾のことをツラカクシと申してゐます」とある。「首落し」は現在使つてゐないのでわからないさうです。「上幕」は、人形の出入の上手下手の幕は現在では、カミシモとのみ云つてゐるが、この上幕で、床のある方、卽ち上手の出入口の幕のことだらう、といふことです。要するに石割君に聞いても、クビオトシだけは何ともわからない。

○林　併しそんなものはこの時分無いだらう。
○水谷　何しろこれは持つて歩く、簡單なものでせうからね。
○林　一文字に張つてある幕ぢやないですか。「聲曲類纂」なんかに出てゐる、あんなものぢやないか。
○山崎　寧ろその方でせうな。元祿以前の舞臺は、今よりずつと能舞臺式でしたから……。
○三田村　何しろこれはウハ幕とあるから困る。當時かう云つたかどうか、それもわからない。
○水谷　石割君のではうまく行きませんね。
○樂堂追記　「上幕」にウハ幕、カミ幕、アゲ幕、の三通りの訓み樣がある。カミ幕ならば石割氏報のに相當するが、アゲ幕だと能舞臺から來た橋掛口の幕である。原本にウハ幕と振り假名をしてあるに隨へば、林氏說の如く一文字と見るべきであらう。慶長の最初から元祿頃までは、舞臺上部に、後の一文字のやうな幕を懸けた。それも能舞臺から來たものである。たゞ、それをウハ幕と言つたかどうだかが疑問である。
○山中　「首落し」は首を切られた時、幕を落して體を隱すやうなことがありやしないか。
○林　そんなことはありますまい。
○山崎　人形ならわけなく首を引つこ抜きますからね。

好色一代男

山本角太夫正本（信田妻）

○林　やつぱり道具の名でせう。
○山崎　さうですな。外が皆道具の名だから。
○三田村　これはカラクリぢやありませんか。
○水谷　デクノボウだから、さうぢやないでせう。
○山崎　「自由を仕懸け」といふのは、思ふ存分に細工してゐるといふんですか。いや、カラクリを巧みにしてあるのかな。「六段ながらの出來坊」
○木村　六段本さながらの出來坊でせう。それから出來坊に「デ

クルボウ」と振假名がついてゐる。或本に「傀儡師」の字にテクルボウと假名をふつてあるのを見ました。

○山崎　どうもむづかしいですな。「信田妻」は蘆屋道滿でせう。「女房、江戸風」は？

○三田村　その女房が江戸風なりをしてゐるんでせう。

○服部　これは金左衞門や勘六に、はじめて見せたんでせうか。

○山崎　前から取卷の金左や勘六が、此人形に初對面ではをかしいですね。いつかアツと言はせるつもりで、窃かに仕込んで置いたとでもいふのかな。

○水谷　始終見せびらかしたものぢやないですか。さもなければ「江戸風の所體」は「信田妻」には緣が無い。

○山崎　ぢやア、例の人形舞しをやらうと、わざとセリフめかして言つて見たんですかな。田舍女郎へ當て附けに……。

○木村　たゞ一座の興を添へる爲に、こんなことを云つたのでせう。

○服部　一つ連中の知らない、新しい人形を仕込んで來たんぢやないでせうか。

○山崎　「と申す」は世之介がいふんですね、大氣取で……。

○木村　そこであとの二人が、「それは世之介樣……吉原の太夫にいきうつし」といふと世之介は「よくも見つるやつかな、それに似せて作らせ侍る」といつた通人連の受渡しでせう。

○林　「去程に」これも「さるほどにさてもその後」でせう。

○山崎　これから以下は前の宮嶋の女郎に對照して、吉原のこの太夫のことを賞めたのです。或大盡が取卷と三人同じなりで揚屋へ來て、この中で思召の方へ御盃を差せ、と云つた處、その女郎が少しも面喰らはずに、神樣ではないからわかりません、と云つて、勝手の方へ行つてそつと禿に手飼の鶯を放させた。さうして築山の方で、鶯が逃げたといつて騷ぎ立てゝ、三人が座敷を立つて見に出たところを——何しろこゝは立たせさへすればいゝんですから、小鳥としては最も價の高い鶯を放して、さすがの大盡等を驚かせて、三人の立つたのを見た。その樣子を見すまして後、本當の大盡に盃を差し當てた。この始末に皆々感心して、あとでそつと聞いて見ると、三人とも桑染の木綿足袋を穿いて居られたが、中で鼻緒ずれの無い方が一人ある。これは土を蹈まれない方だから、それに違ひ無いと極めて、思ひ差しをしたのです、といふ返事をした。

○服部　話が一轉しましたな。

○松本　桑染は黃色です。

○三田村　この頃信田妻がありますか。
○水谷　あります。延寶頃流行つたので……。
○林　この「當流の男を見しらぬ」といふ「當流」は當世流ですか。
○服部　能の方では如何です？
○山崎　今日では銘々自分の流儀のことを「當流」と云ひますが、昔は觀世流でなければ云へなかつたらしいのです。例へば「當流鉢木」といふ芝居の外題は、觀世流の鉢木を當て込んだものです。
○林　本家でなければいけなかつたんですね。併しそれが古くからのことでせうか。
○山崎　寧ろ元祿以後でせう。
○若樹追記　嘗て故人の岡田紫男君が當流といふのは觀世流に限るといふ説をいはれた時、私は元祿刊本の慥か瀧本流か何かと覺えて居ますが、手習の本に當流何々とあるのを見せたら、大に首をひねつて居られたことがあります。

今爰へ尻が出て物

見ぬ所もあれど、遠國の傾城の、曾而おかしからぬに、こりはてゝ、のぼり日和幸に、難波江のうれしや、水串もちかよりて、三軒屋に著ぬ、むかしは爰も、遊女ありて、淡路にかよふ、鹿のまき筆とうたひしか、それも夢なれや、蘆の上葉に、穉の初風をとづれて、笛太鼓世間はゞかるけしきもなく、天下の町人の思ひ出に、御座舟のうちには、外山千之介、小嶋妻之丞、同梅之介など、取のせてゆく、かしこには、松嶋半彌、坂田小傳次、嶋川香之介、盃入日をあらそひ、波立さはぐも心知よし、向ひの岸には、松本常左衞門、鶴川染之丞、山本勘太郎、岡田吉十郎、竿指のべて、石持釣風情詠也、笹葺の假湯殿、鯛鱸の生舟、晝はらく書して、ゆく水に扇流し、夜は花火のうつり、おのづと天も醉り、いやまた、此舟遊び京の山にはまさりしを、內裏樣にも見たし、衞士の燒火は薄鍋に、燃て、ざつと、水雜水をと、このみしは、下戸の

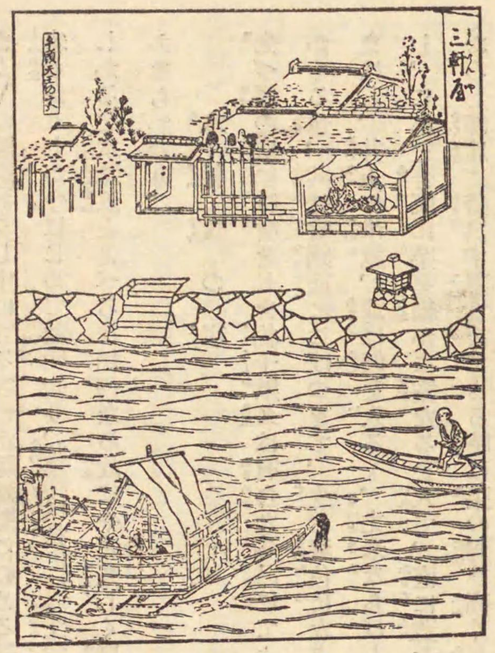
しらぬ事成べし、ひとつなる口なれば、大坂に逗留の中に、一日は野郎もよしや、けふのうらやましさはといふ、聲を聞て、世之介ではなひか、誰じや、小倉にかはひがるゝ男と申、してなんと、其後は上へものぼらぬか、まづ咄す事もある、此舟へといふ、何角なしに、乘うつりて、皆こゝろやすきつき合、見しつた紋付の小盃にて、てんがう飲、とやかくいふうちに、四ツ橋につけてあがれといふ、又惡所へか、颯と見て歸らう、是吉野、夜の花じやと、東口より入て、九軒の吉田屋に行は、臺所に年がまへなる男が、白き絹縮に、紅裏付て、廣袖著て、女房共を、横平によびける、おなるに何者かときけば、これの阿爺さまといふ、此二三年も來て、亭主見しらぬも新しい、それは何事も、おなるの利發で、埒があく、まづ今夜の埒は、なんでも目と鼻さへ有女郎ならば、堪忍すると、あまりもの有ほど呼にやる、世之介終に申さぬ望、さる天神を、此前から樣子ありと、それを名ざして取よする、大二階にあがれば、南の空より、影のさし入、月もむかし爰に、加賀の三郎などが逢し、太夫市橋が定宿、

金の間も湊紙の腰張に替りぬ、其時見しは、四尺の長机に、書院硯筆掛香箱、さま〳〵の唐物道具置捨てかへれども、誰がひとつ、手にとらずあるに、今は木枕もたらず、煙草あけてゆくやら、吸殼が見えぬ事、よもや禿はとらぬ筈と、おもしろからぬ咄しする內に、城春が三味線の奉加帳、心得た、小判の次手に、なんでも無心は御座らぬかと、惡口いふて、女郎衆はまだか、顏見て立ながら、さゝ過してみえける、其內に、床をとる、めづらしう寢もせうかと、帶もとかずに鼾かきて、思はしからぬ夢みる時、御立と庭から呼立る、罷歸と起出る、女郎は醉が醒ぬと、其まゝありて、暇乞もせず、世之介目覺しに、吸殼はなさず、つゞけさまに七八ふく、灯にて呑侍る、女郎夜著の下より、尻をつき出すを、不思議に思へば、其あたり響ほどの香ひ、ふたつまてこく所を、火皿にて押えける、覺ありてこきぬる、こゝろ入のさもしさ、思ずしらずは釋迦も、こきたまふべし

○木村　まだ見ないところもあるんだが、遠いところの遊女は、まことに面白くないのに懲りて、幸ひ大阪へ上る船があつたので、それに便乘して三軒屋へ著いた。三軒屋は木津川尻にある所で、番屋があつて、大阪へ出入する船を監視してゐたやうです。「蘆分船」などを見ると、安治川口より木津川口の方が出入が多かつたやうに書いてあります。昔はこゝにも遊女屋があつて、「淡路にかよふ鹿のまき筆」とうたつたが、今はそのあとかたもなく、蘆に秋風がおとづれてゐる、茫漠たる川口に大阪の町人は船遊びをしてゐる。その船にはこゝに書いてあるやうな、いろ〳〵な人が乘つてゐる。これは皆野郎でせう。「天下の町人」と大きく出たのが、西鶴らしいところだと思ひます。さういふ船で酒盛をして、秋の日の短いのに、心持よさゝうに遊んでゐる。向うにはかういふ連中が沙魚を釣つて遊んでゐる。晝のうちは扇に落書して川に流し、夜は花火などをあげて遊んでゐる。天もさういふ酒宴の爲に醉つてゐるんぢやないかと思はれる。この船遊は都の山遊よりも面白いこと〻内裏にまします高貴な方々にもお見せ申たい。その内裏樣から出て、衞士の焚く火を持つて來て、それを小者が鍋をしかけて、水雜炊を作つてくれる火にした。さういふ樂みは下戸の知らぬことである。――「淡路にかよふ鹿のまき筆」は何かありますか。

○鳶魚副書　本朝二十不孝に「鹿の卷筆の小歌唄へば」とあります。

○柴田　そのあとの「夢なれや蘆の上葉に秋の風をとづれて」といふのは西行の歌を蹈へてゐるんでせう。「津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり」といふ歌があります。



三軒屋の圖　（蘆分船所載）

○山崎　「水雜炊」は野菜類を細かく切揃へて、水炊きに米と炊込む。味噌の入らぬおじやみたいなもの――まあ一種の菜粥ですね。それが水澤山なのです。

○木村　忠臣藏の茶屋場にも、九太夫に鴨川の水雜炊を喰はせいといふ所があります。

○山崎　酒を飲み過ぎた後なんかには、一寸乙なものです。

○木村　三馬の日記にこんな事が書いてあります。

「式亭雜記」文化七年四月五日の條に「此夜むさしや伊三郎來る、……今宵酒宴の上にて、さま〳〵の談說ありし中にさる客の水雜炊をこのめる話殊に奇譚なり、三馬これまで水雜炊の名目不審多かりしが今はじめて發明せり、其謂は世に所謂水雜炊は水澤山なる菜粥のやうになるものなり、しかるを水雜炊とよべるは如何なる故にやと久しく疑はしかりしが、此說にて雜炊の名おのづからあきらかなり。

水雜炊の事

先づ鍋の底に味噌をしき杓子歟又は有合たる品にてよくねり交て底に押つけ置、さて鼓鍋にて火にかくる也、其味噌鍋底にこげつきて、少し狐色になりかゝりたる時、水をよき程に加へてよくかきまはし、其上に米歟、或は飯を入るゝ、尤米ならばしばらく煮立程を可考、飯ならば直に煮立つべし、これを合圖に菜を細かに刻たるを入て、直に蓋を覆ひ、偖少しむれたる歟とおぼしき比、鍋をおろし卽席に盛出す事とぞ、さる時は菜の匂ひ高く目味噌汁の香もあり、汁も濁らねど、味へば味噌の加減ありて、ひとしほ鹽梅よき物なるよし、是則眞の水雜炊といふもの也と云々、これを思へは、世にいふ水雜炊は湯澤山の菜粥にて雜炊の名むなし」とあつて馬鹿に感心してゐます。併し西

鶴の此本の場合は簡便な方法の水雜炊でせう。

○樂堂追記　木村氏の附記せられたる三馬の日記中の水雜炊は旨さうなれど、大分技巧多くして、稍降りたる頃の考案と思はる。病人などには味噌入の雜炊最も可なれども、酒後の腹直しには、味噌氣無き、鹽味一つの淡泊なるを至妙とすべきは、小生二十餘年來の實經驗を以て證することを得。單に「雜炊」といへば味噌入の、所謂おじやをも含めど、特に「水雜炊」と稱するは、必ず味噌氣無き雜炊なり。卽ち「水」は淡泊をも意味す。三馬がこの微妙なる消息を解せざるは、聊か一九の「味噌べつたり燒薑荷」てふそしりを脫れざるべし。

元祿十二年版「西鶴名殘之友」（卷四の第五）に――畫船の下りを伏見迄おくり酒にてもてなし、さらば〳〵と船に乘らるゝ時、京にて別して親しき方よりの使、取急ぎて杉重ひとつ進上申して歸りぬ。此蓋に珍しき書付あり、此杉重、牧方の少し下にて御開きくださるべしと記せり。其通りにして行くに、次第に酒の醉出で、最早取りたまへ、ならぬ〳〵といふ。……程なう牧方が見ゆるといふ時、醉覺に成て、最前、菓子の杉重を出せとて開き見しに、一重には香の物、燒鹽、又一重には洗ひ食に、若菜細かにして組合せける。扨も心を付たりと、鍋に川水を汲込み、燒鹽を加減して、水雜炊を焚立て、各醉を醒して正氣になりぬ。さるほどに、牧方あたりにて水雜炊のよい程を

考へて、此色々を送りけるは、中々下戸のなるべき事にはあらず。云々。――この燒鹽一ト味の水雜炊が生粹のものと思はる。

○三田村　僧堂で食ふ粥は、御佛餉の飯とお茶で炊くんですが、あれのもう少し緣の遠いやうなものだらう。

○山崎　水雜炊の祕傳は水からの炊方に在るのです。飯がぐちやぐちやになつちやいけない。水澤山であり乍らサラツと炊き上げるのが第一、そこが粥と違ふ。又茶を入れゝば米が締まるからサラツと炊けるが、茶を入れずに遣ると米がふやけ易い。それをふやけさせない處にコツがあるのです。

○林　花火から「天も醉り」を出して來た。

○三田村　宗因の句があるね。「天も醉りげにや伊丹の大燈籠」

○山崎　「天も花に醉へり」といふ文句は謠の中によく出て來ます。何か典故がありませう。

○樂堂追記　朗詠集に「春之暮月、月之三朝、天醉三于花」とあり。

○木村　「御座船」とありますな。

○三田村　向うぢや御座船とか、船御座とかよく云ひます。

○仙秀追記　「西鶴俗つれ〴〵」卷二、「作り七賢は竹の一よに亂れ」の條に「……川船に紫の帽子懸

けたる野郎あまた乘りて、大和屋座の囃子ども大方二階に上り、四挺三味線を彈きかけ、一のやの十郎兵衞節を聲揃へて謠ひ、京歸りの辻といふ大盡を、通夜佐太宮まで送るなどいひて、萬は南江の座敷屋、砂の加兵衞承り、臺所船に四五十人前の膳組、髭籠もりの刺身一つで出すと見えて、才覺らしき男が箸をうつて廻る、又少し後より小御座に幕を下して人を忍び顏に、女中の聲のみして、十二三の少女、頭は常の嶋田に取上しが、……世間に幅廣の帶のはやる折節中幅の前結は憎し、彌七、庄左衞門、都の末社交りに、太夫殿より禿遣手を見送りける、西南の二色遊び、榮花是より上のあるべしや……」當時船遊びの盛んなりしを見るべし。且つ挿畫にも二階のある船や屋根船、臺所船などを畫きたり、又小御座は有朋堂文庫の頭註に「小形なる御座船」とある。

○山中　字は同じでも意味が違ふんだね。莫蓙が敷いてある。

○山崎　大阪町人の僭上だ。「盃入日をあらそひ」とあるのは、無論朱盃で、且つ大盃でせう。

○木村　この連中に世之介も加つて居つたと見えまして、好な同士だから……。

○山崎　加つては居ないでせう。傍觀ぢやありませんか。

○木村　成程、船で通つたんですか。今のは間違ひました。西國から歸つて來るので、こゝで出くはして、獨り言をいふのを聞いて、小倉は何處かの太夫でせう。

○山崎　世之介の獨り言を聞き咎めて、向うの船から「世之介ではないか」と聲を掛けられたので、「誰ぢや」は世之介が云つたのでせう。すると先方は「小倉に可愛がられる男さ」と答へた。それでわかつたのです。

○木村　世之介が「してなんと」といふ。「其後は上へものぼらぬか……」これは御座船の方の人がいふのです。それから世之介が乘移ると、顏を見知つた、心易い人である。酒を飲む小盃にも見知つた紋がついてゐる。「てんがう」は澤山ですか。

○服部　山崎　笑談です。

○水谷　ふざけ飲みですな。

○鳶魚副書　御所櫻堀川夜討に「ほてゝんがうなことをして」と辨慶が云ひます、俚言集覽では「京にて小兒のいたづらを云」和訓栞では、顚狂の訛音也、或は取笑を譯せりと云ふは非也、でんがく（田樂）を波行四段に働かせたのであらうと云つてあります。さうすると北條高時の天狗舞もテンガウ舞ではありますまいか。

○木村　御座船の連中も世之介と一緒に歸る。そしてとやかうしてゐるうちに、四ツ橋についた、マアあがれと誰かゞいふと、「又惡所へか」といふのは何方ですか。

○山崎　これは世之介の言です。

○水谷　「颯と」とありますな。

○山崎　まさか「さゝんざ」でもありますまい。

○木村　ちよつと見て歸らう、といふんでせう。「是吉野」

○三田村　世之介が大に亭主がつて吉野に云つたんぢやないですか。甚だお安くないところで……。

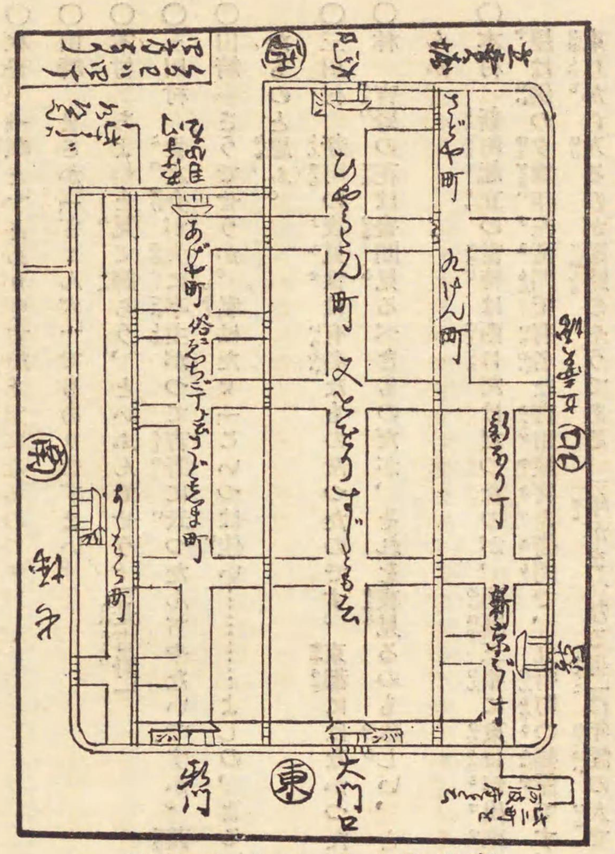
○山崎　さうでせうか。私はたゞ「こいつは佳い……よしの、よる」といふ言葉の調子だけで來たものと思ふ。

○三田村　新町の夜見世は有名なものだつたのです。京都にはなかつたので……。

○林　吉野の花は晝間見るべきものだが、それを夜見るのも珍しい、といふやうなことぢやありませんか。

○木村　新町起立の當時は西口だけだつたのが、明暦三年に東口が出來たといふことです。この吉田屋は例の夕霧伊左衞門で有名な吉田屋喜左衞門で、九軒町の揚屋です。なほ四ツ橋から上陸すると東口から入るのが順路のやうである。「年がまへなる男」は年配の人でせう。變な著物を著てゐる。それが横柄に人を呼んでゐるのですが、「おなる」といふのは何でせうか。

○水谷　林　女房の名ぢやありませんか。



新町廓之圖（みをつくし所載）

○木村　あれは誰だと聞くと「これの阿爺さま」といふ返事である。二三年も來てゐて、亭主を知らないのも新しいこれは珍しいといふことでせう。何事もおなるの取り廻しで埒が明く。今夜は片輪の女でなければ我慢すると云つて、賣殘りの女郎を「あるほど」は全部でせう。それを呼びに遣つた。

○服部　「おなる」は女房とも仲居ともきめてしまはない方がいゝかも知れませんな。私は「これの阿爺さま」といふのが、どうも氣になるのです。

○山中　そのお説がいゝやうですな。

○林　四ツ橋へ上陸したのは、彼處は小船が著くのです。

○山崎　市中に住む人には寔に便利な上り場です。

○三田村　一錢蒸汽のつくやうなところだ。

○服部　東京の靈岸嶋みたいなところでせう。

○木村　世之介はこれまでにいつたことの無い望で、或天神を呼んだ。「取よする」といふ言葉は前にもありました。昔こゝで加賀の三郎といふ人が市橋といふ太夫に逢つたことがあるが、その時の立派な金の間――これは唐紙か何かの張付から云つたのでせうか――も、湊紙の腰張に變つてゐる。湊紙は前にも出ました。その時分は全盛で、いろ〳〵こゝに擧げたやうな立派な道具もあつた。今は粗末な木枕さへも不足勝で、煙草盆にも煙草が無い。煙管が見えないが、まさか禿が取つたんでもなからう、といふやうな面白くない話――これは世之介が獨りブツ〳〵いつてるのでせう。そこへ城春といふ座頭が三味線の張替か何かで、奉加の帳面を持つて來る。よし心得た、金の外に何で

も欲しいものがあつたら言へと揶揄した。

○林　張替ぢやない、三味線そのものでせう。

○木村　世之介はやゝ中ツ腹になつて、女郎衆はまだか、顔を見て立ちながら歸してしまふことか、と云つてゐるところへ、その相方の天神が來た。何處で飲んだのか、少し醉つてゐる。帶も解かずに寢てすぐに鼾をかいてしまふ。まことにつまらない。そこへ庭から駕籠舁が呼びに來る。已に命じてあるから迎へに來たんでせう。世之介は起出したが、女郎は醉が醒めないと云つて、暇乞もせずに寢てゐる。歸りしなに七八服、行燈の火で目覺しの煙草を續け樣に呑んでゐると、夜著の下から女郎が尻を出して、あたりに響くほどのおならを二つまでした。これを取つて今爰に「尻が出物」といふ標題にしたのです。世之介はあまり無作法なのが憎らしいので、持つてゐた煙管の火皿で押へ付けてやつた。知つてゐてさういふことをする心持がいかにも情無い。出ものはれもの所きらはずで思ひがけずにならば、お釋迦樣でもたれることがあるだらう、といふのでせう。

○三田村　庭から駕籠舁が來る。「罷歸る」といつたのは、世之介ぢやない、外の人でせう。その「罷歸る」と云つた人が煙草を呑んだんぢやないか。

○水谷　林　服部　山崎　さうぢやない、世之介ですよ。世之介が起出て、目覺しに煙草を呑んだのです。

○三田村　さうすると「罷歸る」は世之介ですか。

○服部　さうでせう。たゞこの庭はちよつと說明を加へていたゞかないといけない。

○山崎　東京で云へば土間ですな。

○水谷　通り庭ですね。

○山崎　それに揚屋では土間が廣いから、駕籠が樂に入つた。嶋原すみやの庭なんか隨分廣いもので夫々呼ばれた太夫の長持（寢具入）が澤山置き据ゑられてゐる。現時でもさうだが、そこへチリンチリンと電話が鳴つて來るにはお座がさめる。

○林　「こく」といふのは「膝栗毛」にもありましたが、「和名抄」を見ると、古くは口からでも「こく」といつたやうです。「和名抄」の「霍亂」のところに「之利與理久智與理古久夜萬比」と書いてある。胴卷の金をこくやうな意味で、この形容はうまいと思ふ。

○三田村　この屁はうまい。少しかういふやうな屁を集めて見ましたが、巧みを弄したやうなものが多くつて、あまり面白くない。たゞ「傾城爺群談」に「女郎はふさんかいへもひゞくやうなるおならをこき紅ゐの脚布をやぶり……」とある、これなどは隨分凄じいものだと思ひます。

○服部　「一代男」にもこの先に太夫の屁がありますな。

○山崎　世之介ともあらう者が、何でこのやうなぶしつけな女を特に望んだのでせうか。

○三田村　ものにならない氣だから、女郎の方でもこんなことをしたんでせう。

○林　吉田屋がさびれて、女郎もこんなものだといふことを現したんぢやないか。

○服部　これから逆説すると、前の「さのみ大阪にかはらず」もあまり結構なことでなくなるかも知れません。

○山崎　「書院硯」は？

○林　書院で使ふ蒔繪の硯箱に硯其他の道具の入つたものでせう。――煙草入に煙草が無くなつても入れて行かない。あるべき煙草すら無い、といふので、さびれたのを云つてゐる、

○三田村　城春ぱ實在の人です。

○林　金の間は壁のとこうが金張になつてゐるんでせう。

○部部　さうでせう。緞子の間といつても、全服緞子ではありませんから……。

○三田村　具にいへは金張付の間だ。

昭和三年二月二十日印刷
昭和三年二月二十五日發行

【輪講好色一代男卷五】
（定價金七拾錢）

著作者　東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地　三田村玄龍

發行者　東京市京橋區木挽町三丁目十二番地　和田利彦

印刷者　東京市京橋區木挽町三丁目十二番地　川村清次郎

印刷所　東京市京橋區木挽町三丁目十二番地　川安印刷所

發行所　東京市京橋區南傳馬町二ノ六
（電話京橋五二二番）
（振替口座東京一六一七番）
春陽堂

曠齋歡

三田村鳶魚編

西鶴輪講

好色一代男 巻の六

東京 春陽堂版

三田村鳶魚氏著作集

歴史は国民生活を中心として記述されるべき筈だが、然らば国民は史料を資として書き新たに書替へる必要のあるものが、近来著名の物語を列挙して白面書生の思ひ上がりを戒めるのと、史料の蒐集に心を注いでほしい。

鳶魚隨筆　定價金貳圓七拾錢　送料拾九錢

鳶魚劇談　定價金貳圓八拾錢　送料拾八錢

江戸の思ひで　芝と上野淺草　定價金參圓　送料拾八錢

江戸の噂　定價金貳圓九拾錢　送料拾八錢

瓦版のはやり唄　定價金貳圓五拾錢　送料拾八錢

江戸年中行事　定價金參圓六拾錢　送料拾八錢

三田村鳶魚編　輪講道中膝栗毛　定價　上編金參圓五拾錢　中編金參圓貳拾錢　下編近刊

彗星の例集では江戸時代文學の標本を一順したい希望で、知友先輩と發企したのであるから、特に其の中の一個を全部に渉つて眺められぬ、然るに一席の方々のお物數寄は、遂に別集が開かれるやうになつた、此の別集は西鶴の一代男、一代女、胸算用（或は永代藏）を逐次に其の全部を例の輪講に掛ける筈なのだ、孰れにも一席各位の啓發によつて知らないことを減じる喜びを以て、又してもお供をいたした、特に一席の知友先輩が妙な自尊心や己惚らしい氣分を棄てゝ、問るゝだけは問ひ、答へるだけは答へ、遠慮なく否定し、快く同意し、時に或は泥仕合のやうな樣にもなる、只だ何を差置いても些少でも明るくしたいと勇まれる態度は、實に敬服に堪えない、

赤裸々である、一席の各位は又た當席の講錄を發表して、更に大方の諸君子と研究することを望まれる、我等は講錄編輯方の役目として、大方の寄示を待ち、問對添刪に勉めたい、其の爲めに月刊彗星に一欄を設けた、

また別集の進捗は六月二十六日に一代男第一卷、七月二十日に同第二卷、八月二十

五日第三卷を講じた、猶この別集は引續き月次に開催する豫定であるから、講錄も整理されたゞけづゝ、毎月此の體裁にして出刊する心得である。

昭和二年九月

承り人　鳶魚

西鶴輪講

好色一代男　卷六

笹川臨風、山崎樂堂、三田村鳶魚、
服部普白、木村仙秀、松本龜松、
柴田宵曲、

好色一代男　卷六目録

卅六歳　喰さして袖のたちばな
卅七歳　しまばらむかし三笠が事
卅八歳　身は火にくばるとも
卅九歳　新町夕ぎりが情の事
四十歳　心中箱
四十一歳　しまばらふぢなみ執心の事
四十二歳　寢覺の菜ごのみ
御舟がまねのならぬ事
なかめは初すがた
嶋原初音正月羽織の事
匂ひはかづけ物
江戸吉原よし田が利發の事
ぜんせい歌書羽織
野秋兩夫に目見ゆる事

喰さして袖の橘

情あつて、大氣に生れつき、風俗太夫職にそなはつて、衣裳よくきこなし、道中たいていに替り、すこしすしに見えて、幅のなき男は、おそれてあふ事希也、取入てはよき事、おほき人にして、座配にきやかに、床しめやかに、名譽、おもひを殘させ、別るゝよりはや、重てあふ迄の日を、いづれの敵にも、待兼させ、召連の者、駕籠までも、嵐ふく夜は、わざとならぬ、首尾に仕懸て、さし捨の盃、御こゝろさしは、是てもつた、太鼓女郎にも大形成わけは見ゆるし、宿の男などとの事は、末に名の立を、ひそかにしめし、やり手がよく計の、算用もきかず、いやしき物は手にもたず、禿が眠るをもしからず、夜更過る迄、用の事ありて、あのはずと、萬よしなに申なしては、よろこばせ、太夫様の事ならばと、常〳〵思はせて置、黠しき子細ありける、世之介は其年より宿も定めず、權左衛門方にて、みかさにあいそめ、何事も命ぎりと申あはせて、初の程はおもしろく、中程はおかしく、後は氣毒かさなり、宿よりは前廉の書

出し、親方よりはせかるゝ、死なふならば、今なれども、太夫がおもはくを見捨兼、自由にあはれぬ人目をしのひ、今すこしさきに、爰を通つたあとぞと、其道すぢを、行ては歸り、もしもかゝるくら闇に、鬼の落した、小判もがな、加賀殿の、お言葉ひとつて、濟事じやにと、おもふて甲斐なき、欲先だつて、まぼろしにも、面影をみる事千度也、又いつもの時分とて、太夫しのび出て、今宵は中立賣の、竹屋の七様の一座に、紀州の人、きちじよに、はじめて出合、おもはしからず、ささまの事をあらため、是非にみきれとはつらし、是が見かぎらるゝ物かと、左の袖口より、手をさし入、脇腹をいたくは、つめらず、泪まじりのそら、五月雨の比忘れては、盛かと見し、蜜柑ひとつ、我口添し跡ながら、手から手に渡して、かた様は覺てか、過にし穐、自が黒髪を、ぬかせられ、猿などして遊ひし夜は、誰しのぶともなくさはぎて、あんま取の休齋が、二階より落てと、はや口にかたるうちに、太夫様はと、聲〳〵に尋けるこそ、身に答て悲しく、あすの夜は、人貞の見ゆるうちも、くるしからずと、なき別し

に、門をしめるとよばはる、或は主持、さはりある人、かへるにまぎれて、出口のあんどんうるさく、横貞して走出、むかしはと口惜く、ぼんと町の、小宿にかへりぬ、かくれなき沙汰して、太夫折檻すれとも、止ず、むごうあたれども、なほ聞ず、せんかたなく、庭におろして木綿の、ときあけ物をさせて、味曾こしを持せ、豆腐より出し、こまかなる物を、買につかはしけるに、是をも恥ず、おもふ人故なればと、其年の雪見月、はしめてふり積る、にくさもつもりて、丸裸になして、廣庭の柳に、くゝり付て、重而あひ見る事是でも、やめぬかと、責而も、あふましきとはいはず、死ぬるをきはめ、五七日もしよくじをたつて、或日泪をこぼすを、妹女郎か、見る目も情なしと申せば、我身の成行を思ひし、泪にはあらず、是程におもふとは、よもや敵様は、しらずやと申せし所へ、匂ひ油賣の、太右衛門是を歎きぬ、此ものは世之介方へも、年比出入をおもひ合、此繩をときて給はれ、我身あしきを覺侍ると、繩をとかして、白綸子の二布引さき、右の小指を喰きり、心のまゝ書つゝけて、賴むと太右衛門に渡

して、もとのことく成て、けふをかぎりに、舌かみきる所へ、世之介是を聞もあへず、死出立にて、かけこみしを、おの〳〵懸合、義理をつめ、至極にあつかひ、其後太夫を手に入侍る、かゝる心底、又あるまじ、大坂屋のやつこみかさと、名をのこしぬ

○服部　「喰さして袖の橘」は例の故事を持つて來てゐるんでせう。中の蜜柑の話に關係がある。このはじめは「みかさ」の批評とでも云ひませうか。情深くつて大様で、なりふりも太夫職といふ遊女の最も高位なものに備つてゐるやうに立派で、著こなしもよく、道中する有様も並の太夫とは違つて、「すこしすしに見えて」といふのはわかりません。自分にこたへのない男は、思ひもよらぬことゝ、自分の方から引退る位である。つきあつて見ればいゝ事だらけの人で、座敷の工合もはでやかにとりなしが、上手で、床はしめやかで、逢つた人に末々までも嬉しさを思はせるやうにしこなしてゐる。別れると直ぐ又逢ふ日を待かねるやうにさせる。それのみならず、召連れてゐる駕籠舁だの何だのといふものでも、嵐の吹くやうな夜は酒を飲ませてやる、といふ意味でせう。取遣りで

好色一代男

はない。從つて小者までも心服してゐる。身近の太鼓女郎なども大抵のことは、やかましい掟があるながら見許してやる。宿の男などとの關係があつたりする、それも末には名が立つて、身の爲になるまい、といふやうなことを示して思ひ止らせる。そんな意味でせう。さればとて遣手が思ふやうに慾張つて、取込みにかゝるやうなことはさせず、勘定も聞かなければ、金などには手も觸れない。禿が居睡をしても、夜更まで用をしてゐ

人倫訓蒙圖彙所載

るんだから仕方が無い、といふ風に言譯をしてやる。その爲心服して、太夫の爲ならば、と不斷から思はせて置く、「點しき」は惡い意味でなく、なか〳〵利口だといふんでせう。世之介は四十二歳の頃から、別に何處ともなく、家を持つてゐたかゐないか、といふやうな始末で、――この「宿」は多分自分の家のことだらうと思ひます。權左衞門のところへ行つて、このみかさに逢つて、生涯契らうといふ申合をして、初のうちは面白がつてゐたが、だん〳〵手詰つて來て、苦しいことが身にこたへて來る。そのうち「宿」――この宿は權左衞門方ではなからうかと思ひます――からは前からの勘定書が來る。みかさは親方から、世之介に逢ふな、と云つて堰かれる。心中すれば、ぢやない、自分が死ねば今だが、太夫の思はくが考へられて、忍ぶ戀路に身を苦しめてゐる。今少しさきにみかさが通つたといふあとを、付つたり來たりして、上ることも出來ない。さりとて歸るのも惜しい。詰つた金に慾が出て、鬼でも構はない、落した小判でもあれば拾ひたいものだ。御大身の加賀樣なら、一言何とか仰やれば、山程の小判も出て來るだらうと思つたり、夢幻の間にも、みかさの面影を思ひ浮べる、といつたやうなことでせう。「すし」を一つお伺ひ致します。

○三田村　これは「色道大鑑」にあります。なれ〳〵しいことで、鮨から來た洒落でせうね。若いうちから前帶にするのはすしに見える、などといふ。

○木村　これは世之介が「其年より宿も定めず」といふのは自分の家へ歸らないんでせうか。
○三田村　揚屋でせう。箒氣味で方々歩いてゐるから……。「是でもつた」これは後でも「それでもつたもんだ」といふやうなことを云ふが、それとも違ふでせう。
○山崎　私は、それと別に違はないと思ひますがね。
○三田村　「鬼の落した小判」は何かありませんか。
○山崎　ありさうですな。加賀様も何か利いてゐるんでせう。
○木村　例へば板倉伊賀守のやうな名奉行があつてですね、誰か大金を拾つたものがある。落し主が知れないといふところから、それは多分鬼の落した小判だらう、と云つて拾つた人にくれた、といふやうな話でもあるんぢやありませんか。
○山崎　どうもそんなことがありさうなものです。
○三田村　何か言葉があつて持つて來たか。この時分に梅鉢小判といふものがあるから、それを闇で引かけて來たのかも知れないと思ふ。「加賀殿」も前田様らしいが、どうもむづかしい。
○木村　今でも關西では「書出し」と云ひますか。
○山崎　えゝ、今に書出しです。

○服部　箱を出して置いて、書出し入れと云つてゐます。
○三田村　この宿は揚屋でせうね。
○木村　どの宿も揚屋ですか。
○三田村　上方ぢやよく「宿坊」と云つて、遊びに行くところをきめて置くやうです。
○服部　「宿の男などとの事」といつても、置屋の方にゐるのは、荷物を擔ぐ男位なものですから、この宿も揚屋でせう。
○木村　揚屋の男と置屋の女との情事ですかな。
○三田村　古いことはどうか知りませんが、上方では揚屋のヤカタと云ひますね。
○山崎　古くはないでせうが、今でも京阪、伏見あたりでは云ひます。が、紀州では云ひません。京阪では藝者の置屋でもやはりヤカタと云つてます。
○服部　大阪へ行くと、藝者の合宿所みたいなところまで、ヤカタですね。
○山崎　さうです。今でも京都では、ああいふ家にもやはり電話があるのでせうが、それを使はないで、揚屋なり茶屋なりから置屋へおチョボ（少女婢）の使を出す。さうして返事を齎して來る。これがなか〳〵暇取るのです。その上、本人はそれからゆつくり湯に入り、念入りに化粧してやつて

來るのですから大變です。先づ三時間位はかかりますな。

○服部　彼地では招集を返事と云ひますね。それから今でも、「あひ狀」といふものがある。中には石版刷で刷つたものまであります。……次は又いつも世之介さんが來る時分だと云ふので、みかさがそつと忍び出て、置屋、屋形の方から出て、今夜は中立賣の竹屋の七樣のお連れで、紀州の「きちじよ」――これは名前でせうか、きちじよといふのは珍しい。それに初の見參で、面白くない。あなたのことを咎め立てをして、是非にきれろと云はれたのはつらい。が、どうしてきられるものではない。「左の袖口より手をさし入、脇腹をいたくはつめらず」これは情の深いことなんでせう。この時分の技巧で、こゝは少し濕つぽいから、こんなことを持出したのかも知れません。「五月雨の比忘れては盛かと見し蜜柑ひとつ」で、時節をはつきりわからせてゐる。五月雨の頃の蜜柑ですから、大變貴い。今なら寒中に溫室のメロンを食ふやうなもので、それよりももつと貴いでせう。それを一房二房食べたのではあるが、手から手へ渡して、お前樣はおぼえておいでか、私の黑髮を拔いて、猿事などをして遊んだ晩は、誰に憚ることもなく騷いで、按摩取の休齋が二階から落ちて……といふやうなことを、早口にしやべつてゐるうちに、太夫樣はと言つて聲々に探して來るのが耳に入つたので、今晩はこれでお別れします、明日は日が暮れないうちでも構ひませんから、と云つて泣別れをする。門をしめるといふことを、聲をあげて知らせたものと見えます。門をしめられると困るので、どや〳〵紛れて歸る。誰かに見咎められるのが厭さに、顏をそむけて駈け出した。今の零落に引きかへ、昔はこれでもと思ひながら、先斗町の小宿へ歸つて來た。どうもはつきりしませんが、これは揚屋から拔け出たものと思ひます。嶋原の門は九つに締めました か。

○三田村　わかりません。

○服部　江戸では拍子木を打つんですな。

○三田村　「猿などして」といふのがよくわからない。

○服部　私もわからないので、假に猿事と申しましたが、髮を拔いてそれに紙ででも猿を拵へてつけるのか、或は毛を三本拔いたといふところから

人倫訓蒙圖彙所載

好色一代男

猿と云つたのか、とにかく何かあるんでせう。

○山崎　鯛弓のやうに、小弓へ良い髪の毛で弦を張つて、それへク、リ猿を辷らせるんでせう。どちらも女の髪を最上としますが、良い髪の毛が無ければ馬の尾で作る。「天竺日歸り」といふ玩具がありますね。あれは猿を竹で彈き上げて、竹の竿を辷らせる仕懸になつてゐますが、あれに似て弦が髪の毛なのです。猿がその髪の毛を辷るのですから、ぶる〳〵動いて靜かに少しづつ傳ひ下りる。鯛弓に對して、これは「猿弓」とでも云ふべきものでせう。併し、その弦に張るのは、よほど良い髪の毛でないといけないので、こゝでは太夫の髪の良いことと、さなきだに大切にする女の髪を世之介に拔かせた、以前の遊興の樣とを巧に現してゐる。束の間の話にも、かういふ過去を語らせるのは、寫生的で頗るうまいですね。蜜柑の件も中々うまいが……。

○服部　昔の榮華を書いてゐるので、今の零落がはつきりして來る。高價な蜜柑と云へば、古い笑話しに、百兩で十房の蜜柑を買つて、三房食つて、あとの七十兩で駈落した、といふ話がありますな。

○山崎　「きちじよ」は調べたらわかると思ひます。「きち」は無論名前の頭字でせうが、「じよ」は何から出たか。紀州の田舍では朋輩同士の呼名によく「何じよ」といふ、但し低い階級の間だけです。或は「丈」から來たものかとも考へられるが……。

○服部　江戸の方でよく、「何しう」といふ言葉を遣ふ。あんなものぢやありませんか。

○山崎　その位な意味でせう。たゞ、太夫がお客のことをいふのに遣ふかどうか。私の知つてゐる「じよ」は二人稱の場合で、三人稱は如何かと思ふのです。けれども差當り外に解釋も無い。

○木村　一座の人が皆「きちじよ〳〵」と云ふから、それを太夫が眞似て云つたんぢやありませんか。

○山崎　太夫もそれが通名だと思つてゐたかも知れませんね。

○服部　さういふことは今でもよくあります。――この評判が高くなればなるほど、置屋の方では困るので、みかさを折檻するが、一向世之介と切れない。いろ〳〵むごく當つて見ても聞かない。「庭におろして」といふのは、太夫の格を落して女中扱にする、といふ風にも取れます。今までお蠶づくめのものに、解き捨てゝほどかんばかりにしたものを著せて、味噌漉を持たせて雪花菜を買ひに遣る。が、これも誰故と云ふので平氣でゐる。雪見月といふ月がありますか。極寒の初雪が降る時分で、雪が積れば憎さも積るで、丸裸にして廣庭の柳に――前の「庭」は例の座敷庭ですが、これは庭園の方です――縛りつけて責めても、世之介に逢はないとは云はない。必死の覺悟で、五七日も食事も取らず、强情を張り通してゐる。そのうちにほろ〳〵涙をこぼしてゐるのを妹女郎が見つけて歎くと、自分がこんな風にまでなつたのを歎いての涙ではなく、世之介樣は、私がこれほどに

思ふのを、御存じあるまいと思ふからの涙である、と云つた。ところへ香油賣の太右衛門が來て、これを悲しがつたので、この男が長年世之介のところへも出入してゐるのを思ひついで、繩を解いてくれ。「我身あしきを覺侍る」は、氣分が惡いとも取れるし、自分が惡かつたとも取れる。さう云つて繩を解かして、白綸子の二布を裂いて、それに血書をして世之介へ屆けてくれと賴んだ。さうして又もとの如く縛られて、今はこれまでと云ふので、舌を嚙み切らうといふところへ、世之介が文を受取つて、死裝束をして駈け込んで來た。それから皆々が出て來て、すつたもんだの結果、まあ〳〵といふことになつたのでせう。「至極」は惡くない取扱で、太夫は世之介の手に入るやうになつた。これほどの心底の太夫は、二人となからうといふので、大阪屋の「やつこみかさ」――「やつこ」といふのは、男のやうな氣性のことでせう。これで置屋の名前が大阪屋であることが、はじめてはつきりわかるわけです。

○宵曲附記　「雪見月」は霜月の異名のよし。「藏玉集」に「くもりつる空のしるしに雪見月けさこそ冬のしるし有けれ」とあり。

○山崎　「ときあげ物」は縫直し物です。

○服部　私は裏を解き放したものかと思つたのですが、成程御說の方がよろしいでせう。

○三田村　「我身あしきを覺侍る」

○笹川　山崎　自分が惡かつたと云つて繩を解かしたんでせう。

○服部　體の工合が惡い、といふ風にも取れませんか。

○笹川　やつぱり後悔でせうね。

○三田村　「至極にあつかひ」

○笹川　上手ぢやどうです？

○服部　丸くをさめたか。

○山崎　道理を詰め、手落なくですね。

○木村　頂上ですか。とにかくいろ〳〵な意味に使つてゐる。

○仙秀追記　「幸若」の「和田酒盛」に、母が虎御前に和田に酌せよといへど、肯ぜぬを、「……母のち樹」（石川流宣作）「時のはやり事」の條に、「神田のめつた町に、德齋とてぬけたるかうやく賣り、いつも貧にてやう〳〵ふうふのとせいをおくりけり、ある時女房いけんしけるは、……ちとはやりごとをいふて、膏藥をうりやれといへば、德齋至極して……」や、「武道傳來記」の、「……玄芳見

立に至極の所あり」の、成程とか、尤もとかに解せらるゝに對して、同書の「鷄鳴かば東に行きて八月十四日に相果つる至極段々語り聞かせ……」は趣意を物語るといふやうに取れる。その用ゐる場合に應じて、さま〳〵に解せられる。

○三田村　尤も至極だね。

○山崎　數學の證明用語に、「完全にして殘りなく」といふのがある、あれでせう。「完全」と「殘りなく」とは定義が違ふので、「至極」はその兩方を兼ねてゐる。

○服部　圓滿なる解決ですか。

○三田村　結局この女を貫つたんですね。

○山崎　一體世之介は何時零落したんです？

○笹川　その時〳〵でせう。

○服部　内々相場を遣つて、取られたりしたかも知れませんな。

○山崎　少し理窟を云へば、お袋はまだ生きてゐるんでせう。その手前、番頭共が時々やかましく云つて、禁治産にする、その時困るといふことでもして置くか。

○笹川　金持ばかりで書いちや、變化が無くて面白くないから、いろ〳〵な境遇を作るんでせう。世之介は一人であつて、實は一人ぢやないんですから……。

○山崎　「廓の金には詰る習ひ」ですかね。

○木村　これは浦里の祖をなすものですな。

○笹川　おいおいと云はずに、「豆腐より出しこまかなる物」なんて、面白い云ひ方をしますね。

○服部　西鶴は二つ三つこみに使ふやうな文章を書くかと思ふと、又一方ではかういふ暢氣な書き方をする。全く捕捉することが出來ません。

○山崎　文章の書き方が強いですね。「舌嚙み切らんとする所」とでもいふところを、「舌かみきる所」と云ひ切つてしまふ。

○木村　この一段は時間が長いやうだけれども、一幕物になつてゐるんですね。世之介はもう舞臺裏で待つてゐるんだから……。

○服部　敵討のところの助六の形ですな。

○宵曲附記　延寶七年の「飛梅千句」に

鍋釜もあると聞たる時鳥　滿平
仲人口の袖のたちはな　西鶴

と云へるあり。

○鳶魚副書　大坂屋のやつこ三笠は色道大鑑に「近世まのあたり見およびたる奴には、江戸の勝山、京には三笠、藏人、大坂にては八千代、御階、大隅等也」と云つた其の女であらう。桃源集（明暦元年刊）にも、三笠の評判が見え、夜物がたり（明暦二年版）に三笠とし十八也とある。

身は火にくばるとも

生玉の御池の蓮葉、毎年七月十一日に、かる事ありて、汀に小舟をうかめ、鎌のは音におどろく、鯉鮒、泥龜のさはぎ、鳰鳥を、追まはし、罪も神前も、忘れ果て、おもしろや、其日は越後町、扇屋のあるじ、穉の寢覺に、もろこし餅、酒など持せて、友とせし人、住吉屋の何、吉田屋の誰、の平といへるおのこ、佐渡嶋傳八、世之介まじりに、東南の嶋崎に、居流れて松の木蔭は、時雨の雨か、ぬれ懸るかゝると、はやり歌、同し口拍子に、なんでも是は、よう揃た、五人ながら、今の世のきゝ男、手くた

の勘定、ふところ懷にありし、文をみるに、ひとつも返事はなし、皆女郎のかたより、思ひをつくしての數〳〵、うき勤の身にも、ほれたといふ事、うれしく思へばなり、色道まれもの、寄たこそ幸、万隱しづくなし、最負なしに、今での、太夫の品定め、けふの暮までのなくさみ、入日も背山にかたふき、名殘おしきは、今すこしの年前、小作り成こそおもひど、顏うつくしく、け高く、心立もかしこし、大橋は、せい高くうるはしく、目つきすゞやかに、口つき賤しく、道中思はしからず、座につきての有樣、歌よまぬ小町に等しく、心さしはよは〳〵として、諸事、禿のしゆんが、智惠をかすぞかし、お琴は、ふつゝか成貌、いやらしき所、それをすく人も有、万かしこ過て、欲ふかく、首すぢの出來物、ひとつの歎也、一座のさばき、終に怪我を見付ず、どこやらに、よき風義そなはりぬ、朝妻は、立のびて腰つきに、人のおもひつく所も有、脇顏うつくしく、鼻すぢも指通つて、氣毒は其穴、くろき事煤はきの、手傳かと、おもはる、され共花車がつて、おとなしく、すこしすんどに、みゆる時もあり、いつれか

太夫にして、いやとはいはじ、朔日より、晦日までの勤、屋内繁昌の、神代このかた、又類ひなき、御傾城の鏡、姿をみるまでもなし、髪を結ふまでもなし、地顔素足の尋常、はづれゆたかに、ほそく、なり恰合、しとやかに、しゝのつて、眼ざしぬからず、物ごしよく、はだへ雪をあらそひ、床上手にして、名譽の、好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲て、歌に聲よく、琴の彈手、三味線は得もの、一座のこなし、文づらけ高く、長ぶんの書て、物をもらはず、物を惜まず、情ふかくて、手くだの名人、是は誰が事と、申せば、五人一度に、夕霧より外に、日本廣しと申せ共、此君〳〵と、口を揃えて譽ける、いつれも、情にあつかりし、過にし事共、語るに、あるは命を、捨る程になれば、道理を詰て、遠ざかり、名の立かゝれば、了簡してやめさせ、つのれは、義理をつめて、見ばなし、身おもふ人には、世の事を異見し、女房のある男には、うらむべき程を、合點させ、魚屋の長兵衛にも、手をにぎらせ、八百屋五郎八まても、言葉をよろこばせ、只此女郎の、人をすてずに、まこと成こゝろを思日合、はじめの程は、高聲せしが、いつとなく、靜に成て、いつれか泪を、こぼさぬはなし、人に笑しかられ、人に笑はるゝを、ほんとする傳八も、此太夫様にはと、なづみぬ、是を聞に、其座にたまり兼て、作りわづらひして、人より先に歸りおもふ程を、書くどきて、よすがを求つかはしける、雨の夜風の夜、雪の道をもわけて、此戀かなふ迄と通へば、心の程を見定、其年の十二月廿五日、さも閙しき折ふし、けふこそしのべとの、御内證、さる揚屋に、いつよりはやく、御出あつて、待給ふこそ嬉しく、上する女に、心をあはせ、小座敷に入て語りぬ、如何思召しけん、火燵の火を消せて、折柄のはげしきに、是をふしきに、思ひながら、數〳〵わけもない事共して、興ある所へ、其日のお敵、權七様御出と、呼つぎぬ、すこしもせかず、火燵の下へ隱れけるこそ、最前をおもひ合て、かしこき御心入、忝くて、譬、やけ死ぬるとも、爰ぞかし、彼男、不思議のたつやうに、べつの事もなき、文持ながら、臺所へ、逃られしを、男追掛みる、見せぬのあらそひ、屢し隙入うちに、世之介は裏へ、戀のぬけ道有ける

○松本　昔から生玉の御池の蓮の葉を、毎年七月十一日に刈ることがあつて、汀に小舟を浮べ、蓮を刈る鎌の音に驚いて、鯉や鮒や泥鼈が騒ぎます。或は鴨鳥を追ひ廻したりして、罪も神前も忘れてゐるのが面白い。丁度その日は、越後町の扇屋の主人が、秋の夜の寢覺に、もろこし餅と酒を持出して、住吉屋の誰とか、吉田屋の誰とか、の平といふ男、それに役者の佐渡嶋傳八、世之介などもまじつて、嶋崎といふところに居流れて、「松の木蔭は時雨の雨か、ぬれ懸る、かゝる」といふ流行唄を口拍子で唄つてゐる。五人とも氣の利いた男ですから、その唄がよく揃ふ。「手くだの勘定」は、遊んだ時の手管でせう。女郎のところから來た手紙があるが、一つも此方から返事はしてゐない。皆女郎の方から思をつくしてゐるので、さういふ勤の身でも、惚れたといふことを嬉しく思ふからのことである。色道の方ではすばらしい稀物の寄つたのを幸に、何でも隱したり、贔屓をしたりせずに、現在の太夫の品定めをしよう。日の暮れまでの慰みに、「入日も背山にかたふき」といふ、この「背山」は太夫の名ですか。

○三田村　さうぢやないだらう。

○山崎　地の文章へ織り込んではあるが、同時に「背山」といふ太夫名でもあるのでせう。「今少しの年前」といふまで勤めてゐるので「入日も傾き、名殘惜しき」と利かせて……。

○松本　背山は顔も美しく上品で、心立も賢い。次の大橋は、丈は高く、綺麗で、目つきも涼しいが、口つきは卑しく、道中姿も思はしくない。座についてからの様子は、歌をよまない小野小町のやうで、心ざしが弱々として、禿のしゆんが智慧を貸して、すべてのことをする。お琴は不束な顔で、いやらしい所があるが、又それを好く人もある。萬事賢過ぎて、欲張つてゐて、首筋にある出來物が歎きの一つである。が、一座の取捌きは麁相もなくて、どこかいゝ風儀が具はつてゐる。朝妻は丈が高くて、腰つきに人の思ひつくところもあり、横顔が美しい。鼻筋も通つてゐるけれども、氣の毒なことは、その鼻が黑くつて、煤掃の手傳かと思はれる。しとやかでおとなしく、いづれも太夫にして厭とは云ふまい、といふやうなことですか。

○山崎　このはじめのところは、「鵜飼」の謠を取つてゐます。「底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひあげ、隙なく魚を喰ふ時は、罪も報も後の世も、忘れ果てて面白や」とある。

○服部　この品定は源氏の雨夜の品定からも來てゐるでせうが、古今集の序の文句も蹈まへてゐますな。

○山崎　「心ざしはよは〳〵として」といふのも、古今集序に「小野小町はあはれなるやうにてつよからず、いはゞよき女のなやめる所あるに似たり」とあつて、それを引いた謠曲「鸚鵡小町」に「歌の様さへ女にて、唯よわ〳〵と詠むとこそ、家々の書傳にも記し置き給へり」ともあり、そこで此女郎のことを「歌よまぬ小町」とたとへたのでせう。

○笹川　佐渡嶋傳八は人形遣でしたね。

○服部　「よう揃た」は兩方へかゝるので、囃し詞ぢやありませんか。

○山崎　本來なら絲にかけて唄ふべきだけれど、それを口拍子でやる。その拍子がよく揃つたといふこと、氣の通つた人達が一座によう揃うた、といふのと兩方でせう。

○三田村　これは踊唄で、「そろた〳〵、よう揃た」と云つて遣るんだらうと思ふ。

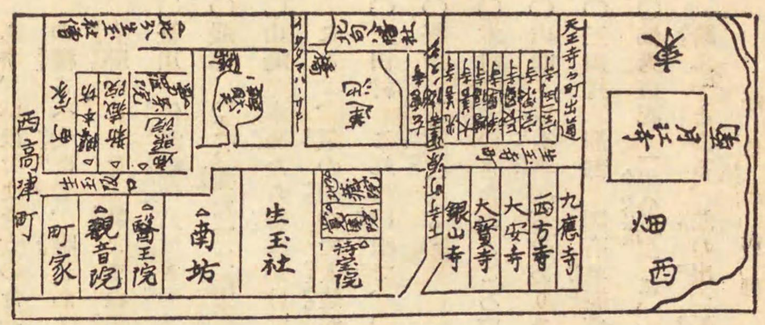
○笹川　「嶋崎」は？

○木村　池のさきのところぢやないですか。

○山崎　固有名詞ぢやありませんか。

○三田村　服部　固有名詞ぢやなしに、池の出つ張りのところでせう。

○仙秀追記　「薦分船」に、「――門前のかたはらに淵々たる池水の嶋さきに辨財天の一社鎭座ならせ給ふ」とある、池の出つ張りが、いつの間にか固有名詞みたいになつたのらしい。それからこの生



公私要覽所載（寶永六年板）

玉の蓮が當時有名なものであつたことは、延寶四年板の「難波十二景」（大阪の風景を詠じた詩集）にも、玉池白蓮の題で、滿池齒落瀧漪、直立亭々自不枝、克使周郎說君子、豈將張六汙淸姿、雨晴淵客珠浮淚、雲散陽臺月啓眉、彷彿鑑湖三百里、適來何處問西施、とあり。同八年板で大阪四時の景物を詠じた、「難波十觀」にも、生玉池の白蓮と題して一首を載せてある。

○笹川　「文をみるに、ひとつも返事はなし」といふと、何だか返事が來なかつたやうになりますね。事實は返事をしなかつたんだけれど……。

○木村　この連中は新町の揚屋の主人ですね。住吉屋は長四郎、吉田屋は喜左衞門です。

○服部　の平は太鼓持らしい。

○三田村　買手の浮れ客ぢやなしに、內輪の玄人筋の批判だから、自ら違ふんでせう。

○笹川　越後町は新町の中ですか。

○木村　さうです。「浪花靑樓志」に、「越後町並阿波座揚屋町」の條に、「佐渡嶋町の大西揚屋町の一丁の古名にて街の小門有りしに享保九年失火あり、佐渡嶋町の支配と成りて舊名を闕たり」とあります。

○山崎　「もろこし餅」は？

○三田村　もろこしの團子でせう。

○服部　脇顏は、昔は女の脇顏が大事だつたので、今のやうに灯がぱつと明るくありません、蠟燭の灯ですから、それに照される脇顏の美しいことが肝腎だつたのです。殊に太夫は客と竝んで坐つてゐますから、餘計脇顏が問題のわけです。

○三田村　「手くだの勘定」といふのは、差引のことで、差引は線を引いて、彼方へ引いたり此方へ引いたりする。だから系圖のことを勘定書きと云ひます。今は計算のことになつてしまつたけれども元來はさうぢやない。坐つたところが小町に似てゐる、といふのは、お品ぶつてゐるので、道中は奴風俗の方がいゝんだから、さういふ女では引立たない。張が强くないから、いろ〳〵な事に禿の智慧を借りる。こんなことはあるまじきことで、だから「心さしよは〳〵として」ゐると云つた。

お孝は引舟で、つけもの〻女です。近頃の江戸なら「番新」といふやつだ。鼻の穴の黑いといふのは鼻毛の多いことで、「吉原袖鏡」だつたか何だかの中にも、鼻の穴の黑いことを非難の中に入れてあつたのがあります。鼻毛の多いのさへ缺點になるので、これは仰向いた時にわかる。極めて微細な話です。「すこしすんどに」これはつんとしてゐるんぢやないか。

○笹川　山崎　「ずんど」ぢやありませんか。花活の「ずんど」などいふ、あれで……。

○服部　或はス〻ドイなどといふところから來て、鋭い意味でせうか。

○山崎　私は、寧ろ曲折の無い、一本調子のやうなのを指摘したものと思ふのです。

○三田村　要するに愛敬が無いんですね。

○服部　これや皆實在の女でせうな。

○山崎　モデルがありませう。

○木村　當時の人が讀めば、きつと「あれだな」といふところがありましたらう。

○松本　朔日から三十日まで、一月中の勤に、家内繁昌する、神代以來類の無い太夫、「御傾城の鏡」は手本といふことでせう。別にお化粧をしないでも、地顏や素足で、恰好がよくつて、眼の光も鋭くない。床上手でもあり、酒も飲めば、歌もい〻聲である。琴も三味線も得意で、一座のこなしも大變よく、文を書くのに、文面も上品で、而も長文の書き手である。物を貰ふことはしないが、人に遣ることは惜まない。かういふのは誰だらうか、と云つたところが、五人の者が一度に、それは夕霧より外に無い、日本廣しと雖もこの人だけだ、と云つた。いづれも一度買つたことがあると見えて、いろ〳〵夕霧の話をする。若し通ふ人が命を捨てるやうなことになれば、よく道理を詰めて遠ざけるやうにする。浮名が立か〻ると、料簡してやめさせる。あまり通ふことが募れば、義理を話してやめさせる。身を思ふ人には、いろ〳〵世の中のことを話して異見するし、女房のある人には、お上さんが恨むだらうといふことを話して納得させる。魚屋の長兵衛にも手を握らせれば、八百屋の五郎八にまで言葉をかけてよろこばせる。人を捨てずに、まごころからさういふことをしてゐる。はじめのうちは聲高に話してゐた人も、いつの間にか靜かになつて、涙をこぼさないものは無い。人にをかしがられ、人に笑はれるところの傳八でも、この夕霧には敬服した。これを聞くと世之介はもうその座にゐられなくなつて、急に假病を使つて人より先に歸つて、早速手紙を書いて、夕霧のところへ遣りました。

○服部　全くこの通り出來る人があれば、先づ傾城の神様でせうな。

○山崎　近頃の譽言葉ぢやア「大統領」つて處。「眼ざしぬからず」は利口さうなことでせう。

○服部　「はづれゆたかに」これは先達「彗星」の追補にも出して置きましたが、小笠原流の「女中手鑑」といふ本に、「御爪はづれの事」とあつて、手の爪のことになつて居ります。女の爪は丸く取らない、先を尖らすやうにするのです。

○笹川　その方が恰好がいゝでせう。

○服部　巴里あたりの美容術でも、爪は三角に取つて、先を細く見せるやうにするさうです。

○三田村　佛像でも天部の爪はさうなつてゐますね。

○服部　例の有名な夕霧は、肺結核で死んだといふことになつてゐるが、「しゝのつて」といふと、優形の形容ぢやありませんな。

○笹川　あの夕霧と同じですか。さうぢやないでせう。

○服部　「長ぶんの書て」とありますが、これは大に情緒纏綿たる名文を書いたんでせう。遊女の文といふものは、古いところは多く七八行の短いものです。

○三田村　多く短いから、長いのがよかつたんでせう。

○服部　こゝに「魚屋」とありますが、この「屋」といふことが、今でも大名言葉に殘つて居ります。「屋で買つたらよからう」とかいふ。はじめ聞いた時は、わからないで面喰ひました。

○三田村　町屋の省略でせうな。

○服部　省略でなしに「屋」とだけいふのです。

○笹川　「屋内繁昌」なんかもそれですな。

○松本　雨の夜も風の夜も、雪の降るのも構はず、この戀がかなふまでは、といふ調子で通つたので、夕霧もその心の程を見定めて、忙しい折ふしに、今日忍んで來い、と云つて呼びに來た。さうして或揚屋にいつもより早く來て待つてゐる。「上する女」といふのは何ですか。

○服部　取廻しをする女でせう。

○松本　その女が心を合せて、世之介を小座敷へ通して逢はした。ところが火燵の火を消させたので、この寒さの烈しいのにどうしたことか、と不思議に思つてゐると、その日の御客權七様がお出になつた、と云つて來た。夕霧は少しもせかずに、世之介を火燵の中へ入れて隱してしまふ。先刻火燵の火を消したことを思ひ合せて、成程賢い人だと感心した。こゝなら死んでも構はないと思つてゐると、夕霧の方では、わざとそのお客が不審がるやうに、何でもない文を持ながら、その男に見せまいとして、臺所の方へ逃げて行つた。男が追かけて行つて、見せろとか、見せないとか云つてゐる間に、かなりひまがかゝつたので、世之介は火燵から拔けて行つてしまひました。

○木村　これも世之介を籠絡する夕霧の一つの手段だな。
○笹川　「お敵」は相手といふことでせう。
○三田村　火燵の下へ隠れることはよくある。夕霧の芝居には火燵は無かつたかな。
○服部　仁左衛門が若い時やつた片岡家の夕霧に、火燵の上へ飛上つたりして、癡態をつくすことがあります。ちよいと馬鹿々々しい面白味がありました。
○山崎　「彼の男不思議のたつやうに」は、わざと祕し隠しをするやうな様子をして見せたんですな。
○服部　「不思議のたつやうに」が面白い。
○山崎　この「すこしもせかず」は夕霧ですね。火燵へ隠れるのは世之介だ。それから「彼の男不思議のたつやうに」と、さし迫つた感じを一遍に書いてゐる。
○樂堂追記　世之介が品定の一座を抜けて歸る處から以下は、謡曲「忠度」の文段に據つてゐるらしい。「さもいそがはしいかりし身の、心の花か蘭菊の、狐川より引きかへし、俊成の家に行き、歌の望みをなげきしに、望足りぬれば、……暫しと賴む須磨の浦、……六七騎にて追つかけたり、……」云々の一段。

心中箱

風待暮、河原の凉み床を、見わたせば、柳の場々の、長七提煙草盆に、大團を持まぜ、人たづぬる風情、やれ、うつけもの、外より見ての笑しさ、誰をか慕ふと、きけば、物いはす笑ふて、指さす方に、我が女房を、常ならぬ、出立、やとひ腰本、やとひ下女、おのれも、與七になつて、主あしらひ、是は替つた仕出しと、様子を問へば、日來は手づから、食を燒せ、釣瓶繩を、たぐりあぐるも、此男をおもふ故ぞかし、毎夜更て歸れども、一度も戸を、たゝかせず明て、今宵は、待兼ぬうちに、はやきお仕舞、御機嫌は、首尾はと、世間内證ともに、心を付ぬる、かはゆさに、責而けふこそ、人のおか様並に、被をきせて出懸、暮たらば、あの姿を其まゝ、横にこかして、我世の思ひ出さす事なり、いつも獨寢のうらみ、いはねばこそなれ、太鞁持の女房には、成まじき物と、おもふそかし、尤長七がいふ所、まことに、此女は、もと彼里にて、藤なみにつきし、はるといへる、やり手なり、互におもしろつくの、御ゑんへん、春が

もらひためし、少金はへらさぬかといへば、長七苦ひ顔して、それはいつの事、まだ子をむまいて仕合と、身ぶるひして、世のからき事を語る、是からすぐに、我方にて、夜ともに、昔しを聞たし、きかせ度事もありとて、伴ひ人まれ成、奥座敷に入れば、あしからぬ匂ひ、しきりに、油嗅きは、かゝなんと、合點がゆかぬと、夫婦、鼻つき合ありけるに、けふは傳受物の、土用ほしすると、仰られける、小書院に、一つの箱あり、上書に、御心中箱、承應貳年より、已來としるして、此中に、女郎わか衆、かための證文、大形は血文なり、床柱より、琴の糸を引はえ、女にきらせたる黒髪、八十三迄は、名札を讀ぬ、其跡は計るに、暇なし、右のかたの、違棚の下に、肉つきの爪、數をしらず、其外服紗に、包し物、山のごとし、是も何ぞで有べし、只此有様は、執心の鐘鑄の場、善の綱かとおもはれ、なを御次の間をみれば、らく書の緋むく、血しぼりのしろむく、後の朝の名殘を、そめ〳〵と、書つゝけたる著物、十六形の地紫、あれは、花崎様の念記、紋つきの、三味線、きやふを、上下、帶を中へりにして、姿

繪の懸物、其かぎりなく、是程までは、おほくの女に、思ひをさせ、執著御のがれあるまじと、申言葉の下より、床の上なるかもじ、忽四方へさばけ、のひては縮み、二三度飛あがりて、物いはぬ計、生あるけしき、みるに身の毛たつて、おそろしく、是はと尋ければ、是ははるも覺があらう、段々わけあつて、藤なみにきらせたる、髪と爪也、中にも、今にわすれねば、かく置所までを、うず高く、假にも、化には思はず、或時は夢、或時はまぼろし、又は現に目見えて、今請られてゐる、男の首尾もかたる、更にあはぬとはおもはず、人には咄れぬ事までもありて、殊に前夜の、別れさまに、織出しの嶋縮緬、貴様にきせたらば、ぬけるほどよき、羽織ならんと、置て歸る、夢にもせよ、是があるこそ不思議、是をかたらうとおもふて、よれとは申侍る、春も、長七もおどろき、誠に藤さまは、いかなる事にや、かた様には、身捨、命を惜み給はず、此事京都に、隠れもなしと、語り捨て、それより春は、藤浪様へ見舞へば、かの縮緬、一卷見えぬはと、せんさく半へ行懸り、偸になみ様へ、様子語れば、太夫涙を

ながし、いかにも世之介様に、是をとおもひし、心の通ひけるか、寐ても覺ても、忘れねば、ながらえて、此勤せんなしと、手つから鬢をはらひ、出家の望の暇を申、世上を見限り、尼寺に懸こみ、願ひの道に入ぬ、女郎一代のほまれ、勝てかそえ難し

○笹川「風待暮」夕方で風を待つてゐる。河原は四條河原で、夕涼みの床を見渡すといふと、柳の馬場にゐるところの長七、これは太鼓持ですね。それが提げるやうになつた煙草盆に、大團扇を一緒に持つてゐるんでせう。何か人を探してゐるやうな様子である。お前はたはけものだ。外から見てゐるとをかしい、と云つたが、返事もせずに笑つて指さす方を見ると、長七の女房が木斷のやうでないなりをして、雇ひ腰元、雇ひ下女、これは俄に雇つたものでせう。自分も家來の長七になつて、女房を主人扱ひにしてゐる。どういふわけかと聞いて見ると、日頃は女房が飯を焚いたり、釣瓶縄を手繰つて水を汲んだりするのも、皆私のことを思つてくれるからのことである。毎晩夜更けて歸つても、一度も戸を叩かせるやうなことなしに、内から戸を明けて、今夜は待ち兼ねないうちに早

くお歸りでしたが、御首尾の方は如何でした、といふ風で、世間にも内證にも心をつけてくれる。その可愛さに、今日ばかりは人の細君と同じに被をきせて、夕方になつたら、あのまゝ横にして、この世の思ひ出をさせてやらう、といふんですか。

○山崎　人生の、……でせう。

○笹川　いつも獨り寢をさせて置く、その恨みも云はなければこそである。尤も長七のいふところは嘘ではないので、この女はもと嶋原で、藤なみといふ遊女についてゐたはるといふ遣手である。互に面白づくで一緒になつてしまつた。「少金」は？

○服部　臍繰金でせう。

○笹川　あれはどうしたかといふと、長七は苦い顏をして、もうよほど前に無くしてしまひました、まだ私のところは子供の無いのが仕合な位のものです、と云つて、世の中のつらいことを話した。それぢやこれから己のところへ來い。一晩昔の話を聞きもし、聞かせもしたいといふので、人の少い奥座敷へ通ると、何だかいゝ匂がする。油くさいのもこんなもの――こんな匂か、ですか。

○山崎　さうでせう。

○笹川　それぢやあまりいゝ匂でもないですね。

天下一加賀樣正書（七人比丘尼）所載

○三田村　併し伽羅の油だから、惡くもないでせう。

○笹川　今日は傳へて來たものゝ土用干をする、といふことで、上書に「御心中箱、承應貳年より已來」と記した一つの箱がある。女郎や若衆からよこした二世の固めの證文、「血文」は血判を捺したんでせう。それとも血書ですか。

○三田村　山崎　血判の方でせう。

○笹川　床柱から琴の絲を引張つて、それに女に切らせた黑髪が吊してあるんでせう。その名札を八十三までは讀んだが、あと

好色一代男

はどの位あつたか、勘定も出來ない。右の方の違棚の下には小指を切つた肉つきの爪、その外袱紗に包んだものが山の如く積んである。これも何かであらう。その有様は、執心の鐘を鑄たやうな、善の綱かと思はれる。次の間を見ると、緋無垢の上に落書がしてある。血染の白無垢がある。きぬぎぬの名殘を「そめ〳〵」といふのは？

○木村　しみ〴〵ぢやありませんか。「日本永代藏」卷一に「――封じ文一通拾ひあげしを取りてみれば、花川さままゐる二三よりと裏がき、そくひ付けながら、念を入れて印判おしたるうへに、五大力井とそめ〴〵と筆をうごかしける」とあります。

○笹川　「十六形の地紫」といふのは、麻の葉みたいになつてゐるんですか。

○三田村　山崎　十六武藏の劃線のやうな形なのでせう。結局は麻の葉と同じやうになりますが……

……。

○笹川　三味線の紋は何處へつけます？

○三田村　海老尾でせう。

○笹川　蒔繪ですか。「きやふを上下」といふのは、懸物の天地でせう。「姿繪」は浮世繪ですな。これほどまで澤山の女に思はせた、その執著は逃れられまい、といふ言葉の下から、床の上に置いた

髢が、忽ち四方へさばけ、伸びたり縮んだりして、二三度飛び上つた。ものも云はぬばかりに、如何にもそこに頭があるやうなので、身の毛がよだつて、これは何ですかと尋ねた。さうすると、これは春もおぼえがあるだらう、いろ〳〵わけがあつて、藤なみに切らせた髪と爪である。澤山かういふものゝある中にも、これだけは忘れかねて、置場所も高いところにして、假にも仇には思はない。「或時は夢、或時はまぼろし、或時は現に目見えて……」こゝのところは如何ですか。

○木村　夢の中ぢやありませんか。

○山崎　夢の中で、藤浪が目下請けられてゐる男の話までする、といふんでせう。

○笹川　世之介が夢を見るんですか。殊に前夜別れる時に、「織出しの嶋縮緬」は縮緬に縞があるのか、小濱縮緬といふやうな名ですか。

○三田村　「織出し」は今はじまつたことでせう。さういふ縞縮緬があつた。

○松本附記　織出の嶋縮緬や本おく嶋のはやつたのは寛文延寶頃の事であらうから、是は其のはやり初であらうとの事です。

○笹川　これをあなたに著せたらば「ぬけるほど」

○三田村　徹底かな。

○笹川　さう云つたのは夢でも、こゝに縞縮緬のあるのが不思議である。これを話さうと思つて呼んだのだと聞いて、長七も驚いて、全く藤なみ様は、あなたには「身捨、命を惜み給はず」は繰返して云つたのでせう。このことは京中に隠れのないことだと云ひ捨てゝ、その足で藤浪の方へ行つて見ると、縞縮緬が一卷見えない、と云つて穿鑿してゐるところだつた。ひそかにこの話をすると、實はあの方に上げようと思つたので、その心が通じたのか。寢ても覺めても世之介のことを忘れることが出來ないから、この勤をしてゐても仕方が無い、と云つて、自分で元結を切つて、出家の望があると云ふことで、暇を申して尼寺へ駈込み、願の通り佛門に歸した。この女郎一代の譽れは擧げて數へがたし、まだ他にも澤山ある、といふ意味でせうな。

○三田村　服部　山崎　さうでせう。

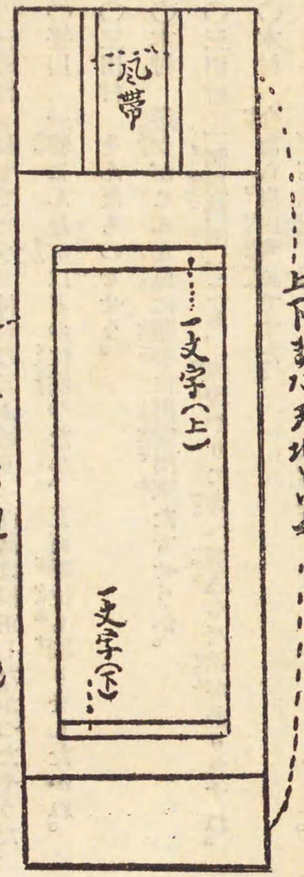
○木村　「きやふを上下、帶を中へり」といふのは所謂本表具といつて、裂が三段になるのです。脚布は少々困りものですね、中べりにはぬひとり物などをよく使ひます。

○服部　こんないゝ遊女のはありませんが、さういふものを表具に使ふ惡趣味がありますな。「傳受物」は古今傳受などの傳受ですか。

○山崎　祕密物、といふ程のことでせう。

○笹川　家寶ですか。祕密物がいゝですかね。三鳥の傳も祕密には違ひない。

○木村　今でも上方では「おか様」と云ひますか。「椀久一世物語」に「……根引してゆく女郎を、京の揚屋遣手末社是れまで送ると聞えける、挨拶は國元の母親も長う取つてことし來年のうちには極樂か地獄へ遣るべし、したらば此君をおかさまといはして大黑柱にもたれかゝらして、脇から見るやうなといへば、何れも其仕合せを此上ながら願ひ奉るといさめける……」私の鄕里（弘前）などでは、「おかさま」といひます。其家の主婦であることは、「椀久一世物語」と同じ意味です。



○山崎　上方ではあまり云ひません。

○笹川　「執心の鐘鑄の場、善の綱」これは何です？　やつぱり道成寺ですかね。八十三といふ數は意

味がありますか。

○服部　わざと半端にしたんでせう。

○山崎　その方が實際らしく聞えるから……。

○木村　原本には「おのれも與七になつて」とあるが、これは與の字は略字を用ゐてゐるので、草書の長の字との誤でせうな。

○三田村　長七でせう。林君の云ふ通り、西鶴は校正しなかつたやうだ。

○笹川　一體こんな本はどの位刷つたか、五百部位も刷りましたかね。

○三田村　そんなものでせう。

○木村　遊女がこんな風に勝手に出家出來たでせうか。

○三田村　「洞房語園」にも、無理やりに寺へ飛込んだ話がありますね。

○木村　今なら自由廢業ですな。

○三田村　自由廢業の早いところだ。尤も寺へ飛込んでしまつては、連れ戻つても賣物になりませんから……。

○服部　「今請られてゐる」といふのは、請出されたことぢやありませんか。

○山崎　イヤ私は、款待されてゐるとの意味で、これは現役と解するのです。

○服部　妾奉公とは取れませんか。

○山崎　「此勤せんなし」といふのが、どうも廓にゐないと工合が惡いやうに思ひますがね。

○服部　それでは客止めになつてゐる人位のところで、妥協して置きませう。

（笹川氏退席）

寢覺の榮　好

京屋仁左衞門が、自慢せし、庭の松さへ、枝おれて、すこしは惜まるゝ夜の大雪、おのつから、風がのまする酒に成て、さあ、是からは、枕かる山、蒲團に肌もつけあへず、同し寢姿、つれ鼾、いつとなく、出てけり、あい床には、新屋の金太夫、槌屋の萬作にきかれて、笑はるゝもしらず、こゝろよく、夢ひとつ二つ見しうちに、御舟額に浪立、眼をひらき、聲あらく、弓矢八幡、大事は今、七左様のがさじと、左の肩さ

きに、かみつき、歯ぎりして、こぼす泪雨のごとし、是をおどろき、我は世之介なるがと、せはしく斷てどよめば、御舟まことの、夢覺て、何事も、御ゆるし有べし、我がうき名、隱す迄もなし、丸屋七左衞門との、現に目みえて、世をおもふゆへに、戀をやむるとの一言、さりとは悲しく、今の有樣はづかしやと、身もすつる程のけしき、漸々いさめて、かく馴そめしより、已來の難義を聞に、またの世につゞきて、出來まじき女なり、起別るゝ風情も、しとやかに、さゝもよき程に飲なし、よびましやといふ聲も、更に聞いれず、客こゝろを、のこさぬ迄ありて、內義女房共にも、うれしかる程の、暇請、塗下駄のをと靜に、さしかけから笠もれて、ふる雪袖をいとはす、大やう成、道中何とて京にては、太夫にはせなんたぞ、尤うつくしからず、たはけとも、太夫は、それによるものかと、歸さのうしろ姿を、詠盡し、獨さひしき、二階にあかれば、迎の遲き女郎、茶釜近くあつまりて、取置椀箱の、じやまなし、こゞり鮒の、鉢をあらし、湯の水のと、口の隙なく、丸盆割て、さらぬ體に直し置、城浪が、三味

線ふみおりて、しらぬ顏にして、置所かへらるゝなど、くらがりより、見ての笑しさ、肴懸の、干烏賊も動き、煎海鼠も、躍ほとの事ぞかし、立さまに、著物ひとつになり、或は下上に著替、軒の玉水に、おどろき、責而、門口計には、竹樋を、懸られう事じや、氣のつかぬ仁左衞門と、聲高にのゝしり、賤しき事そかし、或太夫は吉田屋にて、毛馬の里人の、緋縮緬の下帶、無理取にして、あけの日はやく、脚布にせらるゝとや、去太夫は、肌にあやけんの巾著はなさず、其中には、黃色にして、飯櫃なりなる物、したゝか入て置れしを、みる子細あつて、用心時の夜道、こゝろもとなきと申せし事ぞかし、此心根いやな事にぞ有ける、此外見とがめて、五とせあまりの事共、其かぎりしらず、名を書事もむごし、只影を嗜み給へと、人のいふ事よく、合點する、女郎にうなづかせて行に、越後町の北かわ、中程の隔子に、寢覺かち成聲して、學鰹の指身が、喰たいと、いはれし、尾もかしらもしらず、是は聞所じや、いづれもだまれと、耳の穴ひろげて、ひとつ〳〵覺侍る、太夫殿の聲として、おれはくるみあ